バリアフリー映画をスタンダードにするために

「バリアフリーによる映画鑑賞の機会均等を目指して」

バリアフリー映画を
スタンダードに
するために　2010

バリアフリー映画をスタンダードにするために 2010

ごあいさつ ―― 03
本年度の制作作品 ―― 04
バリアフリー映画祭　プログクラム ―― 05
上映会の様子 ―― 06
さが映画祭レポート ―― 09
「びわこアメニティー バリアフリー映画祭2011」アンケート調査結果 ―― 10
「バリアフリーさが映画祭2010」アンケート集計 ―― 28
トークセッション ―― 40
公開研究会 ―― 52
聴覚障害者１人１人が楽しめる映画鑑賞支援を目指して ―― 70
バリアフリー映画のこれから ―― 73
要望書 ―― 76
バリアフリー映画製作現場より ―― 80
研究者一覧・研究会の日程・フィルムの貸し出しについて ―― 82

ごあいさつ

北岡賢剛　研究会委員長

本研究会のまとめの時期に、東北地方太平洋沖地震が発生しました。被災された方々にお見舞い申し上げるとともに、私たちに何ができるかを研究に携わった関係者一同で考え実践していく所存です。

震災による混乱の中ではありましたが、誰もが一緒に映画を楽しめるような真のバリアフリー映画を目指して、三年目の研究を終えることができました。

今回は、「牛の鈴音」「老人と海」の二作品のバリアフリー版製作を柱に、二つの大きな映画祭に携わること、そして、より多くの方々にバリアフリー映画に触れていただくことを目的にすすめてきました。

過去二年間に鑑賞していただいた方々からのアンケートの結果をふまえつつ、映画監督や製作者にもバリアフリー版製作にあたって、また、今後の新たなるバリアフリー版製作に向けて、意見交換をする場面も設けることができました。

この研究会を機に、自主的にバリアフリー版の製作に乗り出す映画製作会社が見受けられるようになったり、民間助成団体からのバリアフリー版製作に対する助成の話も出てきています。

誰もが自分の「壁」を乗り越えるために、バリアフリー映画はあります。映画監督や製作者、活動弁士や俳優、福祉に関わる人たちや障害のある人たち、そして高齢者も若者も映画が好きな誰もが参加するのが、本当のバリアフリー映画であると思います。

映画はエンタテインメントだからこそ、思い切って、楽しく身近な世界から変えていける。私たちの世界をもっと豊かに拓くため、『バリアフリー映画をスタンダードに』を合言葉に、今後も、各地の取り組みにつながっていくことを願ってやみません。

本年度の制作作品

『牛の鈴音』

監督…イ・チュンニョル
韓国映画／スタジオ・ヌリンポ
2008年／1時間18分
第13回プサン国際映画祭・最優秀ドキュメンタリー賞、第34回ソウル・インディペンデント映画祭・観客賞、第16回カナダ・ホットドックス国際ドキュメンタリー映画祭・アーティスト賞ほか受賞

79歳になる農夫のチェ爺さんには、30年間もともに働いてきた牛がいる。普通は15年しか生きない牛が40年も生きた。それは、お爺さんとの絆がなしえた奇跡なのだろうか。お爺さんとお婆さんが同じ日常を繰り返し、60年以上も連れ添っていることも、現代から見れば奇跡かもしれない。彼らの命の営みは、切なさを超えた深い感動を観客にもたらすだろう。

『老人と海』

監督…ジャン・ユンカーマン
出演…糸数繁
シグロ／2010年／1時間38分
ニューイングランド映画祭・グランプリ、文化庁優秀映画作品賞受賞他

今から20年前、荒々しくも美しい自然が残る与那国島に、サバニと呼ばれる小舟を操り200キロもの巨大カジキを追う老漁師がいた。当時82才だった海人・糸数繁さん。じいちゃんのカジキ漁を2年間にわたって追ったドキュメンタリー。島の人々に支えられ、ばあちゃんを愛して海に行き、海を愛して漁に出る。じいちゃんは長い不漁に苦しみながらも、自然への敬意と漁師の誇りを忘れず、1年後、ついにカジキとの格闘に打ち勝った。まっすぐなじいちゃんの生き方や、自然と人間とが共存する姿から、人が生きる事の根源的な強さと豊かさがはっきり見えてくる。

バリアフリー映画祭プログラム

上映作品タイトル

酔いがさめたら、うちに帰ろう。
©2010 シグロ/バップ/ピターズ・エンド

牛の鈴音
©2008 STUDIO NURIMBO

おくりびと
©2008 映画「おくりびと」製作委員会

春との旅
©2010「春との旅」フィルムパートナーズ

猫の恩返し
©2002 猫乃手堂・GNDHMT

耳をすませば
©1995 柊あおい/集英社・二馬力・GNH

武士の家計簿
©2010「武士の家計簿」製作委員会

しがらきから吹いてくる風
©1990 シグロ

老人と海
撮影 本橋成一 ©1990 シグロ

ぐるりのこと。
©2008「ぐるりのこと。」プロデューサーズ

ニセ札
©2009「ニセ札」製作委員会

びわこアメニティー バリアフリー 映画祭2011

2011年2月4日(金)～6日(日)
大津プリンスホテル本館2F「比良」

11月26日(金)
- 11:00～13:40 **武士の家計簿** ＋関係者舞台挨拶
- 14:40～16:35 **ニセ札** ＋オープニングセッション(木村祐一・古川康)
- 18:00～20:30 **おくりびと** ＋滝田洋二郎監督舞台挨拶

11月27日(土)
- 9:30～11:45 **耳をすませば**
- 12:30～13:30 **トークセッション**
- 13:45～16:25 **ぐるりのこと。** ＋山上徹二郎プロデューサー舞台挨拶
- 17:15～19:05 **牛の鈴音** ＋コー・ヨンジェプロデューサー舞台挨拶

11月28日(日)
- 9:30～11:05 **猫の恩返し** ＋森田宏幸監督舞台挨拶
- 12:00～14:00 **老人と海** ＋ジャン・ユンカーマン監督舞台挨拶
- 15:00～17:30 **酔いがさめたら、うちに帰ろう。** ＋東陽一監督ほか舞台挨拶

2月4日(金)
- 12:30～14:44 **春との旅**
- 15:10～16:28 **牛の鈴音**
- 17:00～18:31 **しがらきから吹いてくる風**
- 19:00～20:58 **酔いがさめたら、うちに帰ろう。**
- 21:30～23:04 **ニセ札**

2月5日(土)
- 9:00～10:18 **牛の鈴音**
- 10:50～13:04 **春との旅**
- 13:45～15:43 **酔いがさめたら、うちに帰ろう。**
- 17:14～18:45 **しがらきから吹いてくる風**
- 21:30～22:30 **シアタートーク**
- 22:40～24:14 **ニセ札**

2月6日(日)
- 9:00～10:58 **酔いがさめたら、うちに帰ろう。**

バリアフリー さが映画祭 2010

2010年11月26日(金)～28日(日)
アバンセ

上映会の様子

バリアフリー
さが映画祭
2010

会場風景

トークセッション『バリアフリー映画をスタンダードに』

公開研究会

活弁師・佐々木亜希子さんによる副音声ライブ

会場風景

[illegible]（左から）森田宏幸監督/中島一監督/ジャン・ユンカーマン監督

映画祭会場：アバンセ

古川康佐賀県知事と木村拓一監督　トーク

さが映画祭レポート

去る平成22年11月26日～28日にかけて、佐賀県佐賀市「アバンセ」にて「バリアフリーさが映画祭２０１０」が開催されました。バリアフリー映画に特化した映画祭としては世界初の試みであり、大好評だった佐賀での映画祭。

障害者保健福祉推進事業（障害者自立支援調査研究プロジェクト）において20年度は「映画活弁士の活弁手法を生かした視覚・聴覚障害者のための副音声の開発ならびに制作事業（バリアフリー映画制作事業）、21年度は「バリアフリーによる新しい映画鑑賞の技術開発研究事業」として既存映画への副音声と字幕を挿入する作業を進めてきました。この「バリアフリー研究会」を中心に製作された作品が今回の映画祭で公開されました。

舞台挨拶・トークセッション

一日目、「ニセ札」上映後には監督の『キム兄』こと木村祐一さんが舞台挨拶をされ、佐賀県知事の古川康さんとのトークライブを行い、二日目には古川康知事、東陽一氏（「酔いがさめたら、うちに帰ろう。」監督）、大河内直之氏（東京大学先端科学技術研究センター）川野浩二氏（メディア・アクセス・サポートセンター事務局長）、そしてこの映画祭の総合プロデューサーである山上徹二郎氏（シグロ代表）によるトークセッションが行われました。さらに韓国において累計３００万人を動員したドキュメンタリー映画「牛の鈴音」のプロデューサーのコー・ヨンジェ氏も佐賀に駆けつけてくれました。三日目にはスタジオジブリ作品の「猫の恩返し」上映後に森田宏幸監督、「老人と海」の上映後にはジャン・ユンカーマン監督による舞台挨拶がありました。

USTREAMの活用

今回の映画祭の特徴はこの映画祭に並行して行われた「バリアフリー映画公開研究会」や会期中行われたトークセッションの模様を、インターネットライブ動画配信サイト「USTREAM（http://www.ustream.tv/）」を使ってリアルタイムに配信する試みです。これにより、全国どこからでも佐賀で行われた研究会やトークセッションの模様に触れることができました。

【USTREAMでライブ中継された動画】

公開研究会（バリアフリーによる映画鑑賞の技術開発及び普及事業）

・「バリアフリー映画における字幕表示の未来」
中島佐和子（東京大学インテリジェント・モデリング・ラボラトリー）
日時…平成22年11月26日（金）13時から13時15分

・「バリアフリー映画の可能性～研究者からの視点～」
大河内直之（東京大学先端科学技術研究センター）
日時…平成22年11月26日（金）13時15分から13時40分
http://www.ustream.tv/recorded/11090180

・「バリアフリー映画をスタンダードに」
日時…平成22年11月26日（金）13時40分から14時15分
http://www.ustream.tv/recorded/11090791

フォーラム会場でのあいさつ　古川康佐賀県知事×木村祐一監督

シアタートーク

「びわこアメニティー バリアフリー映画祭2011」アンケート調査結果

東京大学 インテリジェント・モデリング・ラボラトリー　中島 佐和子
映画製作・配給会社シグロ　長沢 義文

1　概要

2011年2月4日(金)から6日(日)まで、滋賀県大津プリンスホテルで開催された「びわこアメニティーバリアフリー映画祭2011」(「アメニティーフォーラム15」と同時開催)での上映会アンケート調査結果を報告する。

研究会では、2008年から2010年まで、制作されたバリアフリー映画の上映会や映画祭を通じて、来場頂いた鑑賞者を対象にアンケート調査を実施し、字幕や副音声への感想を得てきた。その結果、得られた回答を集計し課題や可能性をまとめることで、字幕や副音声の制作に反映し、よりよいバリアフリー映画の制作に努めることができた。しかし、バリアフリー版字幕や副音声を制作する過程においては、障害のあるなしに関わらず誰もが楽しむことができる映画鑑賞環境を構築していくためにも、視覚や聴覚に障害のある方々だけでなく、身体障害や知的障害を有する方々や高齢者を含めた障害のない方々がどのようにバリアフリー版映画を楽しんでいるかといった点も把握する必要がある。本報告では、映画監督や映画製作者が字幕や副音声を制作する際に重要となる技術的要素を中心にアンケート項目を作成し、研究会で制作された、邦画劇映画や邦画ドキュメンタリー映画や洋画ドキュメンタリー映画からなる4つの作品を対象にアンケート調査を実施することで、バリアフリー映画が広く社会へ普及されるための課題と可能性を探る。

2　方法

映画上映終了後、有志によるアンケート調査を無記名、自記式により実施した。回答者数は全部で151名(男性68名、女性77名、性別未記入6名)である。年齢分布を図1に示した。属性の詳細は、以下のようである。

聴覚障害(女性／37歳／先天性／障害手帳を持っていない)
聴覚障害(女性／37歳／先天性／障害手帳を持っていない)
精神障害(女性／26歳／先天性／障害等級2級)
身体障害(女性／56歳／先天性／障害等級4級)
身体障害(女性／57歳／後天性／障害等級3級)
身体障害(男性／年齢未記入／先天性／障害等級5級)
障害あり・心臓(男性／44歳／後天性／障害等級4級)
障害あり・肢体(女性／年齢未記入／先天性／障害等級2種3級)
障害あり・その他(男性／31歳／先天性／障害等級2級)
障害あり・その他(男性／55歳／後天性／手帳を持っていない)
障害あり・その他(女性／68歳／先天性／障害等級3級)
障害なし140名(男性64名、女性70名、性別未記入6名／平均年齢44・5歳、標準偏差11・70歳)

上映された映画は以下の4作品である。アンケート回答にご協力頂いた方々が鑑賞した作品を図2に示す。また、図3には、本アンケート調査の多数を占めた障害のない鑑賞者を、低年齢層(20から40歳代)と高年齢層(50から70歳代)に分け、年齢層毎に鑑賞した作品を示した。

作品1『春との旅』
(原作・脚本・監督…小林政宏、制作…「春との旅」フィルムパートナーズ、2時間14分)
作品2『酔いがさめたら、うちへ帰ろう。』
(監督・脚本／東陽一、原作／鴨志田穣、製作／シグロ、1時間58分)

作品3『牛の鈴音』
(監督…イ・チュンニョル、韓国映画…スタジオ・ヌリンボ、1時間28分)
作品4『しがらきから吹いてくる風』
(監督…西山正啓、製作…シグロ、1時間31分)
作品5『ニセ札』
(監督…木村祐一、製作…「ニセ札」製作委員会、1時間34分)

3　結果

アンケート回答結果を以下にまとめる。なお、アンケート集計の際には、研究会委員の長沢義文氏に協力頂いた。

3-1　聴覚障害者(2名)

■ 性別
① 男性…0　② 女性…2

■ 年齢
① 19歳以下…0　② 20～29歳…0　③ 30～39歳…2　④ 40～49歳…0
⑤ 50～59歳…0　⑥ 60～69歳…0　⑦ 70歳以上…0

■ 字幕についての質問

Q 1-1　字幕の大きさやフォントはいかがでしたか　【複数回答可】
① 大きすぎる…0　② やや大きい…0　③ やや小さい…0
④ 小さすぎる…0　⑤ 大きさはちょうどいい…2
⑥ フォントが見にくい…0　⑦ フォントが見やすい…0

Q 1-2　字幕が出てくる位置はいかがでしたか　【複数回答可】
① 下すぎる…0　② 上すぎる…0　③ 右すぎる…0　④ 左すぎる…0
⑤ ちょうどよい…2　⑥ その他…0

Q 1-3　登場人物のセリフの字幕について、一画面中の文字の量はどうでしたか
① 多くて読み切れなかった…0　② 多くて読みづらかった…0
③ ちょうどよい…2　④ 楽に読めた…0　⑤ もっと多くても読める…0

Q 1-4　登場人物のセリフの字幕について、映画全体を通しての字幕の枚数はどうでしたか
① 多すぎる…0　② やや多い…0　③ ちょうどよい…2
④ やや少ない…0　⑤ 少なすぎる…0

Q 1-5　環境音・効果音や音楽を説明する字幕はあった方がよいですか　【複数回答可】
① 環境音・効果音の字幕はあった方がよい…1
② 環境音・効果音の字幕はない方がよい…0
③ 音楽の字幕はあった方がよい…0　④ 音楽の字幕はない方がよい…0
⑤ どちらも必要である…1　⑥ どちらも必要でない…0

Q 1-6　環境音や効果音を説明する字幕の量はどうでしたか
① 非常に多い…0　② やや多い…0　③ ちょうどよい…2
④ やや少ない…0　⑤ 非常に少ない…0

Q 1-7　環境音や効果音を説明する字幕によって「音」のイメージを広げることができましたか
① 大変できた…1　② まあまあできた…1
③ あまりできなかった…0　④ 全くできなかった…0

Q 1-8　音楽を説明する字幕の量はいかがでしたか
① 非常に多い…0　② やや多い…0　③ ちょうどよい…2
④ やや少ない…0　⑤ 非常に少ない…0

Q　1-9　音楽を説明した字幕は、ストーリーの理解に役立ちましたか
①　大変役立った…1　②　少し役立った…1
③　あまり役立なかった…0　④　全く役立たなかった…0

Q　1-10　セリフ、環境音、音楽の字幕について、わかりやすかった字幕とわかりにくかった字幕で覚えているものがあれば教えてください。また、その理由も教えてください。
わかりやすかった字幕…
わかりにくかった字幕…

Q　1-11　その他、字幕について、このようにして欲しいということがあれば何でも教えてください

□　新しい字幕開発についての質問

Q　2-1　日常生活での情報伝達手段として、絵文字を使用することはありますか
①　よく使う…0　②　時々使う…2…③　あまり使わない…0
④　全く使わない…0

Q　2-2　絵文字を使用する場合、どのようなものを利用しますか［複数回答可］
①　感情…2　②　表情…2　③　記号…1　④その他…0

Q　2-3　映画の字幕の一部に絵文字が使われていたら、映画の鑑賞に役立つと思いますか
①　思う…2　②　思わない…0　③どちらとも言えない…0

Q　2-4　字幕に絵文字を加えることについて、ご意見をお聞かせ下さい

■　副音声についての質問

Q　3-1　副音声の音量や映画本来の音とのバランスはいかがでしたか［複数回答可］
①　副音声が大きくてうるさい…0
②　副音声が小さくて聴きづらい…0
③　ちょうどよい…1
④　副音声が大きく映画音とのバランスが悪い…0
⑤　副音声が小さく映画音とのバランスが悪い…0
⑥その他…0

Q　3-2　各解説場面において副音声を読みはじめるタイミングはいかがでしたか
①　早すぎる…0　②　少し早い…1　③　ちょうどよい…0
④　少し遅い…0　⑤　遅すぎる…0

Q　3-3　副音声の分量はいかがでしたか
①　多すぎる…0　②　やや多い…0　③　ちょうどよい…2
④　やや少ない…0　⑤　少なすぎる…0

Q　3-4　副音声の表現について教えてください［複数回答可］
①　聞き取りにくい副音声が多くあった…0
②　聞き取りにくい副音声が少しあった…1
③　イメージしにくい表現があった…0
④　分らない表現があった…0
⑤　問題なく聞きとれた…1　⑥　その他…0

Q　3-5　副音声の内容について、わかりやすかった解説とわかりにくかった解説で、覚えているものがあれば教えてください。また、その理由についても教えて下さい。
わかりやすかった解説…　・川で足をつけているところ
わかりにくかった解説…

Q　3-6　副音声の解説として、必要と思う情報を教えてください［複数回答可］
①　色…0　②　登場人物の表情や動作…1　③　服装…0　④　背景描写…0
⑤　固有名詞（地名等）…0　⑥　人の数や物の量・大きさ…0　⑦　その他…0

Q　3-7　副音声の解説について、このようにしてほしいということがあれば何でも教えてください

■　バリアフリー映画に期待することや、ご意見、ご感想がありましたら、自由にご記入下さい

3-2　障害あり・その他（9名）

■　性別
①　男性…4　②　女性…5

■　年齢
①　19歳以下…0　②　20～29歳…1　③　30～39歳…1　④　40～49歳…1
⑤　50～59歳…2　⑥　60～69歳…1　⑦　70歳以上…0　※　未記入…3

■　字幕についての質問

Q　1-1　字幕の大きさやフォントはいかがでしたか［複数回答可］
①　大きすぎる…0　②　やや大きい…0　③　やや小さい…0
④　小さすぎる…0　⑤　大きさはちょうどいい…8
⑥　フォントが見にくい…0　⑦　フォントが見やすい…0

Q　1-2　字幕が出てくる位置はいかがでしたか［複数回答可］
①　下すぎる…0　②　上すぎる…0　③　右すぎる…0　④　左すぎる…1
⑤　ちょうどよい…7　⑥　その他…1
・前方の人の顔で見えなかった（⑥の詳細）

Q　1-3　登場人物のセリフの字幕について、一画面中の文字の量はどうでしたか
①　多くて読み切れなかった…0　②　多くて読みづらかった…0
③　ちょうどよい…7　④　楽に読めた…1　⑤　もっと多くても読める…0

Q　1-4　登場人物のセリフの字幕について、映画全体を通しての字幕の枚数はどうでしたか
①　多すぎる…0　②　やや多い…0　③　ちょうどよい…8
④　やや少ない…0　⑤　少なすぎる…0

Q　1-5　環境音・効果音や音楽を説明する字幕はあった方がよいですか［複数回答可］
①　環境音・効果音の字幕はあった方がよい…0
②　環境音・効果音の字幕はない方がよい…3
③　音楽の字幕はあった方がよい…1
④　音楽の字幕はない方がよい…1
⑤　どちらも必要である…4　⑥　どちらも必要でない…1

Q　1-6　環境音や効果音を説明する字幕の量はどうでしたか
①　非常に多い…0　②　やや多い…5　③　ちょうどよい…3
④　やや少ない…1　⑤　非常に少ない…0

Q　1-7　環境音や効果音を説明する字幕によって「音」のイメージを広げることができましたか
①　大変できた…0　②　まあまあできた…7
③　あまりできなかった…0　④　全くできなかった…0

Q　1-8　音楽を説明する字幕の量はいかがでしたか
①　非常に多い…0　②　やや多い…3　③　ちょうどよい…4
④　やや少ない…2　⑤　非常に少ない…0

Q　1-9　音楽を説明した字幕は、ストーリーの理解に役立ちましたか
①　大変役立った…2　②　少し役立った…4
③　あまり役立なかった…2　④　全く役立たなかった…0

Q　1-10　セリフ、環境音、音楽の字幕について、わかりやすかった字幕とわかりにくかった字幕で覚えているものがあれば教えてください。また、その理由も教えてください
わかりやすかった字幕…
わかりにくかった字幕…

Q　1-11　その他、字幕について、このようにして欲しいということがあれば何でも教えてください
・見る（対象を）障害別にすることは難しいですね。（たとえばイヤホーンなど使用とか）視聴覚に障害がない人にとってはうるさすぎます。素の映画のよさがなかうなる可能性もあり。
・字幕の色を変えてほしい

□　新しい字幕開発についての質問

Q　2-1　日常生活での情報伝達手段として、絵文字を使用することはありますか
①　よく使う…2　②　時々使う…3
③　あまり使わない…0　④　全く使わない…3
・携帯（①の回答の追記）

Q　2-2　絵文字を使用する場合、どのようなものを利用しますか［複数回答可］
①　感情…2　②　表情…2　③　記号…2　④その他…0

Q　2-3　映画の字幕の一部に絵文字が使われていたら、映画の鑑賞に役立つと思いますか
①　思う…4　②　思わない…1　③どちらとも言えない…2

Q　2-4　字幕に絵文字を加えることについて、ご意見をお聞かせ下さい
・時より有効な手段だと思う　・主観的な面がはいるのでその点の考慮

■　副音声についての質問

Q　3-1　副音声の音量や映画本来の音とのバランスはいかがでしたか［複数回答可］
①　副音声が大きくてうるさい…0　②　副音声が小さくて聴きづらい…0
③　ちょうどよい…6　④　副音声が大きく映画音とのバランスが悪い…2
⑤　副音声が小さく映画音とのバランスが悪い…0　⑥　その他…1
・慣れるまでは④でした慣れたら良くなりました（⑥の詳細）

Q　3-2　各解説場面において副音声を読みはじめるタイミングはいかがでしたか
①　早すぎる…0　②　少し早い…1　③　ちょうどよい…6
④　少し遅い…1　⑤　遅すぎる…0

Q　3-3　副音声の分量はいかがでしたか
①　多すぎる…0　②　やや多い…3　③　ちょうどよい…5
④　やや少ない…1　⑤　少なすぎる…0

Q　3-4　副音声の表現について教えてください［複数回答可］
①　聞き取りにくい副音声が多くあった…0
②　聞き取りにくい副音声が少しあった…1
③　イメージしにくい表現があった…2　④　分らない表現があった…0
⑤　問題なく聞きとれた…5　⑥その他…0

Q　3-5　副音声の内容について、わかりやすかった解説とわかりにくかった解説で、覚えているものがあれば教えてください。また、その理由についても教えて下さい。
わかりやすかった解説…　・駅の名前や時間軸、動き
わかりにくかった解説…

Q　3-6　副音声の解説として、必要と思う情報を教えてください［複数回答可］
①　色…0　②　登場人物の表情や動作…6　③　服装…0　④　背景描写…1
⑤　固有名詞（地名等）…1　⑥　人の数や物の量・大きさ…1　⑦　その他…0

Q　3-7　副音声の解説について、このようにしてほしいということがあれば何でも教えてください
・初めてみましたが、全く抵抗なくみれました。いろいろな障害の方に対応できるので、広く広がるとよいと思います。
・イヤホーン使用
・耳の不自由なひとにとってどうかなと思いましたが、それが・・・

■　バリアフリー映画に期待することや、ご意見、ご感想がありましたら、自由にご記入下さい
・初めてみましたが、全く抵抗なくみれました。いろいろな障害の方に対応できるので、広く広がるとよいと思います。
・これからどんどん進歩（つよく）して欲しい

3-3　障害なし（140名）

■　性別
①　男性…64　②　女性…70　※未記入…6

■　年齢
①　19歳以下…0　②　20～29歳…16　③　30～39歳…34　④　40～49歳…29
⑤　50～59歳…40　⑥　60～69歳…10　⑦　70歳以上…2　※　未記入…9

■　字幕についての質問

Q　1-1　字幕の大きさやフォントはいかがでしたか［複数回答可］
①　大きすぎる…0　②　やや大きい…4　③　やや小さい…4
④　小さすぎる…0　⑤　大きさはちょうどいい…117
⑥　フォントが見にくい…4　⑦　フォントが見やすい…19
・見えなかった
・特に気にしませんでした（⑤の回答の追記）

Q　1-2　字幕が出てくる位置はいかがでしたか［複数回答可］
①　下すぎる…13　②　上すぎる…3　③　右すぎる…0　④　左すぎる…0
⑤　ちょうどよい…101　⑥　その他…6
・見えなかった（⑥の詳細）
・後ろの方なので、少し見えなかった。（⑥の詳細）
・今日は見えなかった。客の頭があって（⑥の詳細）
・少しだけ（①の回答の追記）
・今会場は平坦だったので、右が良かった。（⑥の詳細）
・スクリーンが近く、前の人の頭で見えない…（⑥の詳細）
・中心に寄りすぎてるかな？（⑥の詳細）

Q　1-3　登場人物のセリフの字幕について、一画面中の文字の量はどうでしたか
①　多くて読み切れなかった…0　②　多くて読みづらかった…2
③　ちょうどよい…64　④　楽に読めた…49　⑤　もっと多くても読める…4

Q　1-4　登場人物のセリフの字幕について、映画全体を通しての字幕の枚数はどうでしたか
①　多すぎる…0　②　やや多い…9　③　ちょうどよい…101
④　やや少ない…8　⑤　少なすぎる…1

Q　1-5　環境音・効果音や音楽を説明する字幕はあった方がよいですか［複数回答可］
①　環境音・効果音の字幕はあった方がよい…35
②　環境音・効果音の字幕はない方がよい…12
③　音楽の字幕はあった方がよい…17　④　音楽の字幕はない方がよい…25

⑤　どちらも必要である…41　⑥　どちらも必要でない…7

・ストーリー的に重要な場合(①の回答の追記)
・「春との旅」(③の回答の追記)
・と思う(③の回答の追記)
・「牛のすず音」、「春との旅」程度に入るのがバランス良く感じました。(④の回答の追記)
・映画には欠かせない、背景をイメージする大切な音(①の回答の追記)
・場面に応じて(②の回答の追記)

Q　1-6　環境音や効果音を説明する字幕の量はどうでしたか

①　非常に多い…2　②　やや多い…16　③　ちょうどよい…90
④　やや少ない…8　⑤　非常に少ない…1

Q　1-7　環境音や効果音を説明する字幕によって「音」のイメージを広げることができましたか

①　大変できた…15　②　まあまあできた…62
③　あまりできなかった…32　④　全くできなかった…3

Q　1-8　音楽を説明する字幕の量はいかがでしたか

①　非常に多い…2　②　やや多い…21　③　ちょうどよい…79
④　やや少ない…9　⑤　非常に少ない…1

・「春との旅」でしたので(⑥の回答の追記)

Q　1-9　音楽を説明した字幕は、ストーリーの理解に役立ちましたか

①　大変役立った…20　②　少し役立った…50　③　あまり役立なかった…38
④　全く役立たなかった…4

・「春との旅」でしたので(⑤の回答の追記)

Q　1-10　セリフ、環境音、音楽の字幕について、わかりやすかった字幕とわかりにくかった字幕で覚えているものがあれば教えてください。また、その理由も教えてください。

わかりやすかった字幕…
・見るだけではわからない、心の動き
・ニワトリの声、波の音(春との旅)／モー(牛の鈴音)
・聞こえづらいセリフが字幕で確認できました。
・風の音
・誰のセリフであるのかが分かるように仮名が出ていたところ(画面上、音がないと誰のセリフか分かりづらい場面で)
・場面が切り替わった時

わかりにくかった字幕…
・♪始　など右上で分りにくい
・春との旅、音楽の字幕は少し小さい
・ただ《音楽》とだけあるのが、多少。一言形容詞を付けた方が良いかと。
・音楽のタイトルなどは人によって(知っている・いないで)大きくイメージが変わるのかな、曲を知らないのでイメージわきづらい。
・音楽の字幕がわかりづらかった。
・公園での子どもたちの会話。音がひろえなかったのに、字幕があり戸惑った。
・「グスン」は必要ない？

Q　1-11　その他、字幕について、このようにして欲しいということがあれば何でも教えてください

・感情や心の動きについてはみてわかると思うのであまりない方がよいと思う。
・見ていてあまり気にならなかったので、よかったと思います。
・ルビがないと読めない人もいるのでは？と思いました。ルビはあった方がよいです。
・字幕と音声が少しちがうと気になる。音声も入るなら字幕の通りにしてほしい。
・ナレーションと字幕が違う場面は、「?」と思う瞬間があった。
・たて書きの字幕はだめでしょうか？

・音楽の字幕があることにより、聴覚障がいのある人達が映画の内容、狙いとは違う音楽をイメージするのでは？
・効果音、人物のセリフなど字幕があればと思います。
・みえませんでした。
・泣く「ぐっすん」は少し違うと思いました。
・当事者の立場でないのでわからない。

□　新しい字幕開発についての質問

Q　2-1　日常生活での情報伝達手段として、絵文字を使用することはありますか

①　よく使う…18　②　時々使う…52
③　あまり使わない…24　④　全く使わない…14

Q　2-2　絵文字を使用する場合、どのようなものを利用しますか　[複数回答可]

①　感情…50　②　表情…52　③　記号…35　④その他…2

・ピクトグラム、絵カード(④の詳細)
・場所・行動(④の詳細)

Q　2-3　映画の字幕の一部に絵文字が使われていたら、映画の鑑賞に役立つと思いますか

①　思う…42　②　思わない…20　③どちらとも言えない…36

・この質問は難しいですね・・

Q　2-4　字幕に絵文字を加えることについて、ご意見をお聞かせ下さい

・絵文字を使えば、みる人の感じ方がせまくなる気がします。
・更に良くなると思う
・見る人々の年齢層に因ると思う。高齢の方は理解できないだろうが、携帯メールやＰＣを使いこなす世代では有効かと思う。
・嬉しそうな様子、表情だけでなく字幕にもあるといいと思いました♪
・一度見てみたいと思います。
・多くの人が理解できる絵文字を使う事によって、字幕の簡略化をはかれるが、大事なセリフ、表現は言葉によって伝えられたらいかと思います。
・私が持つ字幕という概念の中に、絵文字というものはなかったのですが、メールなど文字で相手に伝える時に絵文字を使うことで気持ちが伝わりやすいということがあるので、場面によっては使った方が伝わるように思います。
・発達障害の人には難しいのではないか
・ユニバーサルなものならＯＫでは
・絵文字も意味を伝える記号であり、新しい文化の流れの中で浮かび上がって来たツールの１つなので、価値があるならばりようすべき
・声の感情を理解するのに役立つと思う
・文字を読みより早く伝わり、感情移入しやすいかもしれません。
・混乱するかも？
・絵文字が入ると、堅苦しさが緩和される。
・使う場面を見極めるべきだと思う。
・字幕が読める方であれば、視覚的な情報は入っているはず。画面から読みとれるのでは？記号ぐらいならあってもいいかと思う。
・上映する映画の内容によって絵文字はない方がいいのとあるのが良いの両方あると思う。
・映画の流れなどで、びみょうな表現の時もあり、制作者側にしかわからない感情や、「笑ってるのが、悩んでいるのか、皮肉なのか…」など考えさせるものもあるので、簡単にはできずむずかしいなと思います。
・不要のように思いますが…俳優さんの表情でいいのでは？
・分からないが、おもしろい試みでもあると思う。
・声の強弱やニュアンスを伝えられるかもしれませんが、役者の表情だけでも大丈夫ではないかと思います。
・役名を字幕にされても、分かりにくい時がある。絵文字にしてもいいのでは。
・人によっては。ただし理解に差がでるリスクがありそう。
・役立つと思う人がいればやってみるべき
・絵文字にも種類があり全てダメとは思いません。
・大きさ？字との重なり？

■ 副音声についての質問

Q 3-1 副音声の音量や映画本来の音とのバランスはいかがでしたか

【複数回答可】

① 副音声が大きくてうるさい…10 ② 副音声が小さくて聴きづらい…0
③ ちょうどよい…83 ④ 副音声が大きく映画音とのバランスが悪い…12
⑤ 副音声が小さく映画音とのバランスが悪い…2 ⑥ その他…17

・慣れていないので、ちょっと気になりました(⑥の詳細)
・少し音が大きい(⑥の詳細)
・うるさくはないけど、もう少し副音声のボリュームは小さくても良いかも。(⑥の詳細)
・人の声(周囲の話し声のあるシーン)と重なって、ちょっと聞き取りにくい場面もありました。最初の居酒屋のシーンとか(⑥の詳細)
・最初は違和感があったが、慣れてきた。(⑥の詳細)
・バリアフリー映画というものを初めて観ました。慣れていないせいか、副音声の存在に違和感を覚えたが、知っていれば違った感覚で観る事ができるかと思う。(⑥の詳細)
・だんだん慣れました(⑥の詳細)
・「牛の鈴音」(④の回答の追記)
・少し大きいかなと感じました(⑥の詳細)
・少し(①の回答の追記)
・間が悪かったシーンあり。(⑥の詳細)
・うるさいとは思わないが、ここはいらないのではと思うところがある。(⑥の詳細)
・映画の雰囲気と少しズレた質の部分はあったかなぁとは思いますが、むずかしいですね。(⑥の詳細)
・最初は大きくていらないと思ったが途中から気にならなかった。(⑥の詳細)
・わかりやすかった。(③の回答の追記)
・あと少しだけおとした方がよい(⑥の詳細)
・副音声は必要な人に個別で聞き取ればいいなと思うが?(⑥の詳細)

Q 3-2 各解説場面において副音声を読みはじめるタイミングはいかがでしたか

① 早すぎる…0 ② 少し早い…24 ③ ちょうどよい…87
④ 少し遅い…4 ⑤ 遅すぎる…0

・時々(②の回答の追記)

Q 3-3 副音声の分量はいかがでしたか

① 多すぎる…4 ② やや多い…34 ③ ちょうどよい…84
④ やや少ない…3 ⑤ 少なすぎる…1

・健常者には多すぎますが、これくらいないとわからないと思います。(①の追記)
・目を閉じて観てみましたが判断に迷います。みえない人にとって適当かどうかがわかりません。

Q 3-4 副音声の表現について教えてください 【複数回答可】

① 聞き取りにくい副音声が多くあった…2
② 聞き取りにくい副音声が少しあった…7
③ イメージしにくい表現があった…11 ④ 分らない表現があった…1
⑤ 問題なく聞きとれた…89 ⑥ その他…12

・牛の鈴音…分量等もあるだろうがしゃべり出しがぐわっと早く途中からちょうど良い早さになるのが聞きずらい(⑥の詳細)
・表現に抑揚がもう少しあるといい(⑥の詳細)
・ポリ袋をビニール袋と表現するなど間違いが気になった(⑥の詳細)
・説明が多すぎて、イメージを壊してしまう感じがしました。(⑥の詳細)
・副音声は必要ないかも。(⑥の詳細)
・なれるとわかりやすくなった(⑥の詳細)
・2の映画、副音声の感情があまりこもっていなかった。4の副音声はとても良かった。(⑥の詳細)
・どこまで音声で説明が必要なのがいいとてもむずかしいなぁと感じました。Ｅ×・感動的な場面がテープにならないためにはどうしたらいいのでしょうか…(⑥の詳細)

Q 3-5 副音声の内容について、わかりやすかった解説とわかりにくかった解説で、覚えているものがあれば教えてください。また、その理由についても教えて下さい。

わかりやすかった解説…

・一度に全てを副音声で説明するのではなく、主音声の音や声が聴こえる前に副音声で説明があったので、ハンディのある方にもわかりやすいと思いました。
・「ストップモーション」はユーモラスでよかった
・ふきさらしの小さな駅のホーム、離れてすわる二人、遠くの山には雪
・主な登場人物の年、服装、表情
・情景
・覚悟を決めた女の表情になって…／これは幻覚 など
・場面の背景(レストラン、大きな湖)は分かりやすかった。
・「アタック」の言い方のトーンが良かった。
・小さな手ともっと小さな手

わかりにくかった解説…

・牛の鈴音…分量等もあるだろうがしゃべり出しがぐわっと早く途中からちょうど良い早さになるのが聞きずらい。外国ものの場合あまり早口で固有名詞を言われてもそれと気付きずらい。
・具体的な表現で説明していたけど、もう少し客観的な自由にイメージしやすい表現でもよかったのかと思う。受け取り方が、場面のイメージする前に固定してしまうので
・音楽、波、光、主人公のヒゲ、カメラアングル、このあたりの説明がなかった
・余計な感情表現が入っている気がする
・特にない
・草では分からない。例えば、田の苗とか大豆とか

Q 3-6 副音声の解説として、必要と思う情報を教えてください 【複数回答可】

① 色…17 ② 登場人物の表情や動作…63 ③ 服装…17
④ 背景描写…56 ⑤ 固有名詞(地名等)…23 ⑥ 人の数や物の量・大きさ…13
⑦ その他…5

・外国ものの場合あまり早口で固有名詞を言われてもそれと気付きずらい。
・ケース・バイ・ケースだと思います
・しばらくはドキュメンタリーなのでできるかぎり多く伝えたいですが、物語はどこまで伝えることができるのでしょうか…とても悩みますが、勉強になりました!!(⑥の詳細)

Q 3-7 副音声の解説について、このようにしてほしいということがあれば何でも教えてください

・表情や動作についてはあった方がいいとは思うが、あまり多くない方がよい。
・情景の音(海なら波の音)、何かするしぐさの音をアピールをして音として楽しめる映画を作って欲しいなと思います。
・目をつぶって見ないとわからいかもしれないけれど、あまり副音声を入れなくても映画の雰囲気は伝わると思います。
・春との旅については、春やタダオの歩き方にとっても表情がでていたように思います。それを副音声で表現するのはとても難しいと思うけれど、ぜひほしいかいせつだなと思いました。
・です、ます調で、自然にナレーションされていて、聞きやすいと思いました(音声ガイド)。
・大きな場面変化の際にイメージしやすい解説がもう少しついたらいいと思ったが、具体的にはちょっと思い浮かばず、スミマセン。
・健常者としてのアンケートで、うまく回答できているか不安です。
・全てに副音声が必要でない
・すばらしい副音声だったと思います。何もかも良かったです。感動しました。
・駅名だけでは地名まで理解できないが、解説のおかげで良く分りました。
・副音声で、登場人物の表情を説明することは、視覚障がいを持たれた方だけでなく、感情を読み取ることが難しい自閉症の方などにもわかりやすいと思う。
・セリフが被らないようにする。
・映画は受け手の感性によって評価が変わるものだとは思うが、副音声はもう少し感情込めても良いのではないか。
・最初は慣れない為違和感があったが、映画の内容の良さにひきこまれ、自然と入り込むことができた。

・もっと単々としていてもよいのでは。
・牛の表情、涙
・声のトーンがもう少し優しくてもいいのでは？と思いました。
・目をつむって聞いていたら、ラジオをきいているみたいでよく分かりました。
・最初は耳ざわりだったが、慣れると楽しめるようになる
・私には多すぎると感じたが当事者の側に立ってみれば必要なのかもしれない
・ラストのナレーションは原作にあるのでしょうか。

■ **バリアフリー映画に期待することや、ご意見、ご感想がありましたら、自由にご記入下さい**

・当事者の皆様の要望をとり入れて、一般の方も普通の映画と同じ様に見れる様に期待しています。
・視聴覚に特に障がいのない私ですが情景・表情の形容詞などから、作者の意図が感じられ、バリアフリー云々に関わらず、新たな発見ができました。
・副音声を利用するかどうか選択できたらもっと幅広い人に見てもらえると思った（情報の整理ができない人には副音声は苦痛になるかもしれないなあと思ったので）
・昨年は、シグロのバリアフリーにしたエイガをみて、今日、さいしょに「春との―」をみました。シグロがつけたのは、監督さんがきっと伝えたかったことなんだなあ～と思わせる副音声でした。「春との―」は、それがよくわかりませんでした。
・たくさんのジャンル、種類に、バリアフリーの仕様があるとよいと思います。
・初めてバリアフリー映画を観ました。はじめは違和感がありましたが、だんだん慣れて楽しめました。障害のある人にもどんどん映画を観てもらいたいのでバリアフリー映画はいいと思います。ただ、映画好きとしては、もちろんたくさんの人に観てもらいたいと云う想いもありますが、ナレーションなんかがなく、そのまま観たい（最初は）自分でいろいろ考えたいので、と云う想いもあります。作り手もそうじゃないかと思います。（バリアフリーがダメと云うことじゃなく）　山上さんが言っていたように健常者も楽しめるバリアフリー映画がたくさんできるといいと思います。いろいろ工夫をしていくと、楽しめるんじゃないかなーと思います。ナレーションも弁士みたいなかんじだとすごく楽しめましたし。映画を作る最初の段階からバリアフリーを視野に入れるとよりよいバリアフリー映画ができるんでしょうね。知り合いの聴覚障害者の方に自分のお気に入りの映画をオススメしようと思った時に、よく考えたらその映画はバリアフリー映画ではなかったのでオススメを断念したことがありました。
・もう少し画面が上にあればよいと思います
・とてもよい試みですね。
・初めて観ました。最初は副音声に少し違和感を感じましたが、観ているうちに全く気にならなくなりました。情報量が多すぎれば聞きととったり見たりしにくくなりますが、とても観やすかったです。
・最初違和感があったが慣れた
・「バリアフリー映画」を見たことがないので、見たり、聞いたりできる者にはどうしても逆に見づらくなってしまいますね。目を閉じてイメージを広げるとよかったのかもしれません。少し勉強不足で来てしまいました。
・今後とも本数を増やしていただきたいと思います。
・工夫されており、映画とフィットしていたので、このようなバリフリ。化が進むことを望みます。
・バリアフリー映画の主旨は？
・はじめてバリアフリー映画を観ました。副音声について、はじめは違和感があり、じゃまかなと思ってしまいました・・・。普段自分の生活スタイルでしか判断できないことが恥ずかしかったです。どんどん広げて下さい。
・今回はじめて見ました。大変感動しました。バリアフリーの映画の普及にきたいします。
・一般劇場で選択できるようもっと広がってほしいです。
・事実の説明についてはそのうち慣れていったけど、「覚悟を決めた女性の表情」のような感覚的によらえることの副音声などは最後まで慣れなかった。でもこのバリアフリーにしようとするとりくみこそがバリアフリーだと思う。ぜひつづけて探究してほしい。
・映画は私たちに感動を与えてくれます。副音声や字幕で沢山の方の心に感動が届くのは嬉しいです。
・今回の取り組みをとても応援しています。
・ジャンル拡大

・法人でぜひ上映会をしたいです。
・普通の映画しか見たことがなかったため、健常者の私としては、バリアフリー映画では無い方が感情移入できたり、映像や音楽など集中してもっと他に思うことがあったのかと思います。
・目、耳に不自由のない者にとっても、とてもわかり易い副音声で、自然にあるもののように感じ、非常に作品の理解を助けてくれました。
・初めて見ましたが、自分の感覚の違うところを使って映画を見た感じがして新鮮でした。
・良かったです。
・当事者の方の意見をできるだけとり入れながらより良いものができると良いですね。
・これで多くの方が良い作品を耳で目で観ることができればと思います。
・予めのストーリーにしばられる感はあるが―。

4　考察

4-1　字幕について

■ 障害の有無と字幕の感じ方の比較

3-1聴覚障害者（2名）の項に示したように、聴覚障害者の字幕への感想は、字幕の質に関しての「Q1-7環境音や効果音を説明する字幕によって「音」のイメージを広げることができましたか」については、《大変できた（1名）》および《まあまあできた（1名）》、「Q1-9音楽を説明した字幕は、ストーリーの理解に役立ちましたか」については、《大変役立った（1名）》および《少し役立った（1名）》という回答結果であった。また、字幕の量に関しては、「Q1-4登場人物のセリフの字幕について、映画全体を通しての字幕の枚数はどうでしたか」や「Q1-6環境音や効果音を説明する字幕の量はどうでしたか」および「Q1-8音楽を説明する字幕の量はいかがでしたか」の項目を例にとると、これらの全ての質問に対して《ちょうどよい（2名）》との回答結果であった。一方、本アンケート調査の多数を占めた障害のない方々の回答結果（パーセント表記）は図4のようになった。図より、字幕の質に関する上記2つの項目（Q1-7、Q1-9）については、《大変できた》と《まあまあできた》、および、《大変役立った》および《少し役立った》の回答を合わせると、それぞれ、68・75％と62・5％となり、半数以上の割合で役立ったという回答結果であった。また、字幕の量に関する上記3つの質問（Q1-4、Q1-6、Q1-8）については、70から86％程度を占める主な回答結果が《ちょうどよい》であり、概ね、障害のない方々に対しても、字幕の付与が許容されていることがわかった。しかし、割合としては大部分ではないが、このように、字幕の《質》的な印象に関わる高次の知覚認知機能に比べると比較的低次であり主観的なバイアスを受けにくいと考えられる字幕の《量》の感じ方についても、《やや多い》の回答結果が一定程度に存在するという現状がある。さらに、この《やや多い》と感じる割合は、台詞の字幕（7・56％）、環境音や効果音の字幕（13・68％）、音楽の字幕（18・75％）の順に高まる結果となった。このことは、環境音や効果音および音楽などの非言語的な情報を字幕により言語的に表現した際に、音響表現そのものの鑑賞自体に影響を与えた可能性が一つに推察される。これに対しては、字幕の表現の仕方などを改良することで、音響表現とあわせて相乗効果となる字幕表現のあり方を探る試みを行うことも一つの対策として考えられる。

■ 年齢別の字幕の感じ方の比較

図5には、字幕の質および字幕の量に関する6つの質問項目について、鑑賞者の年齢層別に回答結果を比較した。図の実線と波線はそれぞれ、低年齢層（20から40歳代／79名）、および、高年齢層（50から70歳代／52名）の回答結果を示したものである。年齢層の違いにより異なる傾向を示したものは、「Q1-9音楽を説明した字幕は、ストーリーの理解に役立ちましたか」と「Q1-8音楽を説明する字幕の量はいかがでしたか」の音楽を説明した字幕の質および量に関する質問項目についてであった。（Q1-9）の質問については、低年齢層（20から40歳代）の回答では、《あまり役立たなかった（36・92％）》と《少し役立った（35・38％）》の順にほぼ同程度の割合であったのに対し、高年齢層（50から70歳代）の回答では、《少し役立った（56・1％）》が最も多く、続いて《あまり役立たなかった（31・71％）》の回答が多いという分布に変化した。また、（Q1-8）の質問については、低年齢層（20から40歳代）、および、高年齢層（50から70歳代）の回答の上位2つは同様に、《ちょうどよい》と《やや多い》が占めていたものの、その割合は年齢層により異なった。《ちょうどよい》と《やや多い》

と回答した割合は、低年齢層と高年齢層の結果でそれぞれ、75・76％と12・12％、および、60・00％と20・00％となり、高年齢層になるほど《やや多い》と感じる傾向が強かった。年齢層による感じ方の違いが「音楽の字幕」に対してより大きく現れた点は、高齢化による聴力特性や認知特性の変化による影響が一つに考えられるが、このような具体的な違いを制作面に活かすことで、難聴高齢者も含めた幅広い層に許容される技術としてバリアフリー映画の可能性を広げるための具体策を得ることができると考えられる。

■　作品別の字幕の感じ方の比較

ここでは、より具体的にバリアフリー版字幕の改良策を探るために、年齢別の分析の上にさらに作品別の回答結果を比較した。特に、前項の「年齢別の字幕の感じ方の」の分析で違いが見られた音楽の字幕に関する項目（「Q1-9音楽を説明した字幕は、ストーリーの理解に役立ちましたか」と「Q1-8音楽を説明する字幕の量はいかがでしたか」）を取り上げ、図6に結果をまとめた。図より、（Q1-9）の音楽字幕の質に関する質問項目については、低年齢層（20から40歳代）とも高年齢層（50から70歳代）ともに、作品別による何らかの明確な傾向は見られない。一方、（Q1-8）の音楽字幕の量に関する質問項目については、低年齢層（20から40歳代）では作品による違いはほとんど見られないのに対し、高年齢層（50から70歳代）では、字幕の量が《やや多い》と《ちょうどよい》の回答において、作品毎の違いがより明確に現れている。《ちょうどよい》の回答が最も多い作品群（作品2、3、4）と《やや多い》の回答が最も多い作品群（作品1、5）が存在する。このことから、字幕の質に関する感じ方の要因分析については明確な結果がえら得られなかったが、字幕の量については、作品別と年齢別の観点から、鑑賞者の感じ方の要因を具体的に同定していけるような道筋を示すことができたと考える。

4-2　副音声について

■　障害の有無と副音声の感じ方の比較

図7には、副音声に対する3つの質問項目（「Q3-1副音声の音量や映画本来の音とのバランスはいかがでしたか［複数回答可］」、「Q3-2各解説場面において副音声を読みはじめるタイミングはいかがでしたか」、「Q3-3副音声の分量はいかがでしたか」）の結果について、障害のない方々の回答結果を全てまとめた。図より、副音声の分量に関する（Q3-3）の質問項目に対しては《やや多い》の回答が26・98％存在した。これは、「4-1字幕について」の項で示した、字幕の分量に関する質問項目（Q1-4、1-6、1-8）の《やや多い》の回答結果（7・56、13・68、18・75％）よりも多い割合である。この要因の一部には、聴覚と視覚のそれぞれに固有な情報処理特性の違いが反映された可能性が推察される。例えば、視覚に比べて意図的な情報の選択や省略が難しいと考えられる聴覚特有の受動的な側面をどのように対処し活かしていくかなど、副音声の挿入の仕方における具体的な検討要因が見える結果となった。このことは、副音声によって表現することのできる情報量を推定する上でも重要な点である。また、副音声を読み始めるタイミングについては、《ちょうどよい（75・65％）》の他に、《少し早い（20・87％）》と感じる回答の割合も5分の1程度存在することも示され、障害のあるなしに関わらず誰もが楽しめる、より良いバリアフリー版副音声の制作のためのいくつかの課題を確認できた。

■　年齢別の副音声の感じ方の比較

図8は、字幕の分析と同様に、副音声についての3つの質問項目（Q3-1、3-2、3-3）について、低年齢層（20から40歳代）と高年齢層（50から70歳代）の年齢層別に、回答結果を示したものである。図より、副音声については字幕と異なり、年齢層別で大きな差はみられなかった。

■　作品別の副音声の感じ方の比較

最後に、副音声について、作品別の回答結果を図9に示す。図は、全ての年齢層に対して、3つの質問項目（Q3-1、3-2、3-3）の結果をまとめたものである。図より、副音声の音の大きさや映画音とのバランス（Q3-1）、副音声の読み始めのタイミング（Q3-2）、副音声の量（Q3-3）に関する回答結果は、作品毎に異なる傾向が見られた。副音声の読み始めのタイミングに関する回答結果（Q3-2）を例にとると、《少し早い》という回答の割合は、7・69％（作品4）から42・86％（作品5）まで、作品により大きく増減する結果となった。これらのことから、字幕による分析と同

様に、各作品の副音声の特徴を分析することで、今後のバリアフリー版副音声の制作に活かしていくことができると考える。

5　まとめ

本報告では、障害のあるなしに関わらず誰もが映画館という場で映画を楽しむことができる環境を構築することを目的に、主に、障害のない方々が、字幕や副音声を付記したバリアフリー映画をどのように感じたかという観点に着目し、上映会アンケート調査の回答結果をまとめた。字幕や副音声の質や量や提示タイミングについての回答結果について、鑑賞者の年齢層や作品別の分析を行なったところ、音楽を説明する字幕の提示の仕方などについて、低年齢層（20から40歳代）と高年齢層（50から70歳代）の音楽字幕の量の感じ方の特徴的な違いや、作品の違いによる影響など、今後の字幕制作に活かすことのできる具体的な課題の一部や可能性を得ることができた。

今後は、アンケート調査対象者や項目や評価方法、および、その分析方法を工夫検討し、統計学的な議論を踏まえて、バリアフリー映画制作のためのより具体的な課題や改善策を得ていく予定である。これらの取り組みを通じて、作品制作へのフィードバックだけでなく、映画としての芸術性や作品性と情報保障としての公益性を合わせたバリアフリー映画そのものの在り方を支える指針を得て、様々な人々に開けたバリアフリー映画の普及に繋げていきたいと考えている。

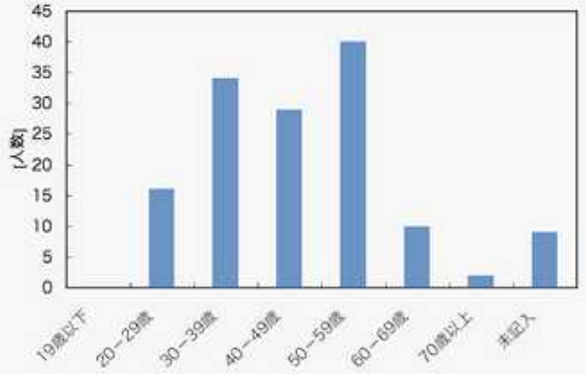

図1　年齢分布（全体／人数）

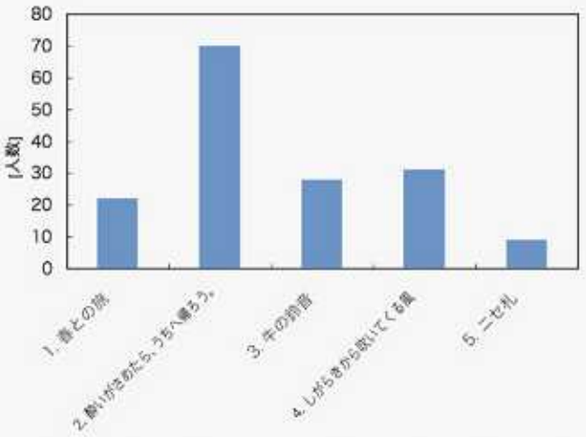

図2　鑑賞された作品（全体／人数）

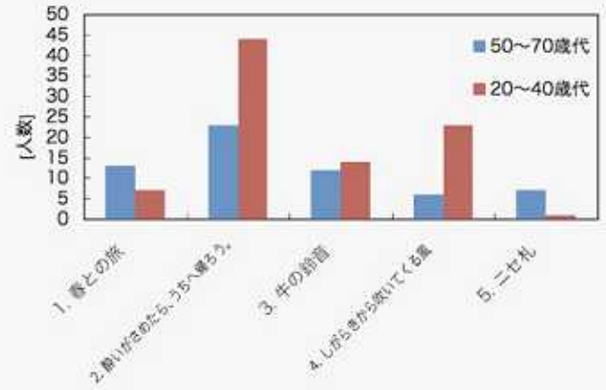

図3　鑑賞された作品(障害なし／年齢層別／人数)

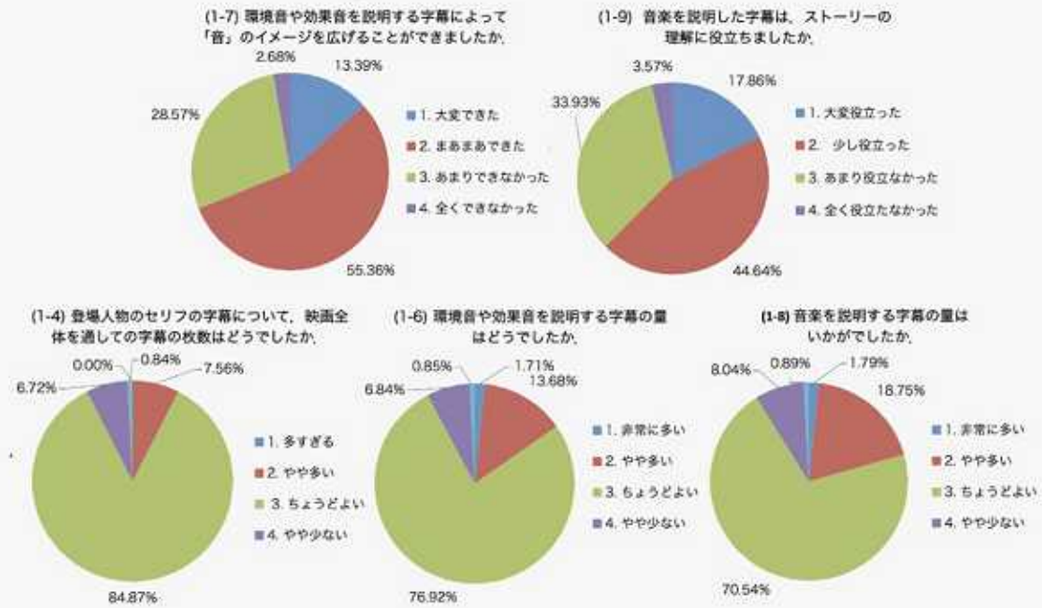

図4　字幕の感じ方(障害なし／パーセンテージ)

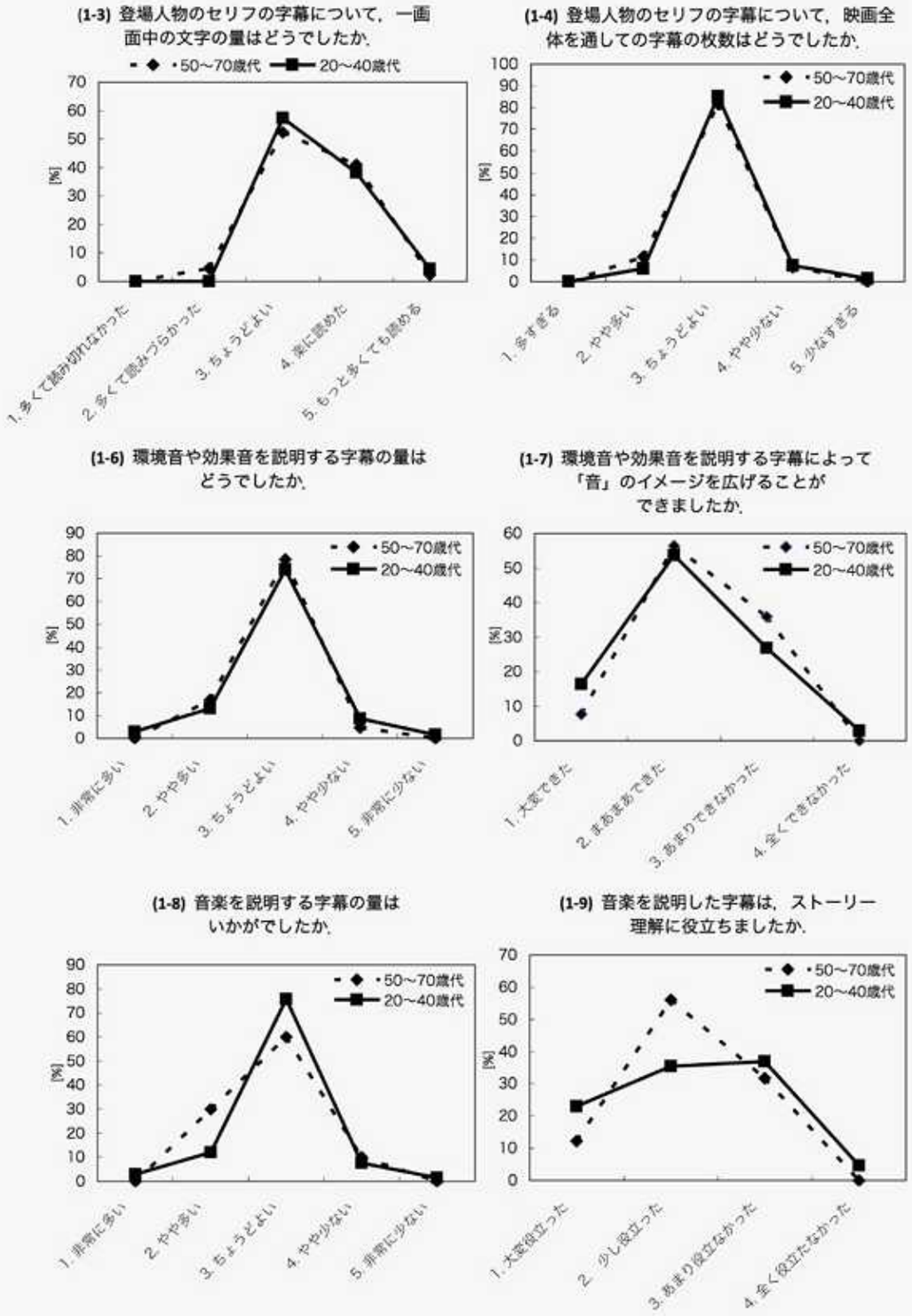

図5　年齢別の字幕の感じ方の比較(障害なし／パーセンテージ)

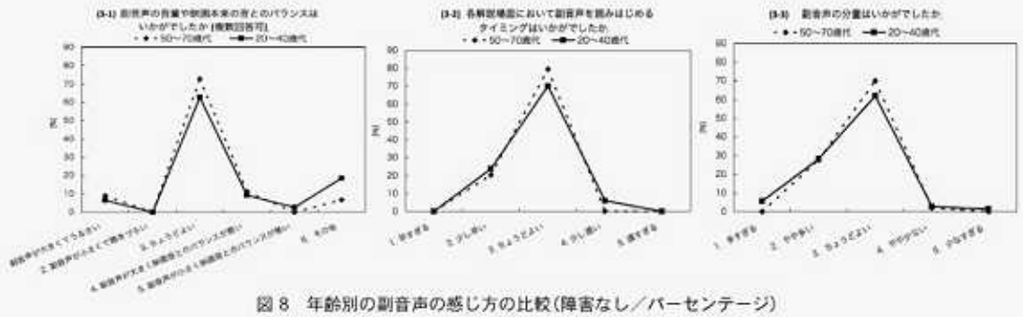

図 8　年齢別の副音声の感じ方の比較（障害なし／パーセンテージ）

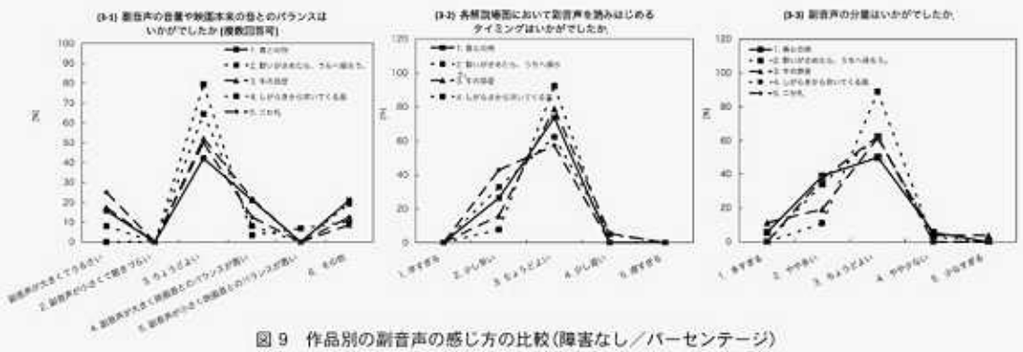

図 9　作品別の副音声の感じ方の比較（障害なし／パーセンテージ）

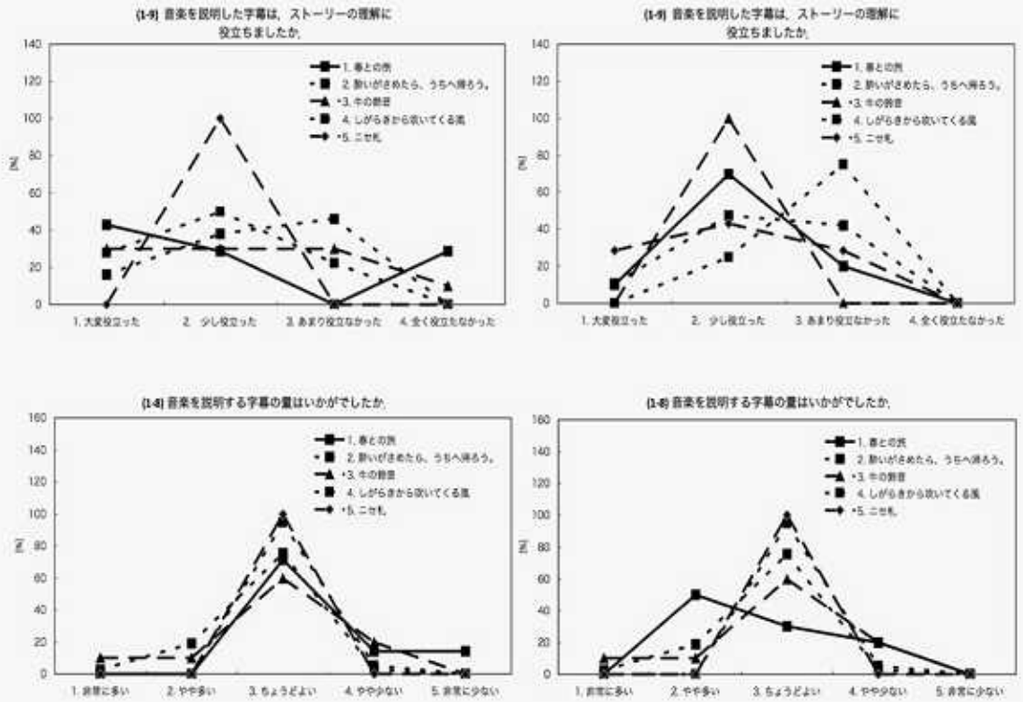

図 6　作品別の字幕の感じ方の比較（障害なし／パーセンテージ）

図 7　副音声の感じ方（障害なし／パーセンテージ）

「バリアフリーさが映画祭２０１０」アンケート集計

東京大学 インテリジェント・モデリング・ラボラトリー　中島 佐和子
映画製作・配給会社シグロ　長沢 義文

障害なし・回答数３６４名

■ 性別

① 男性…１１４　② 女性…２４８　※未記入…２

■ 年齢

① 19歳以下…26　② 20～29歳…23　③ 30～39歳…47　④ 40～49歳…81
⑤ 50～59歳…101　⑥ 60～69歳…53　⑦ 70歳以上…32　※未記入…1

■鑑賞された作品をお書き下さい。

「武士の家計簿」…79　「二セ札」…31
「おくりびと」…47　「耳をすませば」…16
「くるりのこと。」…30　「牛の鈴音」…24
「猫の恩返し」…62　「老人と海」…32
「酔いがさめたら、うちに帰ろう。」…32　未記入…20

■映画を鑑賞されていかがでしたか。

(1)日本語字幕に付いて

①字幕がわかりやすい…２４９
②字幕がわかりにくい…2
③字幕の分量が多く感じた…13
④その他…21
⑤特になし…48　⑥未記入…29

≪④その他≫の意見

『おくりびと』
あまり目につかなかった。私の席から字幕ではないが、映画前のトークの時の字幕は左端がみえなかった。必要にしている人にとっては不便だと思う。／慣れると気づかなかった。／とてもよかった。

『くるりのこと。』
挿入音楽の紹介は良いと思った。／字幕は気にすることなく私には流れて自然でした。

『牛の鈴音』
見慣れなかったこともあり。／情報量が多かった。／字幕と説明用の2種類があり邪魔。

『猫の恩返し』
白に白字がかぶるところがあった。

『老人と海』
もう少し字幕があっても良いのでは？全ろうの方にどれ位理解できただろうか？と思った。

『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』
特に必要がないため、映像に集中していて、字幕はほとんど見ていませんでした。

(2)(1)の回答について、その理由をお聞かせ下さい。

▼①字幕がわかりやすい、回答理由

『武士の家計簿』
邪魔にならずに読みやすかった。／字が大きく読みやすかった。／画面だけでは見逃しそうな部分の説明もあり、分かりやすかった。／的確に表現されていて見やすい。／耳の不自由な方にも心遣いが素晴らしいと思う。／場面の説明がよくでていた。／シナリオのト書きのようでわかりやすい。／思っていたより画面も邪魔せず、ストーリーについていきやすいのではと思う。／聞き取りにくいセリフが字幕でわかりやすかった。

『二セ札』
字の大きさがちょうど良い。／ほどよい量でした。／下にあるので見やすかった。／大きくはっきりしている。／文字の大きさもちょうどよく見やすいものであったと思います。

『おくりびと』
大きく感じた。／字が大きくみやすかった。／くどくなかった。

『耳をすませば』
聞き逃しそうなセリフがはっきり分かる。／セリフ通りの字幕で耳で聞きながら字幕も読みました。何回も見た映画ですが、より内容もわかり、じっくり鑑賞できて良かったです。字幕の位置で誰のセリフかもわかりやすかったのではと思います。／文字も大きく、判りやすく適切な内容であった。／分量が適当だった。／子供にわかりやすいようにフリガナがあった。／耳が聞こえない人も一緒に楽しめるから。

『くるりのこと。』
はっきりとした字体でした。／ほとんど字幕は見てないが、気にならない程度だった。／一回でサッと読みやすい。

『牛の鈴音』
色分けされている点。／途中で、耳をふさいでみてみたらいいと思って、字幕を頼りに想像してみました。「牛の鈴の音は聞いてみたい」と思うでしょうね。／文字が適量である。

『猫の恩返し』
思っていたより邪魔にならず自然にみられた。／セリフがわかりやすい字になって、違和感がなかった。／適度に簡略されていて、みやすい。

『老人と海』
画面に対してスピードもよかった。／やはり方言などがある為おしゃべりの部分は字幕は助かった。／わかりやすくよかった。／あったほうがいいが、すぐ消えて読みそこなうことがありました。／普通の字幕は下にあるが、字が大きくて、横にあったのでよかった。／もしないとしたら分かりにくかった。

『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』
字体も大きさもよかった。／会話は耳より聞こえているのに、無理なく自然に字幕も読んでいたのことに、自分自身もびっくりした。／違和感はありませんでした。／画面の分量としてはわずらわしくなかったが微妙なニュアンスまで伝わっているのか疑問を感じた。（上映後の東監督の話で安心した。）／最初はなんだか、いろいろと見えたり、聞こえたりと情報が多く感じましたが、途中からは気にならないくらいここちよく観ていました。

▼②字幕がわかりにく、回答理由

『武士の家計簿』
画面に集中できない。

▼③字幕の分量が多く感じた、回答理由

『武士の家計簿』
つい字を読んでしまうので少し疲れた。

『猫の恩返し』
まだ小学生なので、読めない字もありました。

▼④その他、回答理由

『牛の鈴音』
視覚他情報を伝える手段は多かったが、一つ情報量が多く長時間は疲れると思った。

▼⑤特になし、回答理由
違和感がなかったという意味で／通常の劇場での字幕とは違い文字が見やすかったです。／特に気にならなかった。／普通に感じた。／意識しなかった。／外国語の字幕と同じ程度。

(3)副音声について

①副音声がわかりやすい…238　②副音声がわかりにくい…8
③副音声の分量が多く感じた…46　④その他…19
⑤特になし…20　⑥未記入…36

《④その他》の意見

『武士の家計簿』
わかりやすかったのですが、もう少し音量が小さくてもよいのでは…。／初めての副音声だったので、始めはとまどったが後は慣れました。

『ニセ札』
わかりやすかったのですが、もう少し音量が小さくてもよいのでは…。／やや早口に感じる。登場人物の名前が覚えにくいので、シナリオに工夫が必要と感じた。／雰囲気に合わせた副音声になっていない所もあった気がする。

『おくりびと』
ライブだったので、昼にみた「武士の～」に比べて全く違和感がなかった。よかった。すごく上手いと思った。／最後の製作の部分は要らないのでは。

『耳をすませば』
ぼんやり見ている場面が説明を受けることによって目を向けるきっかけになった。おもしろかった。／とてもこころよくきけました。

『くるりのこと。』
画面より早く出ることがあり、良くなかった。／難聴ではないので集中しにくい。／気になっていたのが段々そうでなくなった。のですが、何といっても視覚障害者の方がどうとらえるかということでしょうね。

『牛の鈴音』
鑑賞の邪魔。／通常の音が低く感じることあり。

『猫の恩返し。』
細かい情報を聞きながらみるのは意外によかった。自分で考えてもいなかった所もあり、より違った思いでみれた。／ナレーションが入っていてわかりやすかったです。

『老人と海』
誰なのか、主観的だったので、有名人なのか、それが気になった。／フフフッという女性の笑い声が多く、あまりそれはいらなかったように思った。

『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』
明確すぎて、耳につくときもあり。声が高い感じがした。(声の質の好み?)もう少し年配の方がよかったかも…。／通常の音が低く感じることあり。

(4)(3)の回答について、その理由をお聞かせ下さい。

▼①副音声がわかりやすい、回答理由

『武士の家計簿』
健常者にとっては少しわずらわしいが、障がいを持った方にはより理解できると思いました。／時々ジャマに感じる時があった。／視覚障害者の立場になったらわかりやすいだろうと感じた。／見ただけではわかりにくい部分も説明によって分かりやすくなりよかったです。／テレビの副音声はうるさく感じますが、今日は素直に聞けました。／速度が適切。／映画の内容が詳しくわかりやすかったです。

『ニセ札』
視力が悪い方なので、副音声が頼りになった。音があると落ち着く方なので、個人的にとても良かったです。／意外と聞きやすかったです。／映像だけでは分からない情報(説明)が得られるので。／小説の文のようで聞き易かった。／聞き取りやすかった。／時々、目を閉じて鑑賞していましたが、頭の中で状況が描きやすいものであったと思います。／女性の声で聞き取りやすい。／情景がよく伝わってきてよかったです。／一文が短くまとめられていて、景色の描写もとてもよかった。

『おくりびと』
すばらしかったです。／特に違和感がなかったので。／はっきりとした発音でした。／初めての体験だったけど、音のある世界は本当にすばらしいと感じた。／人の声はあたたかいと思いました。心地良く映画を見れました。／目を閉じても様子が頭に浮かんできた。／弁士の語りは目をつむっても(目が見えない人)にもよくわかりよかった。／情景を解説してくれたので。／邪魔にならず、よかったです。むしろ、解説されているようでわかりやすかった。／画面、音声にも邪魔になる気がしなかったので。／はじめての経験であり、はじめは「邪魔になるかな」と思っていたが、気がつかないうちに、自然なものとなっていた。むしろ、独特の世界観をかもしていたようにも思う。／副音声の佐々木さんは分かりやすかった。言葉がはっきりしていた。／すんだ声で、ほんとうに情景がよくうかんできました。

『耳をすませば』
なんとなく見えている風景や状況がよりはっきり分かるので良い。／あらためてじっくり堪能できました。声もすてきで、タイミングもバッチリで目をとじて聞いていたりしましたが、場面を想像しながら楽しめました。とてもよかったです。／映画に集中して全てを把握するのは大変。健常者にとっても理解を助けてくれるので、とてもよかったです。佐々木さんの声、ステキでした。／目を閉じていても、副音声のおかげで情景がうかびあがってよかったです。／最初は、多く感じたけれど慣れてくると、あまり気にならなくなった。／小学生にも分かりやすかった。／初めてのライブで副音声を聞けて、新鮮でした。映画の臨場感がよく伝わりました。／声が聞きやすく、わかりやすかった。／弁士による説明がよかった。／初めての経験だったけど、画面の説明になって、子供から細部まで楽しめる作品になったと思う。

『くるりのこと。』
大きな声でした。／最初に設定を説明されたのでとてもわかりやすくてよかったです。

『牛の鈴音』
大変よかったです！ありがとうございました。／目をとじてみたらいいと思いましたが、やっぱり美しい映像は見ずにはいれませんでした。1つだけ、「ストップモーション」は要らないかなと感じました。／内容や情景がわかりやすかったが、前に見た映画と違った印象を受けた。副音声がない方が印象が強かった。どちらがいいかわからない。

『猫の恩返し』
字が読めないのでわかりやすく楽しめました。／あえて目をつぶって聞いてみました。／映像を見ているだけでは意識しないようなことも「解説」になったので良く理解できた。／違和感なくスンナリとききとれ映画をじゃましてなかった。／テンポよく適確だったと思う。／映画のキャラの名前の確認や内容の補足になってよかったです。副音声はむしろあった方がわかりやすくてよいと思いました。／障害はありませんが、小さい子供を連れてきました。まだ字も読めない小さい子供にも副音声はとても良かったと思います。耳から入ってくるので子供も笑いながら見ることが出来て助かりました。／副音声のおかげで映画の場面の細部まで、よくわかった。

『老人と海』
細かな説明があり、イメージしやすい。／最初はうっとおしく感じたが、慣れるとナレーションぽく、内容にも引き込まれていく感じで、おもしろかった。／わかりやすくよかった。／場面ごとに適切に流れていたため。／大変素晴らしいドキュメンタリー。行ってみてその女性に会いたい。また、おじいちゃんにも。

『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』
めりはりがあり、最初は気になったが、途中から全く気にならずわかりやすくてよかった。／意外にジャマだとは感じなかった。むしろ、分かりやすくて良かったと思った。(監督の話を聞いて、出来るだけジャマにならないように試行錯誤された結果だったんですね。)その努力に敬意を払います。／簡潔明瞭なあっさりたんたんとしていてよかった。／自然に聞こえてきて、よかったと思う。／解説あり、わかりやすかった。／わかりやすいが、想像ができない。／出演者の感情表現がそのまま伝わってきました。

▼②副音声がわかりにくく、回答理由

『猫の恩返し。』
目をつむっていても、背景等が浮かんでこないようです。

▼③副音声の分量が多く感じた、回答理由

『武士の家計簿』

最後の出演者の副音声はメインキャストだけでもいいのでは？と感じた。／目が見えない人には必要かもしれないが、一緒に見ていると少し雰囲気がなくなってしまうように感じてしまった。／会話とかぶって、聞こえにくかった。／バリアフリーを初めて見たのでそう感じたのでは、障害の方はどうだったか？／音楽と重なるところが多く、難しいですね。／ちょっとストーリーに集中できなかったり感情移入がむずかしいかな？と。

『ニセ札』

はじめてだったので慣れていないせいだと思う。／画面全体の雰囲気から読み取ることも必要なときもあるのではと思う(余韻？)。必要な人にはイアホンで聞かせるようにしてはどうか。／ちょっとストーリーに集中できなかったり感情移入がむずかしいかな？と。

『くるりのこと。』

ストーリーに集中できない。／場面より先に音声がきてしまうこと。また、その場面での登場人物の心情を言ってしまうことで、解釈の幅が狭くなってしまうということを感じました。これは、課題であると考えます。／音量を少し下げた方が良いかと思った。／慣れないせいだと思います。

『牛の鈴音』

少し早くに感じた。

『猫の恩返し』

一つ一つを説明しすぎだと思います。集中して見にくい…。副音声を初めて見ましたが…。耳に聞こえるトーンが、違うのでうるさく聞こえる。／集中してみれない様な感じがしました(声のトーンも違うので、多すぎてわかりにくい)。／必要な方にはイヤホンなどの副音声でもよいのでは。

『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』

もう少し少ない方が耳だけの鑑賞でも作品のイメージを自分の中で感じることができるのでは？ラジオドラマより多い気がしました。／障害がないので多く感じたのかも。／じっくり味わいたい内容だったので、音は少な目が作品のよさがいきていたように思う。／最初にタイトルが読み上げられる時は非常に気になったが、映画の最中はあまり気にならなかった。

▼④その他、回答理由

『牛の鈴音』

余韻を味わうのに、余計な説明があると邪魔。ドキュメンタリーに副音声は合わない。

▼⑤特になし、回答理由

『おくりびと』

最初気になっていたが、映画にひきこまれて、気にならなくなった。小説を読んでいるような感じだった。

■その他ご鑑賞いただいてお気づいた点があれば教えてください。

・障害はありませんが、小さい声でぼそぼそ話されると聞き取りにくいので、字幕があるといいかなと。
・字幕も副音声もあれば助かる人が多いと思う。
・おもしろかった。
・県庁職員の人が多いかんじ。もっと広告・広く伝わればよいですね。
・健常者にとっても内容のわかり易い作品となり、障がいを持った方と共に楽しめると思います。
・障がいをもった方達が、すごく静かに、全く普通の映画館と変わりなく見ていたのに本当に感動した。
・5人の対談の時。私の前席に韓国の方がいて、通訳をしていたのか、ずっとしゃべり続けていて耳障りでした。次回からは、声を出す方(赤ちゃんも含めて)のための部屋が必要だと思いました。それも1つのバリアフリーでしょう。
・取り組みとして素晴らしいと思うので、是非方法論を洗練してください。
・健常者にもわかりやすかった。
・音響がもう少しよければうれしいです。
・お客さんが少なかったのが残念。もっと広報をしたら人気のある映画ので人が集

まるのでは。
・広く宣伝して欲しい。開演時間をあと30分遅くしてほしい。
・佐々木さんのプロのテクニックは素晴らしいと思いました。
・オープニング作品の舞台挨拶に俳優さんがこられないのはさびしいですね。
・作品に関してではないが、もっと映画祭のＰＲを積極的にして欲しかった。
・時々、目を閉じたり、耳をふさいだりしてみたら、わかりやすいと感じた。よい体験となった。
・このようなバリアフリー映画は初めてでしたが、とても楽しませていただきました。
・初めて見させていただき、良かったです。これからもぜひ続けて下さい。ありがとうございました。
・そろばんの音が耳に残った。
・障害が無い人にも優しい映画になっていたと思いました。ありがとうございました。
・副音声付の映画をはじめて見てちょっととまどった。音を強く感じました。
・字幕はそのうち慣れるものだと思いました。
・はじめて副音声映画をみたが、健常者としてもわかりやすかった。障害者の人はこうして映画を鑑賞するのだなと思った。
・聴覚障害者は補聴器を着用しています。大音量となると耳につんざく音となります。すべての障害者にやさしい映画上映となりますようご配慮下さいませ。
・作品(「酔い」自体も自分と重なる部分があって、酔い映画だと感じました。
・バリアフリー映画はスロープなどのように障がいのある方だけでなく、私にも製作者の意図をわかりやすく伝えていただいたと思います。良い時間をすごすことができました。ありがとうございました。
・依存する酒に限らず人格を失う位の重いものに本人はもとより近くにいる人達の大変さが実感と重なる位であった。家族のいる人は家族が一番のささえであるとも思えた。2時間の長いのも忘れさせてくれた。ありがとうございました。
・俳優さんの声、副音声、文字が一度に始まるので鑑賞しにくいかと思いましたがすぐになれました。
・大変よかったです。
・健常者として、副音声が気になることはないと思うが、ちょっと情報が多くなると疲れるかもしれない。
・副音声がない所が静かに見れた。
・子供用のおしりの下に敷くマットが何個かあったらもっとよかったと思いました。(前のイスの背もたれで、5才の子どもが全然見えなかったので…)
・映画がはじまってから入ってこられる人がけっこういて、前を通られ上映がさえぎられちょっと残念だった。
・副音声は別の映画になるようでとてもよい。
・7才と5才の母親ですが、5才の子はイスに座ると…スクリーンが見えませんでした…。映画館みたいに、何個か下に敷くマットがあったらすごくイイと思いました。
・足元が暗すぎた。
・トークの時の筆記の速さと分かりやすい文字に感動しました。
・監督の話で、老人が亡くなられたと聞き、ショックでした。でも、この映画を通してまだ続いているという考えを聞き、そうなのか～、と納得もしました。
・初めは、色々ときこえすぎていたような感じでしたが、そして、目をつむって耳だけで観ているととてもここちよくきこえました。そして、耳をおさえて観て、耳の聴こえることに、とてつもない感謝がいっぱいにあふれました。このように、この場そして空間、この映画にご縁いただき感謝いたします。耳が聴こえること、目が見えること、ここにこうして来れること、しあわせな楽しい時間でした。すべてに感謝とありがとうございます。
・全席指定なのにアンバランスに席が配置されている。全席自由でもよいのではないか。
☆『老人と海』について☆
・大自然と人間の生活、魚には申し訳ないが、島の人々が拝んでいたように、あんな気持ちが人間には必要。人間としての生き方を考えさせられるいい映画でしたね。
・島の生活ののどかさがよく出ていて、シンプルな生き方がたんたんと表現出来ていた。
・涙があふれ、止まりませんでした。本物だから余計に、伝わりました。カジキマグロが釣れてよかったです。
・とてもよかったと思います。離れた場所での生活観がよく出ていました。
・糸数さんのかじきを釣る映像に感動した。

■バリアフリー映画に期待することや、ご意見ご感想がありましたら、ご自由にお書き下さい。

・みんなが楽しめることが、バリアフリーだと思いました。
・字幕も副音声も全く障ることなく、むしろ映画の内容を更にじっくり鑑賞するためには必要かもしれないとも思いました。障害のあるなしにかかわらず、同じ映画を楽しめる企画はすばらしいと思います。佐賀にいてこの映画を見ることができて、本当にありがとうございました。
・会場が寒かった。
・初めての参加でした。これからも機会があれば(バリアフリーについて)もっと知りたいと思います。
・増加を望む。
・これからも続けてください。
・今回はじめてこの映画祭に参加しましたがいい企画と思っています。これからもずっと続けていって下さい。また参加したいと思います。ありがとうございました。
・映画(牛)の中でおじいさんがいつも頭が痛いと言っていましたが、トークショーの話から現在も元気な様子が伺えて安心しました。
・とても貴重な体験となりました。是非、毎年つづけて頂きたいです。また、子供たちにもたくさんみせてあげたいです。
・非常によい試み?だと思います。ぜひ広く普及するよう頑張って下さい。
・大変良い試みだと思います。司会の方が最後におっしゃっていたように、この取り組みがごく自然なものとして広まっていけばよいなと思いました。
・もっと多くの人に広げていった方がいいと思います。
・長く続いて大きな映画祭になることを祈っております。「フィルムコミッション」と協力して、佐賀でロケされた映画も上映して下さい。
・木村監督の映画を観に来ました。初めからバリアフリーを考えて製作されていたと聞いて素晴らしいと思いました。目や耳のご不自由な方々にもこのような方法で楽しめる映画がたくさんできると嬉しいです。副音声のある映画も楽しかったです。「ワラライフ!」も楽しみにしています。
・初めてのバリアフリー映画を見たけれども、普通に楽しめ、また、障害を持っている方にも楽しめるのでないかと思う。
・とてもすばらしい企画だと思います。ありがとうございました。
・とてもいい経験をさせていただきました。佐々木亜希子さんはとってもうまかったです。
・継続を期待します。
・話してのボリュームをもう少し小さくしたら気にならないと思う。
・映画の内容に観は入ってしまい、障害者の立場ではみていませんでした。最後の出演者の名前が読みづらかったです。
・障害と一言に言っても、身体の様々な部位に発生するものです。すべての障害を網羅する方法って、なかなか難しい面もありますが、一つ一つ障害者の声を聞いて改善していってほしい。そう感じました。本日の取り組み、ありがとうございました。
・初めてこのような映画を見る機会を得ました。もっともっとバリアフリー映画が普及していくことを望みます。今回の取り組みのために尽力された関係者の方々に御礼を申し上げます。
・とてもよい企画だったと思います。
・はじめてのバリアフリー映画。映画にも感想しましたが、大切な事だと実感しました。
・おもしろいと思います。普通に映画館でも見れたらいいと思います。
・大事なことと思います。
・初めて参加したが楽しかった。来場者がもっとふえるといいと思いました。
・今後も恒常的にやってほしい。
・公務員の一人ですが、バリアフリーさが映画祭の事を知りませんでした。広報活動が必要では。
・アバンセで鑑賞する分には親子室というのがあり助かりましたが、小さい子供が居たり、障害を持つ親御さん(たとえば自閉症の子供さんもつ)には親子室のような空間があると、もう少し映画を観に行ける幅が広がるのではないでしょうか。今回の映画祭のように副音声も大事ですが空間も必要かと感じました。バリアフリーとは障害者や高齢者向けなのかもしれませんが、小さい子供のいる家庭にも大変必要となるものだと思います。こういう映画が増えれば(バリアフリースタイル)出掛ける機会も増えると思います。今回は鑑賞させていただいてありがとうございました。

・上映する映画をもう少し一般受けするようなのにすれば人が集まりやすいのではないかと感じました。
・3日間とも通いました。土日は子供と一緒に参加しました。とても楽しくすごしました。ノーマライゼーション。皆な仲よく、普通にできる大人になってくれることを願いながら参加しました。また来年(あるかな?)も楽しみにしています。副音声を聞いて美しい日本語(普通なかなか使わない形容など)に感動しました。
・視覚障害者にとって色の美しさもわかればいいなと思うこともあります。というのも、中途失明の方もいられるので。
・はじめてこういう風な映画をみさせて頂いてこれからも是非参加したいです。
・健常者だけでなく、障害のある方々にも映画を楽しむことが出来て、いいなあと思いました。バリアフリーの映画を作る方々のご苦労を想像し声援を送りたい気持ちです!
・副音声があるのでわかりやすかった。
・こんないい映画は小中学校、教務職員の中でも、もっともっと上映して欲しいと思いました(「老人と海」)。
・大変良いことです。これからもたくさんの映画を期待します。今日は温かい気持ちになりました。
・今日の映画祭を機にバリアフリー映画が普及することを願っています。
・字幕と副音声が気になって、興醒めするのではないかと思っていたが、そうでもなく、楽しめました。ただ単に字幕・副音声を入れるのではなく、バリアフリー作品として仕上げてあるのにとても感動しました。音楽の曲名が表されてよかった。
・アイマスクや耳栓を貸し出していただければ、視覚のみ聴覚のみで映画を楽しむことの実態が分かるのではないでしょうか。
・もっとたくさんの人がみるといいなと思いました。席もたくさん空いててもったいなかったです。監督のお話はきけてよかったです。
・東監督のバリアフリー映画を作っていかれた気持ちがすばらしいと思いました。
・今後もより理解され広まることを望みます。
・上映時間に告知はやめて欲しい。告知は上映時間前にすべき。
・ふつうの映画作品よりドキュメンタリーの方がセリフ、言葉が少ないので文字を読むには良い。
・良い作品を見ることが出来て良かったです。人・牛・すべての物にたましいがあり思いは伝承すると思います。便利さも必要かもしれませんが、便利さの中に大切な物が少しづつ無くしていくような気がします。老人の生き方と牛との絆が心に響きました。
・バリアフリー映画を鑑賞したのが始めてのことでしたので、良くわかりませんが説明を詳しくされて良かったと思います。

視覚障害者の方からの意見・回答数10名
注…(1)障害を受けた時期(2)障害の程度(3)最終学歴

▼『武士の家計簿』
○男性/50代(1)21歳以上(2)弱視
・副音声がわかりやすい
○女性/50代(1)0~5歳(2)全盲(3)専門学校
・副音声がわかりやすい→良かった!はっきりした声で聞きやすかった。
・多分、音声ガイドが無いと最初の方等は全然解らなかったと思う。
・多くの作品に音声ガイドをつけて欲しい。

▼『二セ札』
○男性/40代(1)0~5歳(2)色覚異常(3)4年制大学
・副音声の分量が多く感じた→音量が高かった。

▼『おくりびと』
○男性/60代(1)11~20歳(2)全盲(3)高校
・その他
○男性/50代(1)6~10歳(2)全盲(3)専門学校
・副音声がわかりやすい→手にとるように分かりました。
・生の解説は素晴らしかった。
・こういうのが普通になれば良いな~。

▼『耳をすませば』
○男性/50代(1)6~10歳(2)全盲(3)専門学校

・副音声がわかりやすい→状況が分かりやすかった。
・解説つきだと、目が見えなくても映画が楽しめて嬉しいです。

▼『猫の恩返し』
○女性／60代(2)全盲(3)高校
・特になし。
○女性／19歳以下(1)0～5歳(2)全盲
・副音声の分量が多く感じた
○女性／70代(1)21歳以上(2)全盲(3)その他・女学校
・わかりやすいのですが、洋服の色・形・等も音声であったほうがいい。

▼『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』
○女性／50代(1)0～5歳(2)全盲(3)専門学校
・副音声がわかりやすいや→他の作品に比べて音声ガイドが少なく感じたけれでも、作品の内容に適した音声ガイド量だったと思う。
・これからもこの様なもようしが続けられる事を希望し願っています。

聴覚障害者の方からの意見・回答数19名
注：(1)障害を受けた時期(2)障害の程度(3)最終学歴

▼『武士の家計簿』
○女性／60代(1)0～5歳(2)難聴
・字幕がわかりやすい
・副音声がわかりやすい
○女性／70代以上(1)21歳以上(2)難聴(3)中学校
・字幕がわかりやすい→虫の鳴き声、靴の音、字幕が出て映画たのしいと思った。字幕は下のほうが良い。画面の中だったら、気が散ってしまう。
・副音声がわかりやすい
・入場券、チケット、求めやすくしてもらったら、映画を楽しむ時間が増すと思う。健聴者と同じ情報が自分で感じたり(感情の表現。原作。監督の戸を知りたい。)自分から出て行かないので安心して見せて頂きました。補聴器を使っていますが、映画をみる時、磁器ループだからTに合わせて下さいとありましたが、どんなセットにしたら良いか分からなかった。年を重ねたらくすりを飲む時間を守らなくてはいけないので、上映時間を考えて頂きたいと思いました。字幕は、遅くなっても良いが画面の人物と重ならない様に表示してもらった方が見やすい字幕の大きさはとっても見やすかった。沢山の方が協力され上映されていると思う。私達は、普通に生きられれば良いです。

▼『二セ札』
○女性／60代(1)0～5歳(2)全ろう(3)高校
・字幕がわかりやすい
○女性／60代(1)0～5歳(2)全ろう(3)高校
・字幕がわかりやすい
○女性／60代(1)0～5歳(2)全ろう(3)高校
※「おくりびと」「ぐるりのこと」「老人と海」含む
・字幕がわかりやすい
・老人の82才に、手で取る方法がうまいです。びっくりした。すごく感じました。
・大変良くなりました。

▼『おくりびと』
○男性／70代(1)21歳以上(2)難聴(3)4年制大学学部
・トークショーの時、モニター(画面)に文字が出ていたが、文字がはっきりしてない、モニターがステージの一方(左)だけにしかない、反対側にも欲しい。結局トークはよく分からなかった。映画は最高に良かった。理解できました。
○女性／60代(1)0～5歳(2)全ろう(3)高校
・字幕がわかりやすい

▼『耳をすませば』
○男性／19歳以下(1)0～5歳(2)難聴(3)その他
・字幕がわかりやすい
・副音声がわかりやすい→声がきれいだった。
○女性／19歳以下(2)難聴(3)その他

・字幕がわかりやすい
・副音声がわかりやすい→すごく声がすき通ってあってきれいでした。

▼『ぐるりのこと。』『牛の鈴音』『老人と海』
○女性／60代(1)0～5歳(2)難聴(3)高校
・字幕がわかりやすい→洋画のようなかすれた(フィルム?)字ではなく、ハッキリしていた。字幕にとても助けられた。内容がわかり感動して泣いてしまった。
・副音声がわかりやすい→画面だけ見ているより、情況がのみこみやすい。でも、画面が出ないうちから副音声があるのには違和感があった。
・「老人と海」、すごくすごくよかったです。副音声は「ぐるりのこと」と違う人でしたか?
・これから本当に毎年続けてほしい。心の栄養(映画)です。ありがとう!!感謝!!

▼『猫の恩返し』
○女性／30代
・字幕がわかりやすい→字幕の横のひらがなが読めないことがあって残念です。
・もっと音量を高くしてほしかった。話し声もききたかった。
・初めて参加しました。みたい映画があって良かった。ありがとう。
○女性／60代(2)全ろう
・字幕がわかりにくい

▼『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』
○女性／60代(1)0～5歳(2)難聴(3)高校
・字幕がわかりやすい
・副音声がわかりやすい
・要約筆記、ありがたかった。トークの内容もわかり制作の裏話もおもしろかったです。
○女性／60代(1)0～5歳(2)全ろう(3)高校
・字幕がわかりやすい→感動をしました。字幕つき映画を見て楽しめました。本当にありがとうございました。

▼鑑賞作不詳
○女性／50代(1)0～5歳(2)全ろう(3)高校
・字幕がわかりやすい
○男性／60代(1)21歳以上(2)難聴(3)その他
・特になし
○男性／60代(1)21歳以上(2)難聴(3)高校
・字幕がわかりやすい→もっとバリアフリーが広がって行きたい。
○30代(1)0～5歳(2)全ろう
・字幕がわかりやすい→もっと字幕があれば楽しいかなと思います。
○女性／60代(1)0～5歳以上(2)難聴(3)大学院
・字幕がわかりやすい
・副音声がわかりやすい

その他の障害をお持ちの方からのご意見・回答数40名
[障害の種類]※記載された表記より
上肢(左全指欠く)／両下肢障害3級／身体内部障害・内臓機能不全／体幹／身体不自由／身体2種3級／知的障害精神疾患／下脚2種4級／アルコール／発達障害児

■性別
①男性…15　②女性…24　未記入…1

■年齢
① 19歳以下…2　② 20歳～29歳…2　③ 30歳～39歳…3
④ 40歳～49歳…3　⑤ 50歳～59歳…6　⑥ 60歳～69歳…19
⑦ 70歳以上…4　未記入 1

■鑑賞された作品をお書き下さい。
「武士の家計簿」…11　「二セ札」…3
「おくりびと」…2　「耳をすませば」…4

「くるりのこと。」…1　「牛の鈴音」…5
「猫の恩返し」…8　「老人と海」…3
「酔いがさめたら、うちに帰ろう。」…2　未記入…3

■映画を鑑賞されていかがでしたか。

(1)日本語字幕に付いて

①字幕がわかりやすい…23
②字幕がわかりにくい…0
③字幕の分量が多く感じた…3
④その他…5
⑤特になし…2
未記入…6

《④その他》の意見

『武士の家計簿』
・人物の名前が覚えられて良い。

『牛の鈴音』
・目は大丈夫だから画面だけ見てました。

『くるりのこと。』
・進行的役割が効果的であった。

『耳をすませば』
・とても良かったです。

『二セ札』
・スーパーに気を取られ、映像をあまり見れなかった。

(2)(1)の回答について、その理由をお聞かせ下さい。

▼①字幕がわかりやすい、回答理由

『武士の家計簿』
・大きくて見やすい。

『おくりびと』
・状景にマッチ。

『老人と海』
・沖縄地域の言葉は分かりにくいので字幕が付いてて良かった。

『牛の鈴音』
・初めての経験ではじまりはわずらわしかったが、説明より内容がわかりやすかった。
・この作品は台詞が少ないので読むのが楽だった。
鑑賞作不明
・身体障害者ですが難聴の方は大変良かったと思います。

(3)副音声について

①副音声がわかりやすい…16　②副音声がわかりにくい…1
③副音声の分量が多く感じた…9　④その他…0
⑤特になし…3　未記入…10

(4)(3)の回答について、その理由をお聞かせ下さい。

▼①副音声がわかりやすい、回答理由

『耳をすませば』
・目を閉じて、体験してみました。初めての体験でしたが、わかりやすいものだと感心しました。
・分かりやすいです。

『老人と海』
・普通の話し言葉で良かった。映像とうまく合っていた。

▼③副音声の分量が多く感じた、回答理由

『武士の家計簿』
・私は障害がない為そう感じたのかも知れない。

『耳をすませば』
・複数の声で聞き取りにくかった。

『牛の鈴音』
・台詞や風景の風の音等よりも副音声が大きく(音が高くて)、少し邪魔に感じた。音声をもう少し低くした方が良かったように感じた。

■**その他ご鑑賞いただいてお気づいた点があれば教えてください。**

・動で表す場面より静であらわす場面が多かったことがこの映画(「くるりのこと。」)を素晴らしくしている。
・会場が寒む過ぎて風邪をひかねばよいがと心配しております。
・私は視覚・聴覚障害ではないので、初めは字幕、副音声が少し邪魔のように感じましたが、この作品で、三度目のバリアフリーで見ましたが、最初の時と違った感覚を覚えました。バリアのよさが少し理解できたと思います。
・昨年、活弁士さんのライブの時は作品と一体になっていたように思う。今回は副音声が強く思えた。
・ナレーションも字幕で出来たらいいと思った。難聴の人にもわかりやすいと思った。

■**バリアフリー映画に期待することや、ご意見ご感想がありましたら、ご自由にお書き下さい。**

・誰でもが見れる映画として必要だと思いました。
・とてもよかったと思いました。
・聴覚に障害のある方は本当に大変だと思います。
・副音声での状況説明は映像とうまく合っていた。「アッ、あぶない」とか、気になったところは稲荷神社のお参りのときの「葉っぱ」は「榊」なのかと思った。「ハナマキ」と「ホウカムリ」はどうなのかと思った。大変心地よく見られた。最後のおじいさんの笑顔が良かった。
・誰でもが映画を楽しむことができるようにがんばっておられます事、感謝します。バリアフリー映画がユニバーサル映画(スタンダード)になるよう期待しています。
・今日は、難聴の人を連れてきました。音の無い世界なので目が見えるので字幕があればいいと思いつれて来て、今日はよろこんでついて来てくれました。ありがとうございました。

バリアフリーさが映画祭2010　トークセッション

バリアフリー映画をスタンダードに

2010/11/26 13:40 - 14:15

古川 康（佐賀県知事）　東 陽一（「酔いがさめたら、うちに帰ろう。」監督）
大河内 直之（東京大学先端科学技術研究センター）　川野 浩二（メディア・アクセス・サポートセンター事務局長）
司会：山上 徹二郎（バリアフリーさが映画祭2010総合プロデューサー・シグロ代表）

山上

ご登壇された皆さまから簡単な自己紹介とご挨拶をよろしくお願いいたします。

今回の映画祭の実行委員長を務めていただいております古川康佐賀県知事です。

古川

この映画祭の実行委員長を務めております、佐賀県知事の古川康でございます。

山上さんからこの話をいただいたときは、大変うれしく思いました。今こうしてバリアフリー映画祭を開催していますが、他の町、他の県、他の国、他の星で、同じことをやっているところは私の知る限りありません。つまり世界で最初の、人類が初めて行っている営みと言ってもいいのではないでしょうか。どうぞ、よろしくお願いします。

山上

続きまして、この映画祭のクロージング作品である『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』の東陽一監督です。今回のバリアフリー版につきましては、監督自ら構成とシナリオ、そして字幕もチェックされ、制作に参加されました。

東

正直なところまだ全体的な雰囲気として、映画監督がバリアフリーという形で自分の出来上がった作品に副音声の解説を付ける、あるいは字幕を入れることに、「面倒くさいな」とか「なんか作品が汚されるような気がするな」という感じ方をしている人が多い気がしております。

私はこれまで何本か、こういう試みに参加させていただいてきました。それは日頃から人間の視覚の問題とか、聴覚の問題に強い興味をもっていて、こうした試みが新しい映画の観方を作り出すチャンスになる可能性があると思ったからです。ですから、人任せにするのは嫌なので、はじめから自分から積極的に関わりたいと思ってやらせていただいております。どうぞよろしくお願いいします。

大河内

私はちょっと名前が長いですけれど「東京大学先端科学技術研究センター」というところに勤めております。自身が視覚障害の全盲の障害を持っており、このバリアフリー映画には3年くらい前から関わっております。当事者という立場での発言をさせていただいているのと同時に、バリアフリーを大学で研究している立場でもあります。

バリアフリーと一口に言っても、その領域はすごく広いものです。それは福祉領域だけではない、趣味、仕事、実益など多方面に幅が広がっている分野でもあろうかと思いますので、皆さんとそういう議論ができるといいなと感じております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

川野

こんにちは。メディア・アクセス・サポートセンターの川野と申します。メディア・アクセス・サポートセンターというのは、映画業界の中で問題提起をして、障害者の団体、それと提供団体と言いますか、図書館協会さんとか、そういった皆さんで何ができるのかということを考えている団体です。今現在のデータをお話します。2009年に公開された邦画の数というのは、じつは488作品もあります。このうち日本語字幕が付いたのは52作品で、字幕、音声ガイドが付いたものは2作品です。これは公開時に対応されたものですが、非常に少ないということです。これがアメリカあたりではADA法などがあって意図してやっています。そういったことを日本でもちゃんとやろうというのが、メディア・アクセス・サポートセンターの目的です。

山上

バリアフリー映画の字幕や音声について、少しおさらいをしておきたいと思います。川野さんに、これまで携わってこられたバリアフリー映画関連のお話をお願いします。それから大河内先生からは、バリアフリー映画研究会を通してこれまで取り組まれてきたことをお話いただけたらと思います。それではまず川野さんからお願いします。

川野

最近は3Dの映画が出てきたりしてい

ますけれども、実際にはほとんどの映画館がフイルムなんです。フイルムだと字幕付きの作品も作ることがありますが、主要都市でも2日間くらいの上映です。しかも平日だったりするので、上映自体が少ないわけです。字幕付きをみたいと思っても、観られる日が限られている上に、映画館も少ないという現状になっています。

我々は東京都大田区の蒲田で、古い映画館なんですが、毎週日曜日にそこに行くと最新の映画がバリアフリーで、字幕も出るし音声ガイドも出るかたちで上映しています。もうすぐ『ヤマト』が始まりますが、これも字幕と音声ガイドを付けています。先日までやっていたのが、『ポケモン』とか『プリキュア』です。こういった作品にも、字幕も音声ガイドも付けました。観たい作品を選べるというのが、非常に重要なことだと私は思っています。いつでも映画館に行って、自分で選べることができないだろうか。そこで我々の取り組みとして、字幕のデータをいただいたらサーバー上に置いて、それを映画館に持ってくるようなやり方を、今実験的にやっています。どこでも、観たいと思った時にバリアフリーの映画を観られる、そのような仕組みを考えた取り組みが進んでいます。

大河内

今までのバリアフリー映画というのは、公開後に第三者の手で字幕化・副音声化がなされてきたわけです。それはそれで意味があるものですが、しかし残念ながら、それは映画が出来た後にバリアフリー化の作業が行われるという状況でした。さらに、これまでのバリアフリー映画というのは、映画を作った製作者の意図を崩さないようにやってきたところがあります。じつは、この研究会で作ってきたバリアフリー映画は、そこに製作者が関わることで、始めから製作者側の視点も入れながら作ってきたという経緯があります。そうすると、内容について随分踏み込んだことができるわけです。例えば副音声については、活弁士の佐々木亜希子さんのご協力で活弁という手法を使った新しい副音声が実現しています。視覚障害者だけでなく、他の人にも楽しんでいただけるようなものにしたほうがいいじゃないかということです。字幕についても、話者をわかりやすくするために色を変えようとか、どんな音楽が流れているのかといった情報も字幕で提供しようとか、そういった議論を当事者を含めて、製作者、それから研究者、様々な立場の人たちの議論を経て作ってきています。

大河内 直之

面白い例を紹介します。『猫の恩返し』というジブリ作品があります。この作品をバリアフリー化するという作業を研究会の中でしました。普通にバリアフリー化するのでは面白くないものですから、森田宏幸監督と一緒に字幕と副音声を付けるという仕事をさせていただきました。その時に、僕ら映画を作った人間ではない者が絵を

説明しようとすると、やっぱり事実関係を説明していこうとします。しかし監督さんが実際に関わると、どうなると思いますか？

例えば一つネタばらしをしますと、映画の中で目覚まし時計が出てくるシーンがあります。その目覚まし時計に2つシーンがありまして、1つは牛の目覚まし時計で1つは豚の目覚まし時計なんですね。それはシーンの内容とはそれほど関係ないのですが、監督さんはそこにこだわりたいから、ここは牛の目覚まし時計、ここは豚の目覚まし時計というふうに音声を付けたいとおっしゃるわけです。なるほどなあと思って、そういう細かいところにもこだわっています。逆に副音声を付けないで、ここは元々あった音を聴いて欲しい、そういうこともおっしゃるんです。というわけで1時間の映画ですけれど、音入れするのに10時間くらいかかっています。作り終わった後に森田監督が、「ああ、僕の映画なんだけど、別の第2の映画が出来たような気がする」とおっしゃったんです。そういう意味では、バリアフリー版ではない2002年の『猫の恩返し』と、2009年に作ったバリアフリー版の『猫の恩返し』が、監督さんの中では随分違うものになったとお感じになったようです。

そういうことも含めてバリアフリーというものが、困難を抱えている人たちのためだけにあるのではなくて、もっと広い意味で息づいていくと、それは映画だけでなくて社会全体においても同じことが言えるのかなと思っています。いろいろな人のいろいろな立場で議論を作っていくことが大事だと思いますし、映画がその一助になればいいと感じている次第です。

東

今、大河内さんのお話を非常に興味深く聞かせていただきました。現状ではいろいろな問題がありますので、その点をお話させていただきます。

まずバリアフリーという名称がいいのかどうかということ。とはいえ、それに替わる言葉はなかなか見つけにくいだろうと思います。今はまだ、バリアフリー版を上映すると告知すると、逆に避けてしまう健常者のお客さんたちがいる状態であり、それはあまり面白くないと思うんです。

でも現状では、大河内さんが例に挙げられたように、副音声や字幕が付いていない版のバージョンが1本あり、それとはまた別の楽しみ方のできる副音声と字幕が入っているものが併走するような形が、結果的に落ち着くところではないかと思います。まだ、映画の専門家たちの中には、ややネガティブな受け取り方をしている人もいます。せっかく作ったものに、あるいは初めから作る時にも、なぜ副音声や字幕を付けなければいけないのか、それは作品にとってあまりプラスにならないのではないか、と思う人が実際にはいます。

けれども、映画の歴史を考えてみれば、

東 陽一

すぐわかることなのです。例えば、最初に映画が出て来た時の、写真が動いたことに対する人々の驚きがそうです。フランスで最初に上映された時のエピソードが残っていまして、『列車の到着』という映画がありました。白黒の写真が動いて、向こうから汽車が走って来ると、観客がみんな除けたそうです。当時は、写真が動いて見えることに、驚きがあったということです。映画とはそういうところからスタートしているので、やはりスペクタルと言いますか、珍しいもの見たさというのは、どうしても映画の要素の中にはあると思います。それが時代の要請で、サイレント映画に音が付いて、それから色が付き、さらに一時期はシネラマというものもありました。3台のカメラで撮影した映画を3台の映写機を使って、ものすごく大きな画面に映写するというものでした。その流れを引いているのが、今流行っている3Dです。つまり、これは映画を見世物として見せていこうという流れになります。

一方では白黒映画だけで、サイレントあるいは音をちゃんと有意に使って、芸術的な表現ばかりを追及してきた歴史もあるわけです。カラーになっても、そういう見世物性にあまり足を引っ張られないで、やっていこうという人たちも大勢いたわけです。長い目で見ると、シネラマは潰れました。しかし、このバリアフリーの流れや試み自体は見せ物ではないので、続くのではないかと思います。そして最終的にはいろいろ揺すって落ち着く場所が、一般版とバリアフリー版の両方が平等にあるのが一番面白いなと思っています。

私自身の体験にそれは基づいているのですが、先日も東京で、佐々木さんのライブの副音声と、それに字幕の付いた私の作品の試写会をやりました。自分がそれを作ってから時間が経っているので、その副音声を聴いていると「あれ？こういう言い方をするのか」と、前に自分が副音声なしで作った時に観たのと別の感じが生まれてくるのです。

これから我々がやっていかなければいけないのは、副音声や字幕を付けたりすることが、負担になるのではなくて、作り手としても新しい冒険ができる可能性を持っていると知ることだと思います。そのことを私どもの立場からどんどん伝えていかなければいけないと、現在考えているところです。

古川

東監督から、作り手の中にバリアフリー化の作業をすることについてネガティブな意見もある、といったお話がありました。僕もそうだろうと思います。そうであるからこそ、488本公開された日本映画のうち52本が字幕付きで、字幕と副音声が付いたものはわずか2本だったという状況になっているのだろうと思います。

ただ、例えばハリウッド映画というのは、

古川 康

元々英語がわかる人を前提に作られています。でもそれを、これが元々の音だし、言語だし、表現についてもかなり吟味して脚本を作ったんだから、このままで観ろと言われたら、我々は観られません。その作品を楽しみたいと思ったら、それを吹き替えになるか字幕になるか、いずれにしろ日本語でわかるようにしてもらう必要があります。それはもう、製作者のオリジナルとは違ったものになるということです。でも、そうすることによって、我が国のたくさんの人に外国の映画を楽しんでいただくことが可能になるわけです。

それからこれは質問なのですが、先ほど川野さんから、蒲田の映画館で毎週日曜日に最新の映画が字幕付きで観られる、『ヤマト』も観られるという話がありました。具体的には、イタリアのオペラが来た時に、字幕が横に出てたりしますけれど、ああいうイメージだということでよろしいのでしょうか。

川野

具体的に言いますと、字幕は張り付いている字幕ではないです。張り付かせることも、もちろん出来ますけれど、自分のｉＰｈｏｎｅを持ち込むと、ｉＰｈｏｎｅに映画の字幕が表示されます。もしくはヘッドマウントディスプレイと言われている、目の前に小さな画面があって、字幕が見れます。音声ガイドについてはラジオに同期させて出しています。これは毎週日曜日に、大田区の蒲田でやっております。

古川

今、川野さんからお話があったように、最新のツールやデバイスを使っていくと、そういったかたちでも楽しむことができる可能性が出てきているという気がします。また、大河内さんはまさにそういう最新の機器を、研究・開発されようとしているわけです。あるいは3Dなどは単に面白おかしく観るためのツールというのではなくて、その技術がもっと進めば、字幕や副音声の替わりになるようなものが、実現できるのかもしれません。それはそれで技術の可能性という意味では、非常に面白いのではないかなと思っています。

山上

字幕や副音声というバリアフリー化については、じつは私たちの映画業界よりも放送業界、つまりテレビ番組のほうがずっと先を行っていると思います。実際にも2012年にはテレビの完全字幕化が実現される見通しです。テレビというのは情報が主であるメディアです。それに比べて映画館で観る映画というのは、情報よりむしろ娯楽だと思うのです。その娯楽である映画に字幕や副音声を付ける、それを障害のあるなしに関わらず一緒に楽しめるということが、私は本来の意味でのバリアフリーだと思っています。

東監督からバリアフリーという言葉に

山上 徹二郎

ついてのご発言がありましたけれど、これはいずれもっといい言葉が開発されて定着していくだろうと思います。今はあえてバリアフリーという言葉、これは和製英語ですけれど、これを使うことの意味があるのではないかと思っています。と言いますのは、必ずしも目が見えない耳が聴こえないという障害だけを、バリアと呼ぶのではないと思うからです。私たちの誰もが持っている偏見ですとか差別ですとか、そういった私たちの中にあるいろいろな壁と言いますか、そういうものをこそバリアフリーにしていかないといけない。ですから現状では、バリアフリーという言葉の意味をきちっと伝えていくことも大事なんだろうな、というふうに思っています。

東

前から私も関心を持っている問題が出て来たので、川野さんにまず最初にお伺いした上で、あとで大河内さんのご意見もお伺いしたいことがあります。今、やってらっしゃるというのは、音声は視覚障害者の方たちだけに電波が飛ぶということなんでしょうか？

川野

音声ガイドです。音声ガイドはラジオでやっています。CDで音声ガイドオンリーと映画の本編、2チャンネル作ってCDに入っています。オペレーションして、あと本編の音と合わせながら音声ガイドを送出しているというのが、音声ガイドのやり方です。

東

以前に私の作品で副音声と字幕付きで上映した時に、視覚障害者の方の反応として、面白い意見がありました。それは決して川野さんたちがやってらっしゃるとことを否定するわけではないのですが、今日は電波じゃなくてよかった、ラジオじゃなくてよかったという意見でした。要するにみんなと一緒に、映画から音が聴こえてきて楽しめたということです。

それは、私が考えている映画の鑑賞の仕方にちょっと触れてくるので、関心を持ったんです。映画を観る時は必ず場内が暗くなってきます。大勢で観ていても、自分の孤独が保証され、誰にも干渉されないです。ここで手を叩けとか、強制されないです。向こうのほうで座っている人が傑作だと思って観ているかもしれませんが、「俺はつまんないよ」と思いながら観ることもできるわけです。

つまり、全体がいつも一緒に反応していく傾向がある生の舞台と違って、映画は一人ひとりがそれぞれ勝手なことを考えられる空間です。しかもそれは一人で観ているのではないという、両方の要素があると思うのです。そうすると、映像も音も含めて情報全体をまず同じ状態で与えられたほうがいいのではないか。それを共有すると。ただしその時に、視覚に障害のある人は、絵を観ることはできないけれども、今みんなが観ている、みんなが聴いている音を、同じものを私も一緒にいて体験し聴いていると思うことが、とても大事なのではないかと思います。というふうに、私自身が考えているものですから、この考え方がどうだろうか、大河内さんのご意見を伺いたいと思います。

大河内

FMラジオ、あるいはAMラジオを使って副音声を聴くというやり方が、決して悪いわけではないと思います。それがない映画を観るよりは、副音声がイヤホンでも提供されたら、それはやはりわかりやすい映画になりますので、絶対にそのほうがいいという話です。それは多分、第1ステップなんだろうと思います。

東さんのおっしゃっていたことは、そのもう一つ上の話です。要するに見えないという困難を消すことはできたけれど、それは個別具体的な困難を除去しただけに過ぎない。でも、本当は、もっと観ることを説明するだけの副音声ではなく、見える人と見えない人が同時に映画を共有できるような副音声もありなのではないかということを、東さんはおっしゃられていたのだと思います。そうなってくると、副音声はイヤホンからではなく、スクリーンと同時に全体のスピーカーから流れてくる必要がある。そのとき、一般の人、映像を観ている人の中には邪魔だと感じる人もいるんじゃないかと思います。そういう問題も含めて、副音声という存在、解説という存在も含めて、映画の演出にどのように取り入れていくかというのが、多分、我々の今やっている取り組みになると思います。それが実現した時に、非常に新しい世界を感じていただけるんだと思うんです。

山上

大河内さんにもう一つ、僕のほうから質問があります。以前に大河内さんと話をしていた時に、点字図書館の貸し出し書籍のトップ10の話を聞いてちょっと笑ったことがありました。点字図書館で貸し出しが一番多い書籍の上位は全てポルノ小説だという話を伺ったんですね。このバリアフリー映画の取り組みで大事なことは、バリアフリー化する作品を私たちがどのような観点で選んでいくのか。アクション映画もあれば、アニメーションもあれば、エロティック映画もあります。そういう映画のテーマに関わる問題もあるんだろうなと思いました。そのへんに少し触れていただけたらと思います。

大河内

今は「サピエ図書館」というサイトがあって、インターネット上に録音されたデータや点字のデータを視覚障害を持つ会員がダウンロードして借りることができます。そうしたサイトがなかったときは、電話なり直接図書館に行って、「これこれの本を貸してください」というふうにお願いしていたわけです。その場合、本当に借りたいものの中には言いにくいものもいっぱいありますから。特にポルノ小説なんかは面が割れていると、まして地元だったりすると「あの人、また借りてる」なんて言われたりするわけです。（笑）そうすると、「本当は借りたいけど、今日は真面目な小説にしておこう」ということになります。そういう潜在的なニーズが、インターネット上で本を借りられるようになったことで非常に見えてきたのです。それをまとめた週間ダウンロードランキングとか月間ダウンロードランキングというデータがあります。それをクリックしますと見事に上位にポルノ小説が並ぶということです。いかに皆さん今まで我慢をしていたかということが

わかるわけです。それに対して、「もう・・・!」という人もいるかもしれないですが、僕はとても大事なことだと思っていて、やはりそこに困難があるわけです。

山上

川野さん、今大河内さんからテーマの話がありましたけれど、実際には様々な映画に字幕を提供してきて、そのへんの底辺の広がりという意味ではいかがですか。

川野

私どもが問題として感じていたのは、音声ガイドが、福祉に関わるものしかなかったことです。「そればっかりか」と言われたこともあって、映画は娯楽なので何でもやるほうがいいというか、それが当たり前のことだと思うんです。それで蒲田の取り組みの中で、『ポケモン』や『プリキュア』、それから『仮面ライダー』にも音声ガイドを付けました。『仮面ライダー』はマニアの方を呼ばないと音声ガイドがちょっとわからなくて、非常に難しかったんですけどれも、マニアの方が古い雑誌とかいろいろ持ってきて脚本を書かれました。やはり選べることが絶対に重要だと私は思います。

川野 浩二

山上

このシンポジウムで、いくつか課題もまた出てきたかと思います。バリアフリーさが映画祭の今後の取り組みということにつきまして、古川さんからご発言いただけますでしょうか。

古川

今やっていることというのは、まだ発展途上なんですけれど、今日より明日がきっとよくなるだろうと我々も思っているし、皆さん方も思ってくれていると思います。

ただ、いくつか課題があって、その中の一つのテーマが、先程から出てきております「バリアフリー」という言葉です。この映画祭もバリアフリー映画祭という名前を付けています。これを県庁の職員や実行委員会の皆さんたちが、いろいろな方に紹介して、こうして足を運んでいただいているわけです。しかし、バリアフリー映画と言った瞬間に、バリアフリーの建物でやる映画祭のことなのかとか、映画のテーマそのものが障害福祉とか建物のバリアフリー化とかUD化とかに関わるような映画の内容なのかと勘違いされる方が随分いらっしゃったそうです。ある職員がこう言っていました。「知事、バリアフリー映画という名前そのものがバリアになっていますよ」と。なるほどなと思いました。私はバリアフリーにするというよりも、むしろ障害を持っている方もそうでない方も等しく楽しんでいただけるという意味では、「ユニバーサル」という言葉のほうが似合うのではないかと思っています。でもそれに対しては、「いやいやユニバーサルデザインという言葉は、インダストリアルプロダクツ、工業

製品に対して言う言葉であって、こうした芸術作品とか映像作品には似合わない」とおっしゃる方もいます。このバリアフリー映画というものを、内容はこうであるということをどうやって世の中の人たちにきちんと正しく伝えていくかが、これからの一つのテーマであると感じています。

山上

そろそろ時間がなくなってきましたので、登壇されている皆さんから最後に一言ずつお願いします。

川野

今日じつはシアターシエマさんに寄って来まして、新しいソフトの実証実験みたいなことをやっていました。サーバー上に字幕を置いて、それを日本全国どこでも使えるような方法なのですが実現しそうなんです。ですから佐賀でも、我々が作った字幕をサーバーに置いたものを使っていただいたり、最新作にそういうふうな形で使っていただくようなことができると思いますので、ぜひよろしく今後ともお願いいたします。

大河内

バリアフリーという言葉が出てきて、それがユニバーサルデザインという言葉に発展していって、どっちかと言うとバリアフリーがもっとよくなったものがユニバーサルデザインだというイメージをみなさん持たれていますし、企業さんもそういう意味で使ってこられたかと思います。確かにやっていることは同じなんですが、じつは全然違うもので、両方ないといけないものなのです。ユニバーサルデザインというのはみんなが使えるという意味ですし、バリアフリーというのは困難をなくすということです。困難をなくすというのは、障害者だけが困難ではなくて、例えば古川知事であっても生きている上では困難がいっぱいあると思います。古川知事にとっての困難をなくすこともバリアフリーなわけです。それは結果として、ユニバーサルデザインもバリアフリーも同じ答えが出ることが多いのですが、プロセスが全然違いますが、どうもありがとうございました。

その商品とかコンテンツをどういうふうに呼ぶかというのは、そこに関わっている人たち、それを楽しんでいる人たちで考えていくのが、多分、一番必要なことだと思っています。そういう意味ではバリアフリーとユニバーサルデザインは、共存しなければいけないものだと考えています。そんなことも含めて皆さんとまた、映画のことを考え続けていきたいなと思っております。

東

古川知事が「バリアフリー」よりも「ユニバーサル」という言葉がいいとおっしゃいましたが、僕は個人的にはあまり賛成できません。「ユニバーサル・ピクチャーズ」というアメリカの映画会社があるし、なんだかハリウッドの映画会社の宣伝をやっているような気がして(笑)、私なんかは観に行く気がしないというか、半分冗談ですが半分本気です。(笑)だから私自身は、自分からこういう仕事をする時には、副音声版というふうに考えます。副音声版には必ず字幕が付いているものだという前提で、私自身は副音声版を作るという感じでやってきました。

もう一つは、映画って、いつも映画館で映画を観るとは限らないんですね。DVDとか、将来はブルーレイなど家のテレビで観るというチャンスが増えてきます。そういう時のことをある一つのシーンとして考えますと、例えば視覚障害の子供がいたとして、その母親がDVDを借りて来たとします。そのDVDの中に監督がどんなに心を込めて副音声を作っても、実際にはお母さんが自分で副音声を子供のためにやるというのが、もっともすぐれた副音声ではないのかと、それが僕は原点だと思うんです。子供と母親とのコミュニケーションという意味では、お母さんが付ける副音声に勝てるものはない。そういうことを前提にした上で、我々が映画に副音声を付けていくことは、ある限界の中でここまではできますよと、日本語の文字表現も音声的な表現についても、これくらい面白いことはありますよということはできます。しかし、原点は母と子の、自分の部屋での副音声のコミュニケーションだということを、私自身は忘れてはならないと思っております。

古川

いろいろな課題がありながらも、これからもっと可能性があるということを皆さん感じていただいているものと思います。またこういう機会があれば来ていただいて、あの時とどう変わったのかということを感じていただければと思います。本当にいろいろな意味で、こうした皆さんたちの取り組みというのは、これから大きく変化していくだろうと思いますし、その基本にはとにかく「人が楽しむことの出来る映画を」というものがあるのだと思っております。今日は本当にありがとうございました。

山上

冒頭川野さんから、昨年2009年度、字幕も音声も付いた状態で公開された作品が2本しかなかったというお話を伺いました。2010年の今年、このバリアフリーさが映画祭で取り上げましたオープニング作品『武士の家計簿』、そして東監督の明日のクロージング作品の『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』、この2作品は今年の12月4日に公開される作品です。ですから、この映画祭ですでに2010年度は2作品の公開が保証されているわけです。そういう意味でも、この佐賀の地から始まったバリアフリー映画祭を、私たちは大変誇りに思いますし、引き続き県民の皆さんに支えていただき、周りに広めていっていただければと思っております。古川知事にぜひこのような事業を今後も続けていただければということをお願いして、今日のシンポジウムを終わりたいと思います。ありがとうございました。

バリアフリーさが映画祭2010

公　開　研　究　会

2010/11/26 13:00 - 14:15

バリアフリー映画における字幕表示の未来

中島 佐和子
（東京大学インテリジェント・モデリング・ラボラトリー）

司会

今日はわざわざおいでいただきまして、ありがとうございます。ただ今から『バリアフリーによる映画鑑賞の技術開発及び普及こと業公開研究会』を行います。いよいよ3年目ということで、かなり研究の成果が蓄積されてきました。佐賀県に多大なるご尽力を頂きました佐賀映画祭という傍らで研究会を開催します。またさらにこの後、深めていきたい内容については、皆さんと検討していければと思っていますので、よろしくお願いします。それでは研究会を開催します。

では、早速『バリアフリー映画における字幕表示の未来』ということで、中島さんにご報告をお願いします。

中島

東京大学インテリジェント・モデリング・ラボラトリーの中島佐和子と申します。昨年度から等研究会で実施しているバリアフリー上映会でのアンケート結果をまとめさせて頂きました。今日は、その結果を踏まえながら、私が関わっている、福祉工学や生体工学やバーチャルリアリティの分野からバリアフリー映画の実現のために出来ることについて、「バリアフリー映画における字幕表示の未来」というタイトルで少し具体的なお話をさせていただきます。

今日の「バリアフリーさが映画祭２０１０」でも視覚に障害のある方々のための新しい映画鑑賞方法ということで、活動弁士による活弁手法を使った映画上映が行われています。その一方で、聴覚に障害のある方々に対しては字幕を付記することで映画鑑賞を支援する試みがなされています。現在、洋画や一部の邦画には字幕が付記されていますが、この研究会では、これまでの聴覚障害者のための映画字幕のあり方を見直し、ストーリー性のある映画をより楽しめるような、セリフ以外の環境音や効果音や音楽による映画的な情報を字幕によって表現したいということを一つの目標として取り組んできました。

今日の報告の前半では、これまでの上映会で得られたアンケートを、このような字幕による音響表現を鑑賞者がどれくらい効果的に使うことができたかという点をコンセプトにまとめた結果をお話しします。さらに後半では、字幕のコンテンツの課題や可能性だけではなく、そのような豊かな表現を加えた字幕を映画館などの公共的な場所で、どのようにしてみなさんに提示していくかというシステム側の課題についてお話します。

中島 佐和子

最初に、２００９年に11月11日と12月16日に聴覚障害者情報文化センターと筑波技術大学で行われた「おくりびと」の上映会の時のアンケートをまとめた結果を示します。20代から50代までの聴覚に障害のある31名の方にご協力いただきました。たくさんあるアンケート項目の中でも重要な、以下の３つの項目についての結果を紹介します。

一つ目は、字幕の読み取りスキルについてですが、「登場人物の会話の字幕について、一画面中の字幕の文字の量はどうでしたか」という質問に対して、「多くて読み切れなかった」、「多くて読みづらかった」、「ちょうどよい」、「楽に読めった」、「もっと多くても読める」の５段階で回答してもらいました。二つ目は、字幕による音響表現についての質問です。映画の中の音楽のイメージ化について、「字幕によって、映画館の中で流れている音楽のイメージをつかむことができましたか」という質問に対して、「全くできなかった」、「あまりできなかった」、「まあまあできた」、「大変できた」の４段階で回答してもらいました。三つ目は、映画全体を通じていろんな字幕による音響表現が出てくるのですが、それらの字幕の情報量についてです。「音楽について説明する字幕の量はいかがでしたか」という質問に対して、「非常に多い」、「やや多い」、「ちょうどよい」、「やや少ない」、「非常に少ない」の５段階で回答してもらいました。また、アンケートに参加して下さった聴覚障害者の方々には、２級から６級まで様々な等級の方がいらっしゃったので、アンケート回答の結果を２級の方々と３～６級の方々に分けてまとめてみました。

結果としては、「字幕の読み取りスキル」や「字幕による音楽のイメージ化」については、聞こえの程度による違いはほとんどなく、どちらの対象者群においても「一画面中の字幕の文字の量」については「ちょうどよい」という回答が一番多く、また、「字幕によって、映画館の中で流れている音楽のイメージをつかむことができましたか」については「まあまあできた」という回答が一番多かったです。この上映会では、字幕による音楽の説明を加えたことで、音楽のイメージ化に一部貢献することができたという結果を得られたわけです。一方、字幕による音響表現の情報量の感じ方に

ついては、聴こえの程度により異なる回答結果の傾向が現われました。「音楽につい説明する字幕の量はいかがでしたか」という質問に対して、2級の方々は「ちょうど良い」と回答する場合が最も多いに対し、3～6級の方々は「やや多い」や「非常に多いな」と回答する場合が最も多くなるという異なる傾向がみられました。ここで伝えたいことは、聴こえの程度と字幕の使い方の関係ですね。聴覚障害者の聴こえの程度によって、字幕の使い方や感じ方が違うということが分かりました。参考までに、2006年の厚労省調べによる「障害の程度別にみた聴覚障害者のコミュニケーション手段の状況」についてのデータを載せました。この資料にもあるように、身体障害者手帳でいえば、重度の判定を得ている方の多くが手話でコミュニケーションをとっているということが分かります。日常的なコミュニケーションのスタイルや背景も考慮に入れながら、必要とする字幕の質や量などを検討する必要もあるのではと考えられます。

ここまでの結論として、ストーリー性のある映画を楽しむ上での字幕コンテンツについては、登場人物の台詞など音声以外の情報として、環境音や効果音や音楽などの音響情報に関する字幕表現も役に立つということをある程度把握することができたのではと思います。このことに関しては、映画のシーンのひとコマひとコマは限られた時間になるわけですから、さまざまな情報を文字という方法で表現するという制約の中で、情感や感情的なものを要約的に表現していく方法の開拓が、今後、必要になってくるだろうと考えています。例えば、絵文字などの方法も使ってみるとか、そういったところを研究として進めることで、字幕の質の向上を目指すことも一つの方向性だと思います。そして、もう一つ見えたことは、聴こえの程度によって必要とする情報が異なる可能性があるということですね。これは字幕をどのように提示していくかというハードウェアやシステム構築の問題に関わることになると思います。障害のあるなしに関わらず、いろんな聴こえの程度の方たちが同じ映画館で映画を鑑賞する場合に、どのようにして字幕を提示していくかというところです。

そこで、これまでに開発や研究がされてきた従来技術を調査してみました。聴覚障害者のための字幕に限らないのですが、字幕の提示技術に関しては、字幕投影システムという技術が以前からありまして、これは、映画スクリーン上にプロジェクターで字幕を重ねて投影することによって、フィルム本体を傷つけることなく字幕情報を映像に追加することができることから利用価値が高いシステムと思われます。しかし、個々の映画館で一つずつシステムを導入する上ではコストもかかるということで、主に映画祭などで使われているようです。また、鑑賞者の立場で考えると、すべての鑑賞者が一つの字幕を見ることになりますから、従来の映画字幕の鑑賞スタイルと同様です。最近は、キューテックからウェブシェイクというシステムも開発されています。これは、鑑賞したい映画の字幕情報をサーバーから無線通信を介して携帯情報端末などにダウンロードして、映像と同期した形で携帯端末上に字幕提示を行うというサービスです。字幕コンテンツのデータベース化も進められていますし、ポータブルな情報機器に提示できるという点では、これまでの状況をかなり改善したのではないかと考えられます。ただ、字幕の出力先としての携帯端末については、映画館での光漏れの問題とか、映像を見ながら字幕を読む上では視線の移動が大きすぎて字幕や映像を見落としてしまうなどの問題もありまして、映画字幕提示システムの完成形には至っていないのではと思われます。これらのことから、字幕提示技術の開発はまだ始まったばかりであり、これからは、様々な先端技術を使って、映画を最大限に楽しむことができるような、ストレスの少ない次世代型の新しい字幕提示技術を開発していく時代になっていく必要があると考えられます。

では、誰もが映画を楽しむことができる環境でストレスの少ない字幕提示を実現するためにはどうしたらいいでしょうか。技術的な解決策をいくつかご紹介します。そのひとつに、最近の3Dの発展に伴い頻繁に聞かれるようになった、3D眼鏡を改良した偏光方式による字幕提示技術があります。3D眼鏡というのは偏光フィルタメガネで画像分離し、右眼と左眼に異なる映像を提示することで頭の中で立体像を作り出す技術ですが、それを改良して、眼鏡の有無や眼鏡の種類によって見える字幕を変えるというシステムを開発されている方もいます。これは、いくつかの字幕の中から好きなものを選んで見ることができるという面でよい方法だと思います。ただ、映像投影側、すなわち映画館において、プロジェクターの改良など新たな仕組みの設置が必要になるというデメリットもあります。また、選択可能な言語や字幕の種類にはある程度の限界があると考えられますし、また、ユーザの好きな位置に丁度良い大きさで字幕を提示させるといったカスタマイズ化は難しいと考えられます。この手法も一つとして可能性があると思いますが、もう少し違う角度から解決策を考えてみたいと思います。

バーチャルリアリティの分野では、複合現実感という技術があります。これは、実際の環境に存在する情報と、コンピューターで作成したCGやカメラやセンサなどから得た仮想の情報を重ねて提示させるという技術です。私がこれまでに取り組んできた技術で、映画字幕に特化したものはありませんが、その一例を紹介します。車の運転を支援する目的で開発された複合現実感技術です。フロントパネルの一部に運転者に必要な情報を実景に重ねて提示することで、運転をしながら情報支援を行うというものです。この技術を映画字幕提示技術として応用させて、個人の眼鏡に好きな字幕を提示できるようになれば、聴こえの程度によって必要とする字幕が異なる点などを踏まえて、さまざまな聴力特性を有する人々が同じ映画館という空間で映画鑑賞を楽しむことができるような環境を実現することができるのはないかと思っています。ディスプレイの開発や実用化には少し時間がかかると思いますが、長期的な視点で考えたら、聴覚障害者だけでなく高齢難聴者から子供まで幅広い層に対応した面白い技術に発展するのではと思います。

この辺りで、今日のまとめに入ります。私のような工学系の研究者にとって、聴覚

に障害を有する方々のための映画字幕提示技術において貢献できることは、映画中の音響情報に関する字幕表現の質の向上と、それらの字幕を個人の必要に応じて映像鑑賞をじゃますることなく見ることができるディスプレイの開発という2つがまずあるだろうということです。このようなディスプレイが実用化されれば、字幕を好きなように選べるということになりますし、字幕の大きさや明るさや色なども選べて、弱視の方や高齢の方も含めて、いろいろな方にとって有益なものになるのではと考えています。これからは、聴覚障害者の方々にとって、どのような字幕が最適なのかという評価を踏まえながら、適切な情報を伝えられるようなディスプレイのハードウェア設計を行っていけたらと思っています。以上です。

バリアフリー映画の可能性
～研究者からの視点～

大河内 直之
（東京大学先端科学技術研究センター）

司会

ありがとうございました。続きまして、大河内さんの方からお願いします。

大河内

今回は『バリアフリー映画の可能性』というテーマでお話をさせていただきます。まずは、簡単ですが自己紹介をいたします。私は、緑内障を持って生まれました。緑内障というのは、そもそも60歳を過ぎてから発症する方が多い病気ですが、私は生まれつきその病気を持っていました。

今は、東大の先端研というところで仕事をさせて頂いております。主に取り組む仕事ですが、映画のことで偉そうなことをたくさん言っている訳ですが、実は映画のことは全く専門ではなくて、主に次のような仕事をしています。私の上司が全盲ろうという障害を持った福島智でもあることから、一番メインの仕事としては、触覚で情報のやり取りができるような盲ろうの人たちの支援機器を研究する仕事や、そうしたものを開発する前の段階でエンジニアとユーザとの間に立って使い勝手などを調整する仕事をしています。そもそも私は中島さんのような理系の研究者ではなく、文系の研究者で心理学が専門でした。その中でも、今取り組んでいるような分野にはもともと興味はあった方だと思います。緑があってこの領域に関わっていく中で、実際にプログラムを作ったり、物を作るというよりは、その前の段階でどういう物をどういう理念で作るべきなのか、そもそもこんなにいい技術があってこういうことを必要としている利用者がいた場合に、その間をどう取り持つかなど、そういう中間的な仕事を担うようになってきました。そういう隙間産業みたいな研究が私の仕事だと認識していただければと思います。また私自身が視覚障害者でもありますので、盲ろうの研究にも、そうした視覚障害の立場としての当事者性も一部活かさせていただいております。

それから「福祉のまちづくり」の仕事に

も関わらせていただいております。段差を無くしたり、エレベーターを整備するなどといった取り組みが有名ですが、今関わっている取り組みは、それらを住民参加の形で進めることと、そうした仕組みを構築するということに主眼を置いています。例えば、東京都の練馬区で『福祉のまちづくり条例』が住民参加の中で整備されましたが、その条例づくりの一番最初のところをお手伝いさせていただきました。また、実際に練馬区内にある街区公園を、地域住民と一緒にUD改修するという取り組みにも関わらせていただいています。

大河内 直之

もうひとつ、そもそもこうしたバリアフリー全般の仕事をする理念的な研究として、障害とは何か、人間の持つ能力とは何なのかを捉え直して行くような研究にも取り組んでいます。 また、異なる障害を持つ人同士や重複障害を持つ人たちの交流やコミュニケーションにも興味関心を持っています。特に、現在関わっている盲ろうという障害を持つ人たちの支援に関する研究や実際の活動は、こうした研究活動の原点となっているものです。その他、先端研で実施している各種バリアフリー関連の企業との共同研究にも関わらせていただいています。このように、節操無く何でもやらせていただいているというのが私の仕事です。

さて、映画の話に移りたいと思います。みなさんお分かりかと思いますが、改めて映画においてどのような困難、バリアが存在しているかを整理してみたいと思います。当たり前ですが、映画というものは主に映像と音声を頼りに内容にアクセスして楽しんでいる訳です。したがって、視覚あるいは聴覚に障害を持つ人にとっては必然的に不便な状況が生じるわけです。視覚障害者は音のみで映画を楽しむ、逆に聴覚障害者は映像だけで映画を楽しむわけです。

この状態が、映画というコンテンツから当事者（ユーザー）を遠ざけている可能性があります。しかしながら、一方でそのような状態であっても、映画を楽しみたいという潜在的なニーズを持つ視聴覚障害者も多数いるということが驚くところかと思います。

視覚障害者の場合、映像が見えないわけですが、その状態で一番難しいのは状況の把握が出来ない。それから字幕が読めないことで吹き替えの無い外国語の映画が分からないということになります。もう一つ、そもそも映画館に行くこと自体が難しいというバリアが大きな問題でもあります。これは東陽一監督が「エロバリ」というブランドで作られた「エロティック・ムービー」を、ポレポレ東中野という映画館で一般上映したときに、たくさんの視覚障害者がいらっしゃったのですが、でも実はそれ以上に「本当は行きたいんだけど、なかなか行けない」という方がいらっしゃったようです。つまり、一般の映画であれば、ガイドヘルパーの方にお願いして一緒に行くことは何ら問題ないわけですが、やはり「エロ

ティック・ムービー」になるとそう簡単にはいかないわけです。だいたいガイドヘルパーの方は女性が多く、「エロティック・ムービー」を見たいというニーズを持つ人は男性が多いため、なかなか頼みにくいというバリアがあるわけです。そもそも日本の福祉制度も面白くて、各地域で色々まちまちなのですが、ガイドヘルパーを頼んでギャンブルに行くことを制限していたりするところもあるくらいです。どうして障害を持った人は、清く正しく美しく生きなければならないのか、非常に気になるところではありますが。私だったら絶対そんな制度使いたくないと思います。ちょっと話が脱線しますが、視覚障害者が点字や録音図書を自由にダウンロードして読むことのできる電子図書館があるのですが、その中に週間ダウンロードランキングというものがあります。実は、こうした電子図書館ができるまえまでは、みなさん点字図書館に電話したり実際に出向いたりして「この著者このタイトルの本を貸してください」と職員に口頭で伝えて借りていた訳ですね。それが、自由にダウンロード出来るようになったわけです。ダウンロードするということは、そうした記録も残るわけです。それで週間ダウンロードランキングは実現しています。そうすると、見事にベスト20ぐらいまでポルノ小説になるわけですね。みんなやっぱりダウンロードするんだなと思いました。確かに、図書館の職員に口頭でポルノ小説をリクエストするのは恥ずかしいですよね。それは決して笑いごとではなく、実はバリアなのです。みんなが認めてくれるものであれば、実は借りることは許されるけれども、好き嫌いがはっきりするもの、価値観で分かれるものについては大きなバリアが厳然と横たわっているという現実があります。それを、インターネットという技術が取り払ったという瞬間がこの事例です。

聴覚障害者のバリアについて、私は当事者ではありませんので分かっていないところもたくさんありますが知っている範囲でお話しいたします。よく言われていることは「台詞が分からないので邦画の映画には行かない。でも洋画だったら字幕なので分かるから行く」ということです。そういう聴覚障害の友達を複数知っています。それから、例え字幕が付いていたとしても、ただ台詞を字幕化するのでは分かりにくいので、本当は話者が色や表示する場所で区別できるといいという意見もあります。これは、この研究会でも取り組まれたテーマだと思います。他には、効果音をどれぐらい字幕にするのか、というテーマなどもあって、これも随分この研究会で議論になりました。音の説明はいらないという意見がある一方で、聞こえる人たちの映画の音の感じ方の情報も知りたいという意見もあったりして、これは引き続き議論していく必要があると思っています。

また、これもこの研究会で考えてきたことですが、副音声や字幕によってバリアフリー化されるということは、バリアフリー化されていない映画と比べて具体的になにが違うのか、ということについても再度整理してみたいと思います。副音声解説が付くことで視覚障害者は、場面などの把握が出来るようになりますし、それから字幕があることで聴覚障害者は台詞が分かるようになります。つまり、そこにある映画

館に気軽に行くことがある程度保障されるということです。つまり、分からないものだと諦めていた人たちが、映画という場に参加できるようになるということです。それくらい、バリアフリー化されるということは、障害を持つ人たちにとって大きなことだと思います。視覚障害者を例に、副音声があるとないとではどれくらい違うのかというお話をしてみたいと思います。

個人的な感想ではありますが、私が一番映画を見ていてこんなに解説が付くものと、そうじゃないものでは違うのだということを実感した映画があります。1983年だったと思いますが『南極物語』という映画がありました。かなり人気があってロングランだったと思います。『南極物語』は、前半部分は人間が出てくるのですが、後半部分は殆ど犬とペンギンとアザラシしか出てきません。非常に映像は綺麗なのだそうですが、セリフがありません。ナレーションは少しだけ入っていて、確か犬が鎖を切って自由になるときだったと思いますが、何番目に鎖を切った犬は〇〇だとか、そういうナレーションはあったのですが、後は本当に風の音と犬の鳴き声ばかりで非常に退屈で「なんちゅう映画だ！」と思ったものです。多分そのように思った視覚障害の子供はたくさんいたのかもしれません。その後、今回ちゃんと調べてこられなかったのですが、確かニッポン放送が主催で、目の見えない子供たちに『南極物語』を楽しんでもらいたいというイベントがありました。それは、この研究会で取り組んでいるような活弁の手法という感じではなかったですが、男性と女性の二人の声優さんがライブで解説をしてくれるというものでした。その時、初めて「南極物語ってこんなに面白い映画なんだ！」と思ったものです。本当に、聞いているだけでは面白くないです。淡々と自然の音が、環境音が、犬の叫び声が聞こえるという、そういう世界です。

もう一つ私が大学時代に映画絡みで取り組んだことがありました。それは、字幕にアクセスさえできれば洋画も吹き替えなしで楽しめるのではないかと考えて、その台本を手に入れて、それを点訳するという活動をしていました。当時は、ちょうど視覚障害者にコンピューターが普及し始めた頃で、そのノウハウを使って、台本が手に入る映画を中心に、友達とその台本を点訳していました。そして、その点訳された台本を持って、その映画が上映している劇場に行って、外国語の台詞に合わせて点字の台本を読みながら映画を見るという試みをやっていました。結局、作業が大変で結果的に2本分の映画台本を点訳するにとどまりました。一つは「ナイト・オン・ザ・プラネット」という映画で、ご存じかもしれませんが、タクシー運転手と客のやり取りを淡々と描いている映画でした。ロサンゼルスとパリとアテネとその他いくつかの都市が舞台なのですが、とにかくその地域の言語が出てきて、英語だったらまだ何とか台本が追えるのですが、フランス語とか言語が変わってくると解らなくなってしまうんですね。やはり、いくら日本語の台本を持っていても、知らない言語やタイミングなどが合わないと難しいということが分かりました。その点、もう一つ取り組んだ『遠い夜明け』という映画は、台詞が英語だったので、ある程度は追うことができました。ただ、点字の本で4冊ほどに

なりましたし、やはりずっと英語の台詞を聞きながら点字を追い続けるのは大変でした。この映画は確か1988年だったと思いますが、なかなか吹き替えがされなくて、でもぜひ見たいと思っていて挑戦してみました。

このように、映画にアクセスできるようにする取り組みは、障害を持つユーザにとっては非常に有意義なことだといえるでしょう。したがって、この研究会で我々が取り組んできたことは非常に意味のあることだということです。特に、製作者側が関わって、さまざまな立場の人を巻き込みながら作り上げてきたことは、これまでの取り組みと大きく異なる点ですし、もっとこうした取り組みが広がるべきだとも思います。もちろん、これまで映画のバリアフリー化に尽力されてきたみなさまの取り組みがあって、我々の取り組みがあるのだとも思います。今後、こうして蓄積されたノウハウなども含めて、さまざまな立ち位置の人や団体などが連携していくことが重要だと思います。また、ユーザの視点で、どのような副音声がいいのか、どのような字幕がいいのか、を評価検討するような取り組みも併せて必要だと思います。この研究会も今年で3年目を迎えましたが、もっと多くの障害を持つユーザが参画できるといいのではないかと思います。現状は、研究に携わる当事者が多いですが、もっとさまざまな意見を持つユーザが参加して、異なる意見をぶつけ合いながら、議論を深めることが大切です。

最後に、「バリア」を意識することの大切さについて共有しておきたいと思います。一般的には、次の「四つのバリア」に分けて考えられています。物理的バリア、情報・文化のバリア、法律・制度のバリア、意識・心のバリア。この中で、意識・心のバリアが、その他のバリアを作り出すという整理もなされていたりします。ではその意識・心のバリアをどう取り除けばいいかと言えば、そう簡単には結論が出るものではありません。それは私にもまったく答えがありません。ただ一つ言えることは、人が何か活動をしたり、物を作ったり、考え出したりするときには、かならず何らかのバリアが発生しているのだということを、われわれは自覚する必要があるということです。そうすることで、物を作る段階から、何かを始める段階から、バリアを少しでも軽減できる可能性が出てくるのではないかと考えています。映画についても同様で、これまでバリアがあまり意識されないまま作られてきたことで、そのバリアを取り除くために、副音声化・字幕化に多大な労力がかかってきたわけです。それを、作る段階からバリアを意識しておくことで、そうした労力が軽減されることはもちろんのこと、それ以上に新たな可能性も生まれてくるということだと思います。つまり、単なる「バリアフリー化」ではなく、それがスタンダードになるということだと思います。現状、映画に限らず、放送についても、副音声や字幕は、見えない人・聞こえない人たちのために付けているという意識が大きいと思います。その証拠に、特に副音声については、それが付いていることを知る人は非常に少ないわけです。例えば、実は私も最近初めて知ったのですが、みなさん『笑点』に副音声が付いていることを知っていましたか?「山田くんが笑った顔」とか言っているわけです。若干面白くなかったりもするわけですが、ただそこでやっぱり考えてみると、それをやっているのはおそらく日本テレビに副音声を付けてほしいという要望があって実現していることだろうと思います。「座布団が何枚あるのか分からないので分かるようにしてほしい」などという意見を踏まえて、それを後付で付けているのだと思います。おそらく、副音声の担当者は一人とかそういう世界だろうと聞いたこともあります。そういう取り組みに敬意を払うことと、「ここがよかった、ここをもっと改善してほしい」などという建設的な意見を、やはり当事者から出していかなければ、せっかくのそういう取り組みはなくなってしまうし、そのような取り組みを多くの人に認識してもらうこともできないと思います。そもそも、視覚障害者の中で『笑点』に副音声が付いていることを知っている人がどのくらいいるのかも分かりません。『笑点』に限らず、デジタル化に伴って、さまざまな番組に付いています。NHKの体操とかちゃんと付いているんですよね。ちゃんと付いているので、その体操の解説に従ってやってみましたが、実はよく分からなかったんですね。まあ、これは私の理解力の問題かもしれませんが。

でも、私も含めてやはり誰も意見を出していないから、どうすればより分かりやすくなるのかという議論が起きていないのだと思います。恐らく相当ご苦労されて作られているのだと思います。ですので、当事者はちゃんと評価をしなければいけないですし、そういう取り組みがスタンダードになっていくように継続的に関わっていかなければいけないのだと思います。そうした課題は我々の課題と同じだとも思いますので、そういう領域の人たちとも連携をしながら協力してこの映画のバリアフリー化に取り組めればいいのではないかと思っている次第です。

25分ということでしたが過ぎてしまいました。申し訳ありません。以上で終わらせていただきます。

バリアフリー映画をスタンダードに

佐々木 亜希子（映画活動弁士）
井野 秀一（独立行政法人産業技術総合研究所 主任研究員）
飯泉菜 穂子（学校法人 大東学園 世田谷福祉専門学校）
大和田 廣樹（株式会社ドリームキッド代表取締役）

司会

『バリアフリー映画をスタンダードに』と題しまして、活弁士の佐々木亜紀子さん、世田谷福祉専門学校の飯泉菜穂子さん、独立行政法人・産業技術総合研究所の井野秀一さん、進行を大和田さんにお願いします。

大和田

それでは、本日進行させていただきます、大和田です。一人ずつ自己紹介とバリアフリー映画についての取り組みや、研究会などにふれながら自己紹介していきたいと思います。

私の方は、2004年に「シグロの作品に字幕を付けてインターネットで見せることっはできないか」と山上さんから相談を受けて、「じゃあ、やってみましょう」ということで、『シグロシアター』というサイトを作って、そこで、バリアフリー映画に

ついて取り組み始めました。その後、『ドルフィンブルー』という映画をシグロやうちの会社の方で出資をして、そこに副音声もつけようということになったのですが、「一般的な放送での副音声は面白くない」という意見があったので、今日も登壇されている佐々木さんに活弁を使っての副音声という取り組みをお願いして始めてみました。

その後、昨年公開された『THE CODE／暗号』という私がプロデュースした映画では、劇場公開と同時に副音声と字幕もつけるという取り組みをして、それから、『おくりびと』『老人と海』という作品の副音声の演出をやらせていただきました。

佐々木

こんにちは、活動弁士の佐々木亜希子です。今、ご紹介いただいたように、大和田さんとシグロの山上さんから、2006年に『ドルフィンブルー』と、ドキュメンタリーの『三池』の話をいただきまして、活弁を活かした形の副音声をつけてみようということで、それから早4～5年になります。

十数本ナレーションを入れさせていただいている訳ですが、活弁の歴史から考えると、最初の映画は無声映画で、字幕が入っていましたので、読めば分かるという耳が聞こえない方でも本来楽しめるものだったんですよね。もちろん、洋画に関しては、英語字幕やドイツ語字幕だったりしますので、必ずしもそうではないのですが、日本では必ず弁士が語りをつけておりましたので、日本語版の映画に関しては、耳の聞こえない方、目が見えない方も両方が一緒に同じ場所で楽しむということが、最初の頃は当たり前のことのように行われていた訳です。

そんな風に、映画を空間ごと、会場全体で「やんや、やんや」言いながら楽しむその形態が面白い、もっと伝えていきたいという思いから活動弁士になった私としては、この「映画を副音声の活弁を活かして、障害がある人もない人も一緒に楽しんだらいいじゃないか」という発想に非常に共感いたしまして、「何か私もお役に立てたらいいな」と思いながらさせていただいております。

最初は試行錯誤で、どんなものが面白いのか、情報としてどんなものが必要で、あるいは邪魔になるのかというのが分からないままにやってきましたので、色々な方の意見を聞きながら、なんとなく「こういう感じが丁度いいのかな」というのが少しずつ分かり始めたという段階です。まだまだ、色んな方々の意見を聞きながら、「みんなが一緒に楽しめるような面白いものを」と思っています。

今回、東陽一監督の『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』という作品では、副音声の台本も東監督が作られて、そこに私も「こういうふうに味付けしてもいいですか？」という形でさせていただいたんですが、この間の試写会の時に会場のみなさんが一緒に笑ったり泣いたりして下さり、「こういう形で観る映画があってもいいんじゃないかな」というふうに思っております。もう一つ、昨年の7月からNHKの青山文化センターの方で、『バリアフリー映画講座』というものを持たせていただいて、講師を始めさせていただきました。そこに、「ボランティアでバリアフリー映画作りに参加したい」という志のある非常に熱心な方々がたくさんいらして（もちろん、その方々

大和田 廣樹　井野 秀一　飯泉 菜穂子　佐々木 亜希子

が障害を持っている訳ではないのですが）「一緒に作って、一緒に楽しんでいく」というイメージも共鳴してくれていて、今、台本作りもナレーションも勉強しております。それから、映画によって感動して、その感動がそれぞれの人の成長や豊かな人生に広がりをもたらしていくということにも非常に感銘をしておりますので、バリアフリー映画推進の原動力になっていけばいいなと思っております。

飯泉

飯泉と申します。私は、世田谷福祉専門学校・手話通訳学科の責任者を担当しています。もともと、私自身が手話の通訳を仕事としている上に、映画や芝居のような、人が作った、人の気持ちを持っていくものが大好きなので、色々なつながりの中で、委員会に参加することになりました。

委員会の中での役割としては、今、佐々木さんから活弁という手法を取り入れた副音声という視覚障害の方に対する手法を追求してきたという話がありましたが、私の方では、聴覚に障害を持つ方たちにどのようにバリアフリーが提供できるか、ということで取り組んでいます。今日は、残念ながら聴覚障害の当事者の委員の方がいらっしゃらないのですが、聴覚障害を持っている当事者の方の意見を取り入れながら、主に字幕を制作する時のアドバイス的なことをさせていただいたり、実際に字幕を入れた映画をたくさんの当事者に見ていただくための、色々なグループや団体とのつなぎ役のようなことをさせていただいています。最初にお話のあった中島先生の分析でご協力いただいた筑波技術大学だとか、大人の聴こえない人たちの試写会の時のつなぎ役のようなことです。

聴覚に障害を持つ方は、字幕を見て洋画を楽しむという習慣を持つ人が非常に多いんですね。ただ、邦画については、残念ながらここ何十年間は、やはり「字幕がないので楽しめない」ということが多いんです。私も、聴こえない友人と映画を観に行く時は、洋画が定番なんですが、佐々木さんからお話があったように、かつては、無声映画は字幕が入ってかつ活弁士さんが付くというスタイルでしたよね。

その時代を知っている聴こえない先輩の人たちから、こんな話を聞いたことがあります。休みの日に無声映画をどこかの映画館で楽しんできた先輩たちが、聾学校の寄宿舎に帰ってくると手話でその映画を再現して見せる。後輩たちがみんなで一緒にそれを楽しんで、またそれが聾の人たちの家庭の中に持ち込まれ語られていくという形があった、と。かつては、邦画が聴こえない人たちの生活の中に入り込んでいたし、聴こえない人たちの生活言語である手話という言葉を豊かにするひとつの原動力にもなっていたやに聞いています。ですので、今は研究会で主に字幕のことを取り上げていますが、映画の内容によっては、私の本来の仕事である手話とのコラボとか、これからもっと広げていける提案が出来たらいいな、と思っているところです。

井野

産業技術総合研究所の井野と申します。名前は非常に堅い研究所ですが、平たく言うと、産業や生活に関する本格研究をするような人たちがたくさん集まっているところです。私自身は長らく大学で教員をしながら、北海道と東京で生体工学という、人間のカラダのことを調べて私たちの生活に必要な機械を作ったり、生物の賢い仕組みを探ったりする学際的な研究領域に関わってきました。

ここにいる研究会の皆さんとの最初の出会いは何かというと、東京の駒場にある大学の研究室で、北岡さん、大和田さん、山上さんと福祉機器開発のお話をしたことが始まりです。その時、私たちは聴覚に障害のある人たちの情報保障の字幕を音声認識技術で自動的に生成する機械の開発に取り組んでいまして、その関係で滋賀で開催するアメニティフォーラムで私たちの行っている研究について会場でデモ展示して欲しいと言われました。フォーラムでの展示も無事に終えて、もうお役目が終わったかなと思ったら、それから2～3年後でしたでしょうか、またこういった研究会ができるということで、その趣旨に賛同して楽しく参加させていただいている訳です。

私自身としては、福祉機器あるいはバリアフリー機器を開発する時に、ただこれらを直球勝負で作るというのではなくて、例えば、そのような技術をロボットに応用できないかとか、バーチャルリアリティ技術を逆に福祉機器に上手く活かせないか、という脇道も見ながらの側方展開の研究もしています。

その基盤となるところでは、ヒトを調べるという基礎研究、例えば、生理学や心理学であり、先ほど大河内さんがおっしゃったように当事者あるいはその現場の人たちからのニーズの汲み上げということも大変重要で、それは実はバリアフリーの映画を作っていくことにおいても共通の基盤的な考え方ではないかと思っています。障害を持っている、持っていないだけでなく、人生をいかにバリアなく楽しめるような生活支援の新しい技術を作っていくのかというのが、実は私たちのような研究者にとっても大切なテーマだと思って、皆さんと一緒にこの研究会に参加させていただいています。

大和田

それでは次に、今回のテーマが『バリアフリー映画をスタンダードに』ということなので、どうすればバリアフリー映画をスタンダードに出来るか、という難しくて重いテーマですけど、一言ずつ意見を言ってもらえればと思います。

佐々木

実際、私自身は、活弁もバリアフリー映画だというふうに思っているんですけれども、最近は全国あちらこちらの活弁公演に全盲の方が結構来て下さるんですね。活弁では、ストーリーを語って役にも全部セリフをつけていくんですけれども、「映画が丸ごとよくわかって、イメージも湧いてすごく楽しめました。」と言って観客の温かい笑い声とか泣き声も一緒に楽しんでくださっているんですね。バリアフリー映画でも、あちらこちらで上映会が行われて、同じように多くの方に楽しい映画体験をしていただけるといいな、というふうに思っています。

耳が聞こえない方や目が見えない方がどんなふうに映画を体験しているのか、生活しているのか、普段私たち障害のない人は分からないで過ごしているので、こういうバリアフリー上映会で映画を観ることによって、「あぁ、そういう体験の仕方なんだ」と、一つバリアを取るとか、バリアについて考える映画について考えるという良い機会になっていると思うんですね。ですから、今回のようなこの佐賀のバリアフリー映画祭っていうのは、すごく大きな一歩だなと思います。こういった上映会が全国あちらこちらで出来て行くといいですし、また色んな企業さんが後援、協賛をしてくださって、最近は、少しずつ新作に副音声が付いたり、字幕が付いたりしていますが、そういった映画が劇場で公開と同時に上映されることが増えて、たくさんの方が足を運んでくれて、「面白いね」というふうにならないといけないので、当事者の意見も色々聞きつつ、でも『みんなで楽しめるもの』という難題に挑戦しながら裾野を広げていければな、と思っています。また、共感する方たちの活動を力にして、大きなうねりになっていくといいなと思っています。

飯泉

テーマが非常に大きいんで…。

大和田

飯泉さんの立場でやっていることではなくて、個人的な考えでいいですよ。

飯泉

ありがとうございます。よく、ちまたで言われることですけれども、目が見えない人、耳が聴こえない人、そういう人に配慮したもの、例えば、映画だとかドラマや芝居だとかいうものは、実は、見えて聴こえる人にとっても分かりやすいものであるという言い方をされますよね。ただ、そういう「より多くの人に分かりやすいものをスタンダードにする」というのはどういうことだろうと考えると、「なかなか難しいところがあるのかな」というふうに思うことは多いですね。

この夏、イギリスのロンドンに行く機会があったんですけれども、行くきっかけを作ってくれたのが、ロンドンで芝居関係のことを勉強している全聾の友達なんですが、彼女がいる間に是非ロンドンに行って、芝居の好きな仲間と一緒にウエストエンドの雰囲気などを楽しもう！ということで

行きました。

その時にすごく思ったのは、先ほど大河内先生が「アクセス」という言葉を使われていたと思うんですが、街の中にとにかく芝居とか映画とかの雰囲気がすごく溢れていて、それは見える聴こえる関係なくなんですけど、例えば、鉄道の駅に置いてある芝居に関する描写とか宣伝のパンフレットとかありますよね。そういうものを普通に手に取ると、そこのトップページに近い所に、「このお芝居に関しては、アクセスがつく日はこの日とこの日です。サブタイトル字幕が付くのが何日の何時の回で、手話通訳が付くのが何日の何時の回で、それから副音声がつくのが何日の何時の回」ということが、当たり前のように書いてあるんですね。

芝居に手話通訳が付くなんて、どういうスタイルなのかなと思って、ちょっと友達に聞いてみたんです。私の本来の仕事は手話通訳を養成する学校の教員なんですけれども…イギリスでは、カレッジの中に手話と手話通訳の技法を習得させるコースがあって、そこのコースにドラマコースというのが併設されてる。自己表現とか、芝居の台本を手話通訳する・手話で表すっていうようなことを…つまり、役者さんに通ずるような訓練をしているコースがあるんだそうです。そういうコースを修了した人たちが、いずれは舞台や映画の劇場で手話通訳をするように育っていく…ということを聞いて驚いたんですね。

もちろん、意図的にそういう環境を作っているっていうことは当然素晴らしいことなんだけれども、その環境をみんなが「当たり前」だと思って受け入れているっていうのが、すごく素敵だなと思いました。

さっき大河内先生が、例えば「視覚障害の人がガイドヘルパー頼む時に、ガイドヘルパーを頼める範囲が決まっている」とか、「個人の感情として、エロバリの時にはちょっと女性のヘルパーさんは頼めません」という話がありましたけれども、手話とか聴覚障害の世界も同じところがあって、「個人の楽しみである趣味の世界のためには、基本的に公的な手話通訳の派遣は致しません」という制限がかかってしまうんです。

ですから、そのような制限のある日本で、「聴こえない人、見えない人も当然のように芝居や映画などのエンターテイメントを楽しむことを欲していて、その環境を作るのは当たり前なんだ」「バリアフリーをスタンダードにするのは普通のことで、その結果、より多くの人が分かりやすい環境になるんだ」というようなことをみんなに当たり前に分かってもらうために何をしたらいいのかなというのを、もっと今後、考えていけたらいいのかなと思っています。具体的じゃなくて、ごめんなさい。

井野

バリアフリーがスタンダードとは、どういうことから話していいのか分からないので、私が所属している研究機関でこれから取り組もうとしているヒューマンテクノロジー系の研究課題から映画と健康の話題を拾ってみたいと思います。

今、私は、健康分野と福祉分野の関する重点課題をまとめる作業に参加しています。そこでは、病気を治す薬剤開発の議論とは異なり、「健康とは何ぞや」「(健康を)定量化できるのか」という根本的な問いの議論

が展開されます。健康に大切なものは、血圧であるとか、自律神経系のバランスであるとか、大小に紆余曲折しながらも、ある意味で無難に「運動」というテーマに一度辿り着きます。要するに、「トレーニングしなきゃ」「汗かかなきゃ」という方向性です。

しかし、その中で「動けない人はどうするの?」という反問も出てきます。そうすると、「(トレーニングという名の下に強制的に)運動するというのは苦役じゃないか」という議論も登場し、それならばということで、単なる「運動」だけでなく、休養や休息も含めたバリエーションが健康には大事だねという展開も生まれてきます。マッサージ、リラクゼーション、睡眠という新しいキーワードが次々と飛び出てきます。こういうことを真面目に紡ぎながら、現在でも、様々な分野の研究者と健康の支援技術開発の方向性に関わるディスカッションが続いています。

そのような健康に関する議論や思考実験を進めるなかで、研究者としては、本当にそうなのかということを自ら調べましょうということになります。健康を支える技術としては、ジョギングのような運動もいいけど、できれば運動の難しい人にも手軽にできる何かでそのようなもの(代替)がないかと考える訳です。それなら、一例として、「笑う」ということが健康に何らかの効果を及ぼすかどうかを実際に調べてみようということで、笑うことの健康効果の指標として動脈の硬さの変化を超音波断層像技術を用いて定量的に測定した研究員がいます。

例えば、頚部にある大型の動脈というものはどんなものかというと、非常に太く、柔らかさを持っています。優れた伸展性があります。それは、心臓からの断続的な圧力の変化を受けなければならない部分であるため、柔らかくなっている必要があります。その柔らかさというのは、残念ながら加齢と共に低下します。

その柔らかさの維持(動脈硬化の予防)を、苦役でもなく、楽しくなんとかならないのかなということで、運動の代わりのカラダに与える負荷として映画を取り上げ、コメディーを観た場合とドキュメンタリーを観た場合で血管の硬さを比較してみた訳です。興味あることに、笑いのあるコメディーを観た方が、頚部にある動脈の柔らかさが明らかに高まることがわかりました。これは、24時間後には戻るような一過性のものです。しかし、日常生活の中で楽しく笑って生活していると、もしかすると老化による血管の硬さの上昇(動脈硬化)は、ある程度は防げるのかもしれないということが朧気に推測きます。となると、やはり人生を楽しんでる、笑いがあるということは大事であり、視覚や聴覚に何か障害があっても、自ら映画を楽しめる環境づくりは、これからのバリアフリー社会にとても重要であると思います。

このような笑いの映画の効用のなかで、映画のバリアフリー化を支援する機械の役割、もちろんサポートする人があいだに入っても構わないのですが、ある意味では、少し簡単な機械でその手伝いを出来てもいいのかなと思います。その場合、見る、聞くという機能は、その他の感覚で代用できるのか否か、もし代用できるのであれば、どの程度可能なのかを基礎研究のなかで詳しく調べる必要があると思います。

さらにその時に、見る、聞くとは本来異なる感覚機能である、触覚という皮膚の感覚にうまく情報を伝える装置が出来ると、実はその装置を利用した新たな鑑賞環境で映画を楽しめるとか、また、別用途としては、遠隔臨場感通信やマッサージの機械に転用できるのではないかと思ったりします。

このようなことで、バリアフリーを映画のスタンダードに発展させていく様々な取り組みの過程から、私たちのこころも生活環境も既成概念に囚われずにオルタナティブにあれこれと考える方向性が伸びていくといいなと個人的に考えています。また、障害を持つ持たないというのもひとつの個性であり、加齢によって人々の身体機能も変わりますので、それも自然に受け入れられるような、そんな感じのしなやかさのあるバリアフリー映画や鑑賞の場、それを支える技術が出来るといいなと思っています。

大和田

私の方で思っていることとしては、やはりバリアフリー映画の普及啓蒙をどうしていくかというのがあります。一番分かりやすいところで言えば、トップダウンでやるというのが1つあります。フランスだと、字幕副音声をつけるのは強制的に政府がやらせている。日本でもエコカーだったりETCだったり、そういう普及啓蒙が一気に進む時というのは、やはりトップダウンの方法であった訳です。

今の現状ではそれは無いとすると、草の根活動であり、製作者サイドの意識をどう変えるかというのが1つのアプローチです。邦画では製作者サイドと、洋画については配給会社ですね、そこに対して普及啓蒙し意識の変革をせまるアプローチがすごく大切だと思っています。やはり洋画であれば、買い付けた人たちが当然字幕は付けているのですが、副音声やバリアフリーということも意識を持って取り組んでもらうことが重要です。それから、邦画であれば、作るサイドがバリアフリーの意識を持って作っていくことですよね。研究会としても色んな活動を通して働きかけていくことで、いくつかの映画会社さんにもすでに賛同してもらっています。

それから、インフラの部分がありまして、設備的な話で言うと、中島さんのお話だったり、井野先生が研究されているところと合わせて、やはり映画館サイドの問題があります。『THE CODE/暗号』のバリアフリー版を全国公開と同時に六本木のシアターで上映した時の話ですが、毎日ある回だけ上映してもらいました。私自身がその回に行ってみると、映画館のスタッフが「これはバリアフリー映画ですよ。よろしいですか?」と、チケットを買う時に念を押されました。そのこと自体が、すでにバリアがある感じで、「障害のない人は観てはいけないのか?」と思ってしまいます。実は、そういう映画館サイドの対応も、製作サイドも足踏みさせてしまう一つの要因です。バリアフリーを同時にやることで、潜在的な観衆を減らしてしまう可能性があるのです。障害のない人が入れない環境を作ってしまうので、映画館サイドが敬遠するのです。

その辺りを逆に今、国際会議とかではチャンネルを分けて各国語の対応をしていますし、それこそ今、映画館サイドと映画を提供するサイドとのコンビネーションがあれば、視覚障害者の方も聴覚障害者の方も必要な機械が借りれて障害のない人と一緒に見ることができ、製作者サイドもバリアフリー映画を製作することを敬遠するということもなくなると思います。

最初のトップダウンの話が起これば、また別ですが、地道に色んな方面で普及啓蒙活動をやっていくことが、けっこう重いテーマでもある『バリアフリー映画をスタンダードに』していくことだと思います。実際、佐々木さんの活動でボランティアの人もすごく増えてきてくれて、びっくりするぐらい熱意のある方ばかりで、そういった活動が草の根的に広げていくことになると思います。今回の佐賀の映画祭もそうですけれども、地道にやっていくことが、今の段階では大きなことに繋がっていくのではないかと思っています。

司会

ありがとうございました。以上をもちまして、公開研究会の方を終了させていただきます。お疲れ様でした。

聴覚障害者1人1人が楽しめる映画鑑賞支援を目指して
——3年間の研究総括と今後の課題——

東京大学先端科学技術研究センター
人間情報工学分野
特任助教　中野聡子

Ⅰ　聴覚障害者にとって映画鑑賞を楽しめる字幕とは

聴覚障害者にとって、映画を視聴する際のバリアとなっているのは、登場人物の台詞、環境音、音楽など音に関する情報である。聴者からみれば、これらすべての音と映像が一体となったときに、映画が100％楽しめるのであり、例えば音楽が全く聞こえてこない映画では楽しみが半減してしまうと考えるのが当然である。監督を始め、映画製作者らも「音」情報にはストーリー展開のみならず、さまざまな意味・意図を込めて作品を製作している。そうであれば、聴覚障害者も聴者と同じように映画を楽しむためには、すべての音情報を字幕化して映画の中に取り込めばよいのではないか、と考えたくなるが、それだけでは問題は解決しないということが、本研究会の3年間の実践及び研究の中で示されてきたと思う。

情報処理の側面から言えば、映画視聴では短期記憶を利用して内容を理解することになるが、視覚的情報のメモリースパンは聴覚障害者であっても特に聴者より優れているわけではない。また長時間にわたる視聴では、処理可能限界量に近い大量の情報を取り入れ続けなければならない状態にさらされれば楽しむよりも前に疲労感を伴うことになる。このことは、本研究会が実施した試写会でのアンケート（2009年11月、「おくりびと」試写会、聴覚障害者情報文化センターにて開催）で、「字幕を100％出さなくてもよいから映像を楽しめる余裕が大切である」と書かれた回答に象徴されていると言えよう。

四日市（1999）は、聴覚障害児を対象としてテレビ番組視聴時の眼球運動について実験を行い、全視聴時間における字幕注視時間の割合は30～40％であったとしている。すなわち、1つのシーンの中で字幕を読む時間は30～40％、残りは映像をみる時間にあてられる程度の字幕量及び内容が適当であるといえる。

また、中野（2010）は、重度聴覚障害者1名について映画視聴時の眼球運動を測定しているが、注視点は登場人物の顔と字幕に集中しており、視線の動きは登場人物（複数もあり）と字幕の間の往復運動が多かった。字幕呈示位置が頻繁に変化すると、視線には無駄な動きが増えてしまうため、読みづらいと感じてしまうようである。

試写会でのアンケート結果や上記の先行研究から、本研究会では聴覚障害者向け字幕付与の方針として下記の点に留意してきた。

1　全体方針

（1）すべての音情報を文字化しない。

（2）字幕注視時間がシーン全体注視時間の30～40％以内におさまる範囲内での字幕量、字幕内容とする。

2　登場人物の台詞

（1）呈示位置は画面下部1カ所とし、登場人物によって呈示位置を変えない。（ただし、視線注視点は登場人物の顔に集中しているので、顔の近くに字幕を持ってくることについては検討の余地あり）

（2）画面上に映像のない登場人物や顔の表情が見えない登場人物には、台詞の前に名前をつける。また、ある一定時間ごとに登場人物の台詞の前に名前をつける。

（3）字幕に色は用いない（映像の雰囲気をこわすため）

3　効果音及び環境音

（1）笑い声やため息などの効果音を必要に応じて字幕で表示する。ただし挿入によってはストーリーの雰囲気にそぐわないこともあるため、必ずしも表示するわけでない。（例）「ハハハハハ」→笑いには喜怒哀楽の他、嘲笑、皮肉などいろいろな意味がこもっているが、それらが複雑に絡み合っているような場合は字幕だけで説明しきれず、解釈を大幅に取り違えることもあるため。

（2）環境音についても、必ずしもすべてつけるのではなく、ストーリー理解になくてはならないものから優先につける。

（3）擬態語・擬音語で表示するか、（車が近づいてくる音）といったように解説で表示するかは、その都度内容によって使い分ける。

（4）効果音及び環境音は、画面の左部に斜体で表示する。

4　音楽

（1）基本的に字幕での解説は非常に困難であり、短い解説では聴覚障害者にストーリーの情景や登場人物の心情をふくませて理解できるような表示はほとんど不可能であるため、♪マークなどの表示のとどめるのがよい。

（2）有名な楽曲に関しては、曲名を字幕で表示する。（例…ヴィヴァルディの「四季」より「春」を演奏）

Ⅱ　1人1人の聴覚障害者が自分の状態に合わせて映画を楽しむために

2010年11月26～28日に佐賀市（アバンセ、シアターシェマ）で行われたバリアフリーさが映画祭2010では、「ニセ札」（木村祐一監督）など9作品の上映が行われた。視聴者のアンケートは計433名からの回答があり、このうち聴覚障害者からは19名の回答があった。字幕についてはほとんどすべての聴覚障害者から、「わかりやすい」との回答があり、先述の留意点に従った字幕付与は、聴覚障害者用字幕の基礎方針としてよいのではないかとの自信を得ることができた。

しかしながら、適切な字幕の量や要約の必要性については、聴覚障害者の場合、日本語の力によっても大きく異なってくる。そのため、ろう者では「字幕がわかりにくい」と回答している視聴者もいた。聴覚障害者にとって映画を楽しむには、「たやすく」字幕が読めることが鍵になる。先天性のろう者であり、複文の理解などに時間がかかる場合には、最低限の内容が理解でき

る程度にまで字幕量を減らし、複文を単文に書き換えるなどの要約も必要であろう。また、日本語が苦手なろう者にとっては、アンケート記入といった文字媒体では自分の要望を十分に伝えることが難しい。彼らのニーズを探るには、手話でインタビューを行うなどの調査手法を取り入れなければならないであろう。サンプル字幕を作って少人数のろう者を対象に試写会を行ったり、あるいは視線追跡データを測定するなどの方法で、彼らが楽しめる映画字幕作りをしてゆく必要があろう。

また、バリアフリーさが映画祭２０１０は難聴の参加者も多く、「副音声の声がきれいでわかりやすかった」「副音声がわかりやすく、画面を見ているより状況がのみこみやすい」「音量を大きくしてほしかった。（登場人物の）話し声も聞きたかった」の回答も得られた。デジタル補聴器や人工内耳技術が急速に進展する中、聴取環境が整えば音情報を自分の残存聴力の範囲内で楽しむことができる聴覚障害者も増加している。活弁士によるナマの副音声は、もともと視覚障害者向けのものであるが、本映画祭での活弁士は元アナウンサーであり、音声が非常に聞き取りやすかったということではないかと思われる。映画の登場人物にアナウンサーのような発声を求めるというわけにはいかないが、聴覚活用がある程度可能な聴覚障害者にとっては、こうした台詞の音声についても、増幅・圧縮など音に加工をかけることで、非常に聞き取りやすくなることもある。

このように聴覚障害者といっても様々なニーズを有しているので、１人１人の状態に合わせて映画を楽しんでもらえるようにするには、今後、複合現実感（ＭＲ）を活用した映画字幕表示用シースルーＨＭＤ（ヘッドマウントディスプレイ）システムなどの開発が待たれる。同システムであれば、映像に字幕をはりつける必要がないので、聴覚障害者の日本語力や聴力に合わせて、何通りかの字幕を用意しておき、聴覚障害者は自分に合ったものをメニューから選んで映像と合わせて見ることができる。音についても同様、音処理が可能なヘッドホン等の開発によって、難聴者は映像・字幕・音の３つを可能な範囲で楽しむことができるであろう。

バリアフリーさが映画祭２０１０における聴覚障害者のアンケート回答では、「字幕付で映画が観られてうれしかった！」という感動の声が多く記されていた。『心の栄養』と書いている聴覚障害者もいた。障害を持つ人も持たない人も、より豊かな人生の歩みは、必要最低限の生活におけるバリアフリーのみならず、芸術・文化の領域におけるバリアフリーを実現してこそ、初めて可能になるものである。字幕付映画がかかるのをいつも心待ちにしている聴覚障害者本人としても、障害を持つ人々の喜びの声を糧に今後もバリアフリー映画に取り組んでいきたい。

アンケートについては28ページ参照

参考文献

四日市章（１９９９）聴覚障害児における字幕付き番組視聴時の眼球運動　音声言語医学　40　１２６-１３２
中野聡子（２０１０）視線追跡データからみた聴覚障害者の映画視聴　平成21年度障害者保健福祉推進事業（障害者自立支援調査研究プロジェクト）「バリアフリーによる新しい映画鑑賞の技術開発研究事業「バリアフリー映画をスタンダードに」するために２００９・３８-４０

バリアフリー映画がスタンダードになる社会を目指して
――バリアフリー映画研究会の今年度の取組と、今後の課題――

バリアフリー映画研究会
山上徹二郎

バリアフリー映画の研究・開発は、映画それ自体の新たな表現の可能性を広げる取り組みである。

バリアフリー映画研究会の活動を通して、これまでとは異なる考え方の元で副音声の開発を進めてきた。目の不自由な人や高齢者が、障害のない人たちと一緒に同じ空間の中で映画を楽しむことのできる副音声の開発だ。

その為には、何より映画の著作権者である映画製作者や映画監督が自ら関わることで、副音声それ自体の創造性を積極的に広げることが前提となる。

これまで副音声制作は、主にボランティアの人たちによって支えられてきた。副音声制作に当たっては、映画作品の演出を阻害しないようにという映画の製作者や監督に対する配慮から、「客観的」に控えめに付けられていたものがほとんどだった。それに対して本研究会では、映画の製作者側が主導的に参加することによって、障害のある人たちと直接話し合いながら、作品の主音声には表現されていない新たな情報にまで踏み込んだ副音声を加えることが可能となった。

また、副音声の表現の質をより高めるための試みとして、映画の活動弁士の参加を得て、映画活弁の技術を取り入れた副音声を開発した。その結果、映画館やホールなどでの上映の際に、活弁士が映写スクリーンの脇で副音声の実演をやることも可能となった。このライブによる《副音声活弁》は、障害のある人たちや高齢者のみならず、一般の観客にとっても全く新しい映画鑑賞の機会を広げる結果につながった。

このような活弁を応用した副音声の制作は、目の不自由な人たちに向けた技術としてだけでなく、映画に音声トラックがもうひとつ付加され、音声がより立体的になったことを意味しており、映画表現の広がりと深化を保証するものであるということができる。また映画活弁の副音声への応用という発想は、映画のテーマに沿ったさまざまな副音声の可能性を担保するものでもある。例えば、映画の中に表現された地域性に焦点をあてた、一定の方言を活かした語り口の副音声への活用や、あるいは、映画の各場面に目撃者として立ち合うという設定による、第三の目で伝える副音声ナレーションといった方法などが考えられる。

映画の歴史は１１５年を迎えたばかりであり、現在私たちが鑑賞している映画の表現が、決して最終的な完成形ではない。そのような発想に立てば、これまでの音声

ガイドや副音声、そして私たちが今回開発した《副音声活弁》を含めたさまざまな副音声の試みは、映画の未来に開かれており、その可能性は理想の海に注がれている。

バリアフリー映画研究会では、副音声と同時に、耳の不自由な人たちへの日本語字幕の研究・開発も行ってきた。この字幕制作に関しても、副音声制作時の考え方と同様に、障害のある人もない人も一緒に鑑賞することを前提に試作した。

まず字幕について、字幕による内容表現の検討と字幕の表示技術の研究・開発というふたつの課題を想定した。

従来から外国映画の翻訳字幕での鑑賞が続けられてきたこともあり、映画の字幕については、現状でもある程度確立された観がある。しかし、現状の字幕で耳の不自由な人たちが実際にどのように映画を鑑賞しているのか、字幕の文字の大きさや色、字数と表示時間の関係など、個人差を加味した上で、読みやすさと情報の過不足について、必ずしもこれまで充分な調査と研究がまとめられてきたとは言い難い。

新たな試みとして、特に効果音や音楽、画面に見えていない場所での音の情報などを、字幕に色分けを附したり、字幕の大きさと画面上の表示位置を変えるなどして作成したバリアフリー映画を使って、さまざまな障害のある人たちと障害のない一般の人たちの双方を対象にした試写会を開き、アンケート調査を実施した。

今年度で充分なアンケート調査が実施できたとは言えないが、基本的な地点に立ち戻って、映画字幕についての分析・研究を更に進める必要性があると実感した。

また、映画字幕の表示技術の研究も今年度の課題としていたが、仮称「複合現実感を利用したシースルー型映画字幕提示用ディスプレイ」のハード面での研究は、資金的、時間的制約から具体的な成果を出せるところまで進めることができなかった。

本技術については、実用化を含めて将来性のある研究課題だと思われるので、引き続き経年的な研究・開発を推進していきたいと考えている。

今年度バリアフリー映画研究会で取り組んできた、障害のない一般の人たちや高齢者も一緒に楽しむことのできる視覚障害者用副音声及び聴覚障害者用日本語字幕の研究・開発における今後の課題について、問題点を整理しておきたい。

今年度までの研究は、主に厚生労働省による助成金によって進められてきた。3年間を通して、本研究会の成果は確実に社会化され、また認知されてきていると思われる。昨年佐賀県で初めて開催された『バリアフリーさが映画祭２０１０』や今年2月に滋賀県で開催された『びわこアメニティ・バリアフリー映画祭』など、バリアフリー映画祭開催の広がりは、大きな成果のひとつである。

しかし、一般映画のバリアフリー版制作や、映画館でのバリアフリー版の映画作品の上映・公開は極めて作品数が少なく、公開規模も小さいのが実態である。

元来映画はエンタテインメントであり、商業性のうえに成り立ってきた。そして映画は娯楽ゆえに、単に教育的効果や、啓発・啓蒙という目的に拘泥されることのない、商業性と芸術性を併せ持った自由な表現

として、一般に広く鑑賞され大衆からの支持を得てきた。

バリアフリー映画が発展・拡大していくには、とりわけ商業性の確保が重要だと思われる。しかし、バリアフリー版の制作には、通常の映画製作費に加えて、1作品当たり１５０万円前後のコストが余計に必要となるが、このコストを誰が負担するのかという問題がある。映画の製作者、配給会社、映画館、そして観客の誰か、または全体が負担することが考えられる。

バリアフリー版の制作実務は映画製作者が関与するしかなく、またプリントなどの上映用素材については配給会社が準備・管理し、そして映画館はバリアフリー版上映のための設備を整える必要がある。映画業界の現状としては、バリアフリー映画の必要性は認識しながらも、興行的見地から積極的に取り組むべき案件になっているとは言えない。

本研究会で取り組んできた、障害のある人も障害のない人も、誰もが一緒に見て楽しむことのできるバリアフリー映画の開発が、今後一定の成果と社会的認知を獲得できれば、いずれは「バリアフリー映画がスタンダードになる」時代がくると確信している。

その為には、バリアフリー映画を引き続き制作し、少しでも多くの人に実際に鑑賞し体験してもらうことが必須である。そこに至るには、まだ時間も資金も必要である。映画業界の一層の努力を促しながらも、厚生労働省だけでなく、文部科学省、経済産業省などによる横断的なサポートを切に願うものである。

本研究会の報告書のまとめの時期に、東北関東大震災が発生した。まだその被害の全貌さえ把握できないといった状況の中で、数十万人と云われる被災者への救援が最も急がれている。

このような現状を前にして、バリアフリー映画研究会に何ができるのか。自問を続けるしかないが、本稿でも触れたとおり、娯楽である映画が本来的に持っている希望や楽天性を信じたい。そして、被災地の人々のみならず誰もが、復興を願い、明日へ向かう力を汲み上げることのできる干天の井戸のように、映画が人々の中に在ることを、信じたいと思う。

バリアフリー映画の普及と支援に関する要望を提出

民主党、自民党、公明党のそれぞれの党首宛てに、「バリアフリー映画の普及と支援に関する要望」を提出いたしました。

２０１１年２月４日(金)から６日(日)まで、滋賀県大津プリンスホテルで開催された「びわこアメニティーバリアフリー映画祭２０１１」(「アメニティーフォーラム15」と同時開催)のメインフォーラムにて、栃木県　福田富一知事、滋賀県　嘉田由紀子知事、広島県崎湯　英彦知事、高知県　尾崎正直知事、そして『バリアフリーさが映画祭２０１０』実行委員長の佐賀県　古川康知事ら５県知事と、当研究会の連名で、民主党の石毛えい子議員、自民党の衛藤晟一議員、公明党の高木美智代議員に直接手渡されました。

今後、各党内部ならびに、各省庁においてもこれらの要望について、一緒に議論していただける場面を設定していただきたいと考えております。

民主党代表　　菅　直人　　様
自由民主党総裁　谷垣　禎一　　様
公明党代表　　山口　那津男　様

バリアフリー映画の普及と支援に関する要望

平成２３年２月５日

バリアフリー映画の普及と支援に関する要望

（要望趣旨）

平成２１年に公開された日本映画４４８本のうち、公開時からバリアフリーとしての日本語字幕と副音声ガイドが付与されたバリアフリー映画は、わずか２本に過ぎませんでした。

視覚や聴覚に障碍のある方への情報保障が強く求められるなか、民間レベルでは、数年前から映画などの映像メディアのバリアフリー化に関する調査・研究や上映会の取組が始められています。

一方、かつて娯楽の中心であった地方の映画館が衰退し、娯楽を通した地域の賑いやつながりが失われるなか、誰もが参加できるバリアフリー映画の取組は、障碍のある方への情報保障はもとより、地域を元気にする力を秘めており、自治体を中心に、各地でバリアフリー映画の普及に向けた取組が拡大しています。

こうしたなか、日本映画のバリアフリー化とその普及をより一層推進するため、映画作品のバリアフリー化に対する制作・研究やバリアフリー映画の上映会・映画祭などの広報・普及活動への公的助成制度の創設を要望します。

（要望理由）

「私はいつもヒット映画を見たいと思っていました。当たり前に健常者と同じ映画を楽しめることが夢でした。同じ映画館で健常者、聴覚障碍者、視覚障碍者が共に、同じ時間に同じものを楽しめる・・・こんな映画があるとは思っていなかったので嬉しかったです。」
これはバリアフリー映画を体験されたある難聴の女性の言葉です。

障害者基本法は、情報の利用におけるバリアフリー化を規定しており、また、2010年には、障碍のある方への多様な情報へのアククセスを可能とするため、著作権法が改正され、制作者等権利者の許諾なしに、聴覚障碍のある方のための映画や放送番組への字幕や手話の付与が可能になったところです。

こうした背景のもと、字幕が付与されたテレビ放送は年々増加しており、今後、地上デジタル放送への完全移行により、さらに増加すると見込まれています。

しかしながら、映画における情報保障は大きく立ち遅れており、字幕が付与された日本映画は数えるほどしかなく、さらに字幕と副音声が付与されたバリアフリー映画に至っては、年にわずか数本に過ぎないのが現状です。
こうしたなかで、民間レベルでの自主的な取組は着実に歩を進めつつあります。

2007年、バリアフリー映画研究会が結成され、映画監督やプロデューサーなど映画関係者や研究者、そして障碍のある人間が共同でバリアフリー映画に関

わることで、映画の情感を損なわない字幕や副音声のあり方など、障碍のある人に限定せず、障碍のない人にも同じ空間で一緒に楽しめるバリアフリー映画の研究に取り組まれているところです。

また、2009年には、バリアフリー映画の普及を図るため、滋賀の「アメニティーフォーラム」でバリアフリー映画の上映会が始められました。

そして、2010年には、日本初となる「バリアフリーさが映画祭2010」が佐賀市で開催され、バリアフリー仕様の邦画９本が上映され、３日間で２千名を超える観客が来場したところです。

障碍のある方や年々増加する高齢者が、地域社会のあらゆる分野で、積極的に関わって、生き生きとした「生」を送るために、社会の側にあるバリアを解消することが求められています。

また、かつては、地域社会で人々が集う象徴でもあった地方の映画館は衰退し、映画が担ってきた、娯楽を通した地域社会の賑いや繋がりが失われていることも、大変気になるところです。

誰もが一緒に楽しむことのできるバリアフリー映画の取組は、映画自体の発展を支えるとともに、障碍のある方や高齢者など社会的弱者と呼ばれる方々の社会参加を進め、地方を元気にし、国民全体の福祉向上に資するものと確信します。

こうした状況を踏まえ、視覚や聴覚に障碍のある人はもとより、障碍のない人も、あるいは、高齢者や若者など年齢に関わらず、全ての人たちが同じ空間で楽しむことのできるバリアフリー映画がスタンダードになることを希望し、映画作品のバリアフリー化に対する制作・研究及び、全国各地でのバリアフリー映画の上映会・映画祭などの普及・広報活動への公的助成制度の創設を強く要望します。

平成23年2月5日
栃木県知事　福田　富一
滋賀県知事　嘉田　由紀子
広島県知事　湯﨑　英彦
高知県知事　尾﨑　正直
佐賀県知事　古川　康（『バリアフリーさが映画祭２０１０』実行委員長）

アメニティーフォーラム実行委員長
田中　正博
バリアフリー映画研究会委員長
北岡　賢剛
バリアフリーさが映画祭プロデューサー　兼
びわこアメニティーバリアフリー映画祭プロデューサー
山上　徹二郎

バリアフリー制作現場より

今年度制作したのは、『老人と海』と『牛の鈴音』の２作品。

今年度制作作品は2作品ともドキュメンタリー映画!!で、セリフが少ないところが、自然の美しさをどう表現するかがポイントとなりました。

『老人と海』の制作を開始したのが、2010年4月下旬。副音声の演出を担当したのは、『おくりびと』に次いでの大和田さん。そして、副音声の声と台本作成は玉井夕海さんです。玉井さんは、今まで2作品の台本と演出をされてきましたが、副音声の声は初めてのことです。最初の打ち合わせで決めた方針は、従来のように映像の情報を的確に伝えていくという手法でしたが、数日後…再度打ち合わせを設け、玉井さんに映像をみながら読んでもらうと、副音声の分量がとても多く、映像の余韻に浸る間がない。この日は、冒頭10分程度だが、玉井さん、ここまでもとても苦労したとのこと。と、ここで大和田さんから提案が!例えば、レコーダーで録音しながら、一見で感じたことを語っていったらどうか。そう、中継レポートのように読んで行くのです。

向かえた収録日、5月25日。収録が始まると、まるで玉井さんが映画をレポートしているような雰囲気、かつ、副音声であることもしっかり抑え、ん～おもしろい!カジキマグロを獲る臨場感、じいちゃんとばあちゃんの二人の距離感、仕上がりとご覧になった方の感想が楽しみな収録風景です。大和田さんの演出も、この手法を決めた段階で半分を終えた、と言うのはいい過ぎですが、最後(5月29日)に、音のバランスを整える整音作業を終えれば完成です。この整音作業が予想以上に苦労しました。費段は、セリフや効果音の隙間に副音声を入れて行くのですが、今回は何せ中継ですから、波の音、船の音、鳥の音により注意を払いながらの作業となりました。また1つ副音声の幅が広がったのではないかと思います。

一方、日本語字幕ですが、制作は赤松さん。『老人と海』で話されている言葉は大部分が方言で、それを、正確に間違い取り意味を捉え字幕化することは、時間の勝する作業が続きました。誤行錯誤するも、なかなかうまく進みません。そこで、登場したのが、『老人と海』の企画・製作をし、撮影当時を知る山上さんです。ここから仕上げまでは赤松さんと山上さんの二人三脚。そして5月下旬に赤松さんから字幕のデータを送付いただき完成です。字幕には、セリフだけではなく、何気ない音の名前までも表記されていたりと、さらに映画が深まる字幕版となりました。

『牛の鈴音』は、『老人と海』と僅ほ同時の進行となりました。2009年12月に劇場公開されたということもあり、劇場公開用の日本語字幕はできていました。この既にある日本語字幕を、赤松さんの手によって耳の不自由な方にもより映画を楽しめるように変えていきます。音楽や環境音を加えていく他に、話しているのが誰かという話者=話し手=を示すことも重要。しかし!話者が画面に映っていないシーンが思った以上に多い…通常ならば、括弧等で話者を示すのだが、これだとほとんどのセリフに付けることになりかねなく、字数制限もある。ではどうするか?映画をご覧いただければ分かるとおり、お爺さんお婆さんの字幕には色が付いています。こうした修正を終えた字幕が9月上旬に完成しました。

さて、少し時間を戻すこと6月1日、原音の韓国語を流しながら日本語に吹き替える『ヴォイスオーバー』を、副音声を収録する前に仕上げます。でもその前に、この作品の各担当をご紹介しますと、ヴォイスオーバーを含めた演出と副音声部分の台本作成を松田高加子さん『研究会作品』では『耳をすませば』から参加しています。『副音声弁士』として佐々木さんがヴォイスオーバーの台本作成もあわせて担当し、そしてわたしが、お爺さんの声を樋浦勉さん、お婆さんの声を藤夏子さんにお願いしました。当初は、佐々木さんが、セリフも副音声も全部語り負う!という案もでたのですが、最終的にはヴォイスオーバーを使うことになりました。とはいうものの、お爺さんとお婆さん以外の家族や医師の声は佐々木さんが担当します。キャラクターに合わせながら声色を変えていく佐々木さんです。佐々木さんが先生を務める数室『バリアフリー映画を創ろう』の生徒さんも駆けつけ見守る中、録り終えたヴォイスオーバー。これを元に副音声の台本をもう一度見直し、いよいよ副音声の収録です。

副音声を収録したのは6月13日。続けて17日に整音をし完成させていきます。収録では、既に吹き替えたセリフ部分でも、副音声として抜ける部分は副音声の中に混ぜて読み上げ、整音では、静かに響く鈴音に耳を傾けられるよう繊細な演出を施して、原音と一緒になった時自然に聞こえるようにしていきます。それは、吹き替えの声も副音声も後から付けた音のため、どうしても情報量を多く感じてしまうからです。

今年度は2作品と、前年度までとは作品数が少なかったですが、それぞれの作品にあった副音声表現・字幕表現があるのだと、改めて実感しました。既に行われた上映会の中からも、それぞれに対する貴重なご意見が寄せられています。一つずつの意見が次の作品へ加味されていく事が『バリアフリー映画』をスタンダードにするためにも必要なものだと、制作の現場に立ち会いながら考えています。

以上、制作現場からでした。

平成22年度障害者総合福祉推進事業
「バリアフリーによる映画鑑賞の技術開発および普及事業」
研究員名簿（五十音順）

氏　名	所　属
赤松龍太	（パッソパッソ・字幕制作会社代表）
浅川智恵子	（日本ＩＢＭ東京基礎研究所アクセシビリティリサーチ担当）
井野秀一	（独立行政法人 大東学園 世田谷福祉専門学校）
飯泉菜穂子	（学校法人 大東学園 世田谷福祉専門学校 主任研究員）
大河内直之	（東京大学先端科学技術研究センター　リサーチフェロー）
大和田廣樹	（株式会社ドリームキッド代表取締役）
岡山慶子	（ペパーミントウェーブ実行委員長）
片桐公彦	（全国地域生活支援ネットワーク）
北岡賢剛	（全国地域生活支援ネットワーク）
佐々木亜希子	（映画活動弁士）
高木啓伸	（日本ＩＢＭ東京基礎研究所アクセシビリティリサーチ担当）
田中正博	（全国地域生活支援ネットワーク）
水流源彦	（全国地域生活支援ネットワーク）
中島佐和子	（東京大学 インテリジェント・モデリング・ラボラトリー 特任研究員）
中野聡子	（東京大学先端科学技術研究センター）
西嶋美那子	（東京経営者協会　障害者雇用アドバイザー）
堀田賢豪	（(社)日本広報協会　調査・企画部）
山上徹二郎	（映画製作・配給会社シグロ代表　日本映画製作者協会理事）
山添時彦	（佐々木亜希子マネージャー）

発行日　2011年3月31日
編　集　平成22年度障害者総合福祉推進事業
「バリアフリーによる映画鑑賞の技術開発および普及事業」
デザイン　高石巧
発　行　〒891-1201 鹿児島市岡之原町1005　TEL 099-822-8705　FAX 099-822-4073　E-mail shien-net@crest.ocn.ne.jp
特定非営利活動法人　全国地域生活支援ネットワーク　代表理事　田中正博

『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』バリアフリー版の上映案内

バリアフリー研究会で研究・開発しました、活動弁士による視覚障碍者対応日本語音声ガイド付き映画、および聴覚障碍者対応日本語字幕付き映画の上映を受け付けています。昨年度対象作品『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』の上映を希望される方は、下記要領にて、事務局までお申し込みください。よろしくお願いいたします。

●上映料金について

【入場料をとって上映する場合】人数に応じて計算
◇入場者**１人あたり５００円×人数**が映画の上映料となります。
◇入場者**２００人以下の場合は、最低保証料として上映日１日あたり１０万円**をいただきます。
例）入場者数 １５０名の場合 １００，０００円 ／ 入場者数 ３００名の場合 @５００円×３００名＝１５０，０００円
※入場料金は、１人１，０００円以上での設定をお願いいたします。※上記料金に、消費税は含まれておりません。

【入場料をとらないで上映する場合】人数に応じて一律料金
◇入場者数が**２００人以下の場合は１０万円 ／ ２０１～３００人の場合は１５万円**
３０１～５００人の場合は２０万円　となります。
※５００人以上の大きな上映会の場合は、別途ご相談となります。※上記料金に、消費税は含まれておりません。

●申し込み方法について
申し込み欄に必要事項をご記入の上、FAXまたはメール、もしくは郵送にて事務局までお申し込みください。
なお、劇場公開中の地域、および劇場公開予定の地域での貸出は、日程などを調整させていただく場合がございます。

●上映用テープ、DVDの受け渡し
特に指定のない場合、上映の１週間前までに当方からお送りいたします。上映が済みましたら、速やかに事務局までご返送ください。なお、返送時の送料は主催者側の負担となります。なお、上映用プロジェクターなどの上映機材や上映技師などにつきましても、お気軽にご相談ください。別途料金となりますが、当方にて対応させていただきます。

●上映報告書を提出ください
上映が済みましたら、上映報告書をFAXまたは郵送にてお送りください。上映報告の用紙は上映受付後に当方よりお送りいたします。

●精算及び、支払いについて
上映終了後、映画作品の上映料を当方よりご請求いたします。宣材物などの請求も特に指定のない場合は映画上映料と一緒のご請求となります。請求書と同封の郵便振替用紙でご送金いただくか、当方指定の銀行口座への振込みによるお支払いをお願いいたします。

●アンケート調査へのご協力のお願い
上映会に参加された方々への、アンケート調査をお願いしております。必要な枚数のアンケート用紙をお送りしますので、上映会場にて回収後上映報告書とともにお送りいただきますよう、よろしくお願いいたします。

●上映の手引き
上映会を進めるにあたって、ご不明な点など気軽にお問い合わせください。初めての方にもわかりやすく、上映会の企画から開催までの流れをまとめた、「自主上映の手引き」を無料でご用意しております。

●その他上映作品
『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』以外の下記対象作品の上映も受け付けております。事務局まで気軽にお問い合わせください。
・平成22年度対象作品：『老人と海』『牛の鈴音』　・平成21年度対象作品：『おくりびと』『ニセ札』
・平成20年度対象作品：『THE CODE/暗号』『ぐるりのこと。』『絵の中のぼくの村』『花はどこへいった』

■上映申し込み先（ご不明な点なども、下記までご連絡ください。）
特定非営利活動法人 全国地域生活支援ネットワーク【事務局】〒891-1201 鹿児島市岡之原町1005
tel 099-822-8705　fax 099-822-4073 ／ E-mail shien-net@crest.ocn.ne.jp

『　　』上映申込書　お申込日　　年　　月　　日（NO.　　※事務局）			
●主催者（ご担当者）		●主催団体	
●住　所			
●TEL	●FAX	●メールアドレス	
●上映日　第一希望　　月　　日（　　）	第二希望　　月　　日（　　）		
●上映会場	●上映時間	●計　　回上映	
備　考（希望作品名を明記ください）			

平成22年度障害者総合福祉推進事業

「バリアフリーによる映画鑑賞の技術開発および普及事業」